



C V E

Activity Report 2014

Collaboration of Veterinary Education

**between
Japan and Thailand**

for Sound Evolution of Asia

funded by **AIMS**

(ASEAN International Mobility for Students Programme)

は じ め に

新興再興感染症、食の安全、動物福祉及び環境保全などが先進諸国及び新興国で新たな問題となっており、これら諸問題は地球規模で取り組まないと解決できないとの認識が広がっています。これらの諸問題は獣医学の主要な教育・研究の対象であり、獣医師が責任を持って対処すべき問題です。特に高等教育機関では、この領域を支える人材の輩出が急務となっています。しかしながら、アジアで獣医学の教育・研究レベルは、一部の研究領域を除き、欧米の獣医系大学からは多くの面で遅れているのが現状です。そこで、アジア全体の獣医学をレベルアップする為、北海道大学大学院獣医学研究科は、東京大学と酪農学園大学、そしてASEANを率いるタイのカセサート大学およびチュロンコン大学と、各々の教育資源を活用して共同教育を開始することを決意しました。この事業は、昨年、AIMSプログラム（正式名称：ASEAN International Mobility for Students Programme）の一つとして、文部科学省に採択されたものです。AIMSプログラムは、アセアン諸国を中心とした政府主導の国際的な学生交流事業です。

今回の「大学の世界展開力強化事業」では、初めて海外の大学と長期での学生交換を行いました。3か月にわたる正規の単位互換は、国内における獣医学分野でも初めての実施であったと思われます。これからも、この一石が各大学にとって、そして何より学生さんたちにとっても、未来に向けた得難い糧になるよう、尽力してまいりたいと思います。

大学の世界展開力強化事業国内委員会

各大学の責任者から

【北海道大学】

本プログラムは国際的視野と知技を備えた獣医師の育成を目指すものである。昨年12月に、学生派遣・受入の実質的なファースト・ラウンドが終了した。経験した学生の評価は良好である。日本とタイの間に、数々の会議と準備、互いの現地視察やキックオフシンポジウムを経ての派遣・受入であったので非常に感慨深い。相互派遣の成果を明確に語り総括できる時機では未だないが、少なくとも、元気であった派遣学生はさらに元気になって帰国し、その経験を興奮気味に語ってくれた。それが彼らの、あるいはタイの学生の血肉となってくれることをまずは祈る。昨年暮れから今年1月の国内・国際委員会では、ファースト・ラウンドでの学修と生活に関する問題点を洗い出し、次年度に向けた改善策と具体的計画を練りあげることができた。仔細にわたる率直な議論が行えたのは、本プログラムに関わる日本の3大学とカセサート大学の全ての教職員の情熱と尽力の賜物である。これらの過程を振り返ると、学生達的能力・経験もさることながら、このプログラムの実践が、“世界とつながった高等教育”という観点での能力・経験の向上や“交渉力”を含めた意識の変化を教職員にもたらしている現実に改めて気付かされる。予算削減のなかで（平成27年度は当初申請予算の半額である）困難な運営を強いられるが、何とか工夫をして、このプログラムの実践を我々の研究・教育能力を高めていく好機としなければならない。

北海道大学獣医学部

獣医学部長 稲 葉 睦

【東京大学】

東京大学では 6 名の学生を派遣し、5 名のカセサート大学生を受け入れた。これまで 10 日間程度の短期派遣、短期受入は継続してきたが、1 学期という長期派遣と受入、しかも 12 単位を超える完全な単位互換の経験は、双方の大学にとっては初めての経験であった。東京における宿泊施設、通学手段の確保や財政的問題に加え、単位互換に伴うカリキュラムや時間割の問題が解決できたのは、ひとえに日本、タイ双方の教職員の努力の成果である。学生の成長や人的交流の成果はいうに及ばず、本プログラムの最大の成果は、日本人教職員の意識を変えつつあることかもしれない。本 AIMS プログラムが、時間的にも空間的にも拡大すること、そして EU のエラスムス計画のような大きな成果を産みださんことを願う。

東京大学農学生命科学研究科

獣医学専攻長 前 多 敬一郎

【酪農学園大学】

本年度は酪農学園大学から13名の獣医学科5年生がカセサート大学に短期留学し、6年生のカリキュラムに加わるようになりました。一方、カセサート大学から20名の6年生がこちらのカリキュラムで学ぶことになりました。このプログラムを実施してみて当方に多くの課題も見えてきました。その最大なものは学生の英語力に相当の開きがあり、アジアでNo.1の獣医系大学を目指すカセサート大学との意識の差をまざまざと見せつけられた思いでした。今後は学生に少しでも英語の専門用語を身に付けさせる学群としての取組が必要に思われました。また、タイ人学生の獣医学を学ぶ真摯な姿は、我々教員にとっても刺激的で、彼らの知的好奇心を如何に満足させられるかという次年度に対する課題ももらった12週間でした。

このように学群として本格的な国際化の取組であった事業でしたが、参加した学生の誰しものが満足した笑顔で、それに大きな事故や病気もせずに終了したことは、学群を預かる身としては大変嬉しく思いました。きっとこの経験を残る学生生活や卒業後に最大限に生かしてくれるものと信じたいと思います。

酪農学園大学獣医学群

獣医学群長 田 村 豊

目次

プログラム概要

2014 年派遣学生生活動報告書

北海道大学

稲森 梓

大谷 彬

小笠原 浩平

紺野 紘矢

鳥居 志保

藤本 悠理

森田 鮎子



東京大学

内田 あや

長尾 拓真

庄子 岳

徳増 平

和泉 すみれ

吉竹 涼平



酪農学園大学

天沼 広巳
井上 文博
茨木 美和
城戸 大樹
白石 一郎
杉村 侑里奈
松倉 大樹
小林 洋平
昆 道葉
清水 佑基
武田 尚悟
新田 温子
湯本 森矢



Collaboration of Veterinary Education
Japan and Thailand



目的・必要性

新興再興感染症、食の安全、動物福祉および環境保全などが先進諸国及び新興国で新たな問題となり、これら諸問題は地球規模で取り組まなければ解決できないとの認識が広がっています。

これらの諸問題は獣医学の主要な教育・研究の対象であり、獣医師が責任を持って対処すべき問題です。特に高等教育機関では、この領域を支える人材の輩出が急務となっています。アジアにおいて獣医学は欧米先進国から遅れをとっているのが現状です。そこで、アジア全体の獣医学をレベルアップするため、日本の3獣医系大学とASEANを率いるタイの2獣医系大学が、各々の教育資源を活用して共同教育を開始することを決意しました。



概 要

本事業は、タイあるいは日本の獣医学・文化・社会を学習し、体験することによって、

1. アジア全体を俯瞰できるグローバルな発想・思考力と
英語でのコミュニケーション能力
2. 獣医学の専門家として国際的に通用する知識と技能

を有する獣医師、獣医学教育者および研究者の養成を目指します。

感染症の制圧、食の安全、環境保全などは一国のみで取り組むことはできません。私たち国民の安心・安全は、アジアあるいは世界という、より大きなフレームで捉えなければなりません。

本プロジェクトの最終目的は、アジア各国で検疫・公衆衛生・動物診療などに従事している獣医師および獣医学研究者が、グローバルな意識と高度な知識・技術でこれらの諸問題に対処し、発生した国内で速やかに解決できる基盤を整備することです。

本構想では、日本（北海道大学、酪農学園大学、東京大学）・タイ（カセサート大学、チュラロンコン大学）間の学生相互の派遣と受け入れ、単位の互換制度を整備することで、獣医学連携の強化を目指しています。このことは最終的に AIMS プログラムに基づきアジア全域の獣医師のレベルアップに結実することになります。

世界展開力委員名簿

【北海道大学】

学部長	稲	葉	睦	（国際運営委員）
	石	塚	真由美	
	伊	藤	茂 男	
	大	橋	和 彦	（国際運営委員）
	滝	口	満 喜	
	奥	村	正 裕	
	寺	尾	晶	
	加	藤	大 智	
	池	中	良 徳	
	星	野	有 希	
	高	橋	夏 美	
	大	竹	美智子	

【酪農学園大学】

学部長	田	村	豊	（国際運営委員）
	片	桐	成 二	（国際運営委員）
	山	下	和 人	
	萩	原	克 郎	
	蒔	田	浩 平	
	岩	野	英 知	
	矢	萩	香好子	
	上	森	奈穂美	

【東京大学】

専攻長	前	多	敬一郎	（国際運営委員）
	中	山	裕 之	（国際運営委員）
	久	和	茂	
	西	村	亮 平	
	芳	賀	猛	
	金	井	克 晃	
	平	山	和 宏	

【Kasetsart 大学】

学部長 Apinun Suprasert fvetais
Tanu Pinyopummintr
Patamabhorn Amavisit
Chalernpol Lekcharoensuk

【Chulalongkorn 大学】

学部長 Roongroje Thanawongnuwech
Taradon Luangtongkum
Alongkorn Amonsin
Sudson Sirivaidyapong
Pipat Arunvipas

事業実施内容

内 容		時期 / 期間	開催地 / 行き先	参加者（敬称略）
国内運営委員会	平成25年度第1回世界展開力強化事業 国内委員会	平成25年12月6日	北海道大学	伊藤茂男（北大） 大橋和彦（北大） 寺尾晶（北大） 石塚真由美（北大） 加藤大智（北大） 池中良徳（北大） 片桐成二（酪農） 萩原克郎（酪農） 山下和人（酪農） 蒔田浩平（酪農） 岩野英智（酪農） 中山裕之（東大） 西村亮平（東大）
	平成26年度第1回世界展開力強化事業 国内委員会	平成26年5月23日	テレビ会議	石塚真由美（北大） 大森あけみ（北大） 木村美佳（北大） 西村匡史（北大） 鈴木晴香（北大） 高橋夏美（北大） 大竹美智子（北大） 加藤綾子（北大） 田村豊（酪農） 片桐成二（酪農） 伊藤真美（酪農） 萩原克郎（酪農） 山下和人（酪農） 蒔田浩平（酪農） 岩野英知（酪農） 前多敬一郎（東大） 久和茂（東大） 芳賀猛（東大） 西村亮平（東大） 金井克晃（東大） 神谷夏子（東大） Tanu Pinyopummintr (KU)
国際運営委員会	事業開始打ち合わせ	平成25年12月25日～12月26日	札幌（北海道大学）	伊藤茂男（北大） 稲葉睦（北大） 大橋和彦（北大） 奥村正裕（北大） 寺尾晶（北大） 池中良徳（北大） 田村豊（酪農） 片桐成二（酪農） 山下和人(酪農) 萩原克郎（酪農） 蒔田浩平（酪農） 岩野英知（酪農） 中山裕之（東大） 前多敬一郎（東大） 西村亮平（東大） 久和茂（東大） 芳賀猛（東大） Tanu Pinyopummintr (KU) Patamabhorn Amavisit (KU) Chalermpol Lekcharoensuk (KU) Pipat Arunvipas (KU) Taradon Luangtongkum (CU) Sudson Sirivaidyapong (CU) Alongkorn Amonsin (CU) Roongroje Thanawongnuwech (CU)

内 容		時期 / 期間	開催地 / 行き先	参加者（敬称略）
国際運営委員会	キックオフシンポジウム	平成26年3月1日～3月5日	カセサート大学	稲葉睦（北大）
				石塚真由美（北大）
				大橋和彦（北大）
				滝口満喜（北大）
				奥村正裕（北大）
				寺尾晶（北大）
				加藤大智（北大）
				細谷謙次（北大）
				池中良徳（北大）
				田村豊（酪農）
				片桐成二（酪農）
				萩原克郎（酪農）
				山下和人(酪農)
				岩野英知（酪農）
				前多敬一郎（東大）
				久和茂（東大）
				金井克晃（東大）
				平山和宏（東大）
				神谷夏子（東大）
				米山みどり(東大)
				Apinun Suprasert (KU)
				Tanu Pinyopummintr (KU)
				Patamabhorn Amavisit (KU)
				Chalermpol Lekcharoensuk (KU)
				Anuchai Pinyopummin (KU)
				Chalermpol Lekcharoensuk (KU)
				Pipat Arunvipas (KU)
				Suwicha Kasemsuwan (KU)
				Visanu Boonyaviwat (KU)
				Pornitpa Lekcharoensuk (KU)
				Porchai Sanlithiseree (KU)
				Jaturong Wongsanit (KU)
				Montri Pattarapanawean (KU)
				Suporn Thongyuan (KU)
				Tarin Plukebamrung (KU)
				Papinya Iamsam-ang (KU)
				Taradon Luanglongkum (CU)
				Alongkorn Amonsin (CU)
				Anudep Rungsipipat (CU)
				Sarinee Kalandakanond Thongsong (CU)
				Sudson Sirivaidyapong (CU)
国際運営委員会	Evaluation and Planning Meeting 2015	平成27年1月7日 平成27年1月19日～1月23日	北海道大学 平成27年1月7日、 1月19～1月20日、1月21日 酪農学園大学 平成27年1月22日～1月23日	伊藤茂男（北大）
				稲葉睦（北大）
				大橋和彦（北大）
				滝口満喜（北大）
				奥村正裕（北大）
				寺尾晶（北大）
				加藤大智（北大）
				石塚真由美（北大）
				池中良徳（北大）
				大森あけみ（北大）
				木村美佳（北大）
				鈴木晴香（北大）
				西村匡史（北大）
				高橋夏美（北大）
				大竹美智子（北大）
				田村豊（酪農）
				片桐成二（酪農）
				萩原克郎（酪農）
				山下和人(酪農)
				蒔田浩平（酪農）
				岩野英知（酪農）
				上森奈穂美（酪農）
				中山裕之（東大）
				前多敬一郎（東大）
				久和茂（東大）

内 容	時期 / 期間	開催地 / 行き先	参加者（敬称略）
国際運営委員会	Evaluation and Planning Meeting 2015 平成27年1月7日 平成27年1月19日～1月23日	北海道大学 平成27年1月7日、 1月19～1月20日、1月21日 酪農学園大学 平成27年1月22日～1月23日	西村亮平（東大）
			芳賀猛（東大）
			金井克晃（東大）
			平山和宏（東大）
			大島潤二（東大）
			齊喜千尋（東大）
			Apinun Suprasert (KU)
			Tanu Pinyopummintr (KU)
			Aksorn Saengtienchai (KU)
			Patamabhorn Amavisit (KU)
			Pariwat Poolperm (KU)
			Waraphon Phimpraphai (KU)
			Pipat Arunvipas (KU)
			Visanu Boonyaviwat (KU)
			Chalermkiat Saengthongpinit (KU)
			Chalermpol Lekcharoensuk (KU)
AIMS採択校連絡会	第2回AIMSプログラム採択校連絡会	平成26年1月21日	日本学術振興会麹町オフィス（東京都）
	AIMS 合同シンポジウム	平成26年2月21日	筑波大学東京キャンパス（東京都）
	大学の世界展開力強化事業 シンポジウム及び連絡会 平成26年度 第1回 合同採択大学連絡会	平成26年7月30日	京都大学百周年時計台記念館(京都府)
			稲葉睦（北大）
			石塚真由美（北大）
	平成26年度 第2回 採択大学連絡会	平成26年11月25日	筑波大学東京キャンパス（東京都）
	大学の世界展開力強化事業 シンポジウム及び連絡会 平成26年度 第2回 合同採択大学連絡会	平成27年2月13日	西村匡史（北大）
			前多敬一郎（東大）
			田近千尋（東大）
			前多敬一郎（東大）
AIMS Review Meeting	7th Review meeting of the AIMS programe	平成26年5月6日～5月10日	Manila, Philippines
	8th Review meeting of the AIMS programe	平成26年12月1日～12月2日	Brunei Darussalam, Brunei Darussalam
学生派遣・受入	学生派遣	平成26年9月13日～12月6日	カセサート大学
	学生受入	平成26年9月18日～12月8日	北海道大学
		平成26年9月18日～12月8日	酪農学園大学
		平成26年9月13日～12月8日	東京大学
	引率教員	平成26年9月13日～9月20日	寺尾晶（北大）
		平成26年9月13日～9月15日	岩野英知（酪農）
		平成26年9月19日～9月29日	萩原克郎（酪農）
		平成26年9月28日～10月5日	青島圭佑（北大）
		平成26年10月10日～10月15日	中出哲也（酪農）
		平成26年10月11日～10月19日	星野有希（北大）
		平成26年10月18日～10月25日	永川葉月（北大）
		平成26年10月18日～10月24日	金尚晏（北大）
		平成26年10月25日～11月2日	柳川洋二郎（北大）
		平成26年11月2日～11月8日	奥村正裕（北大）
		平成26年11月15日～11月23日	片桐成二（酪農）
		平成26年11月22日～11月30日	加藤大智（北大）
		平成26年12月4日～12月6日	石塚真由美（北大）
		平成26年12月6日～12月12日	James Chambers（東大）
		平成26年12月12日～12月18日	米澤智洋（東大）
	学生派遣・受入	平成26年7月30～2015年2月1日	東京大学
		平成26年8月26日～9月9日	Tanu Pinyopummintr (KU)
		北海道大学・酪農学園大学	Tanu Pinyopummintr (KU)
			Jatuporn Noosud (KU)
			Kannitha Phetudomsinsuk (KU)
	派遣・受入打ち合わせ	平成26年9月18日～9月27日	Nirut Suwana (KU)
			Kriangkrai Wittoonsatian (KU)
			Kiatlisak Tancharoen (KU)
		平成26年3月15日～3月18日	滝口満喜（北大）
			石塚真由美（北大）
			永野昌志（北大）
		平成26年1月27日～1月30日	高木哲（北大）
			中村健介（北大）
			森下啓太郎（北大）
		平成26年2月3日～2月6日	越後良介（北大）
			Jatuporn Noosud (KU)
			Chalthep Poolkhet (KU)
		平成26年2月16日～2月19日	Kriangkrai Wittoonsatian (KU)
			佐藤新太（北大）
			大田寛（北大）
	平成26年3月17日～3月20日	北海道大学・酪農学園大学	星野有希（北大）
			伊丹貴晴（北大）
			Jedee Termwichitr
			Suporn Thongyuan
			Pichai Jirawattanapong
			Jaturong Wongsanit



相互派遣

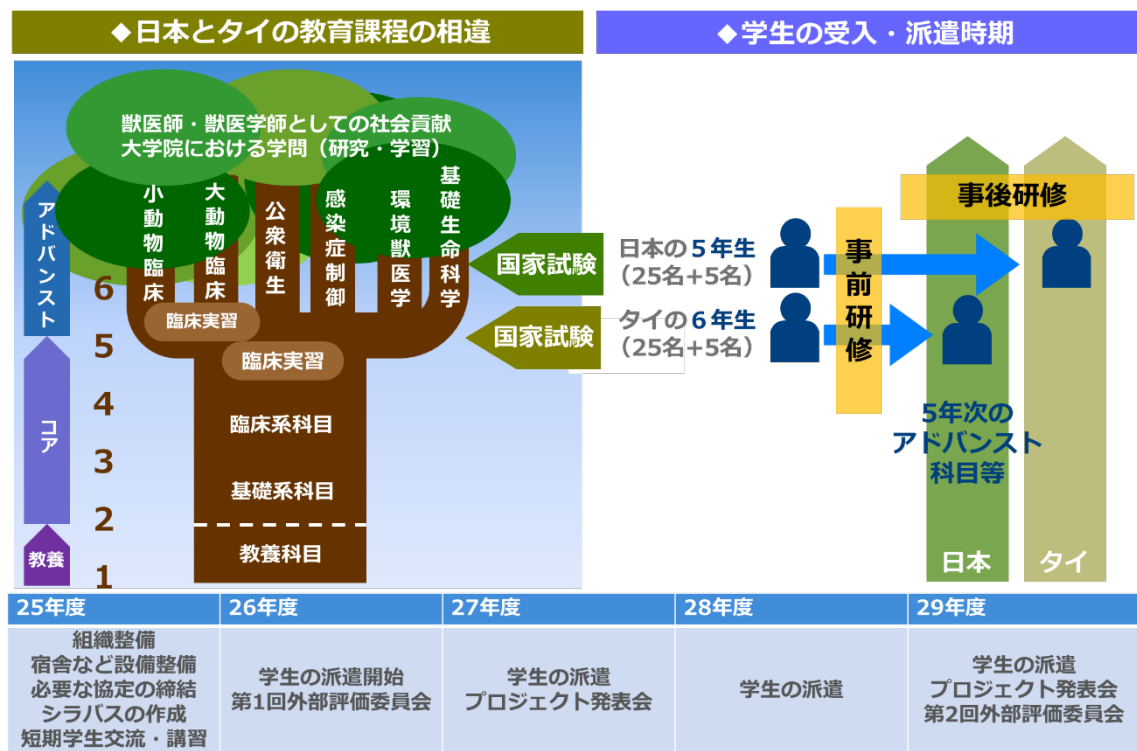
CVE コンソーシアムの構成大学は日本とタイ間の学生交換を以下のように実施します。

-
1. 北海道大学、東京大学、酪農学園大学、カセサート大学、チュラロンコン大学の学生（日本25名、タイ25名）を毎年相互派遣します。
-
2. 交換プログラムに参加する学生は、各人において最初に所属大学が選定し、受入れ大学が最終入学決定をします。
-
3. 受入れ大学の受入れ大学における在学期間は、所属大学が定める期間を超過することは出来ません。
-
4. 受入れ大学は、他の会員大学の学生には入学金および授業料を免除します。
-
5. 学生に発生する旅費、生活費、または他の必要経費については当該学生またはそのスポンサーが責任を負います。これについては各機関がそれら経費を補てんすることを目的として、独自に奨学金に応募することを妨げるものではありません。
-
6. 受入れ大学は各学生の学習分野に適したコースを提供します。北海道大学およびカセサート大学に在籍するアドバイザーは学生への助言を行います。
-
7. 留学期間中の学業を成功させるために、各学生は受入れ大学が適した学業コースの修了に必要なとするレベルの語学力を持っていなければなりません。
-
8. 参加学生は、所属大学での学位取得候補としての学籍を継続して有します。
-
9. 各大学は参加学生のコースワーク修了文書および習熟度に関する適切な学術的情報を相手側に提供することに同意します。受入れ大学で合格した科目は、所属大学で単位認定します。
-
10. 受入れ大学は、学生が大学内もしくは近接した適切な住居探しを補助します。
-
11. 交換プログラムへ参加するには、受入れ大学が必要とする健康保険に加入していることが条件となります。いかなる健康保険にかかる費用も、またその健康保険が適用されない他の医療費についても、交換学生個人の責任となります。
-
12. 受入れ大学での在住期間中は、国家的緊急事態においては所属大学・受入れ大学双方が学生の安全確保に協力します。
-



プログラム

このプログラムは、獣医学の必修科目を既に修了した学部5年生または6年生に高度な獣医学教育を提供することを目的としています。獣医学のコア・カリキュラムは、基礎、病理学、応用・基礎臨床獣医学の講座から成りたっています。高度獣医学コースは必修または選択講座であり、学生たちは少人数グループで質の高い教育を受けることができます。高度獣医学コースは専門的獣医学講座であり、動物病院の臨床ローテーション、獣医学フィールド実習および獣医学研究実践で構成され、研究者として生物医学の技術と能力を身につけることができます。





単位互換の科目

北海道大学

- Advanced Seminar in Veterinary Clinics : Small Animals
- Advanced Seminar in Veterinary Clinics : Large Animals and Clinical Pathology
- Advanced Seminar in Research Laboratory Rotation

東京大学

- Practice of pathology
- Rotated practice of small animal internal medicine
- Rotated practice of small animal surgery
- Practice of large animal medicine and theriogenology
- Practice of bacteriology
- Practice of virology and immunology
- Practice of virology and immunology

酪農学園大学

- Clinical rotation (Production)
- Clinical specialization (Small animal)

カセサート大学

- Clinical practice in necropsy and diagnostic pathology I
- Clinical practice in small animals I (Internal medicine)
- Clinical practice in small animals II (Surgery)
- Clinical practice in small animals III (Theriogenology)
- Clinical practice in microbiology I (Bacteria)
- Clinical practice in microbiology II (Virus)
- Clinical practice in veterinary public health and epidemiology
- Clinical practice in large animals (Bovine, Equine, Wildlife)



2014 世界展開力強化事業 派遣・受入 日程表

日 付	派 遣 (タイ)	受 入 (日本)
	行 事	
9/13(土)	日本の派遣学生・引率教員タイ到着 北大 → カンペンセーンキャンパス 酪農・東大 → バンケンキャンパス	カセサート大学受入学生 東大に到着
9/14(日)	各キャンパスにてオリエンテーション	
9/15(月)	プログラム開始	
9/16(火)		プログラム開始(東大)
9/18(木)		タイの学生・引率教員日本到着 (北大・酪農大)
9/19(金)		合同オリエンテーション(北大・酪農大)
9/22(月)		プログラム開始(北大・酪農大)
10/25(土)	酪農大・東大派遣学生 ンセーンキャンパスへ移動	
11/4(火)		学生の入替え(北大⇄酪農大)
12/4(木)		修了式(北大・酪農大)
12/5(金)	北大・酪農大派遣学生 プログラム終了	プログラム終了 (北大・酪農大・東大)
		修了式(東大)
12/6(土)	北大・酪農大派遣学生 帰国	
	東大派遣学生 バンケンキャンパス へ移動	
12/8(月)	東大派遣学生 最後2週間のプログラム開始	カセサート大学受入学生 全員帰国
12/12(金)		
12/15(月)		
12/17(水)	東大派遣学生 プログラム終了	
12/18(木)	東大派遣学生 帰国	

Report 2014

Hokkaido University

世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	稲森 梓 北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

9/13 夕方空港到着。空港までキャンペンセンキャンパスから先生が迎えにきてくれた。キャンパスにつくと何かと合同の歓迎会が開かれていた。学生が車で寮まで送ってくれて就寝。

9/14 朝にワラポンさんが学校説明をしてくれ、午後は学生に学校案内をしてもらった。それだけでは全然把握できず、地図が欲しかった。帰りに自転車を借り、寮まで帰る。

9/15～ 日本人はグループにわかれ、B グループは学生が寮まできてくれて一緒に学食へ行き朝食。その後授業～昼食～夕食まで、昼食を食べにつれてってくれたり授業が終わって暇な時間に車でどこかへ連れてってくれたり夕飯を一緒に食べてくれたり、面倒を見てもらった。3日ぐらいたつと慣れてきて自分たちだけでご飯にいたりしたが、よく車で学外に一緒に食べにいたりした。

Swine unit (9/15~26)

1st week

午前中は講義、午後は症例がくれば解剖、という流れだった。初めての授業から英語で専門用語でまくりで辞書を使いたくても綴りがわからず、学生に聞いたり、わからないままだったりしながらなんとか進んだ。解剖の手順の説明などは理解しやすかったのだが、豚の病気の臨床症状や解説、の英語を理解するのがとても難しかった。習った事があっても忘れていたり、英語だと何というかわからなかったり、今何を問われているのか理解できなかったりした。日替わりで先生が交代して違う内容の抗議を受けた。どの先生も生徒と受け答えをしていてそれが楽しかった。過去に総範囲を学習したからなのか、実践に近い問診～治療までの流れで授業が進み、抗生物質や薬剤の名前を生徒も先生もよく覚えている事に驚いた。タイの学生は6年生なのでそのまま社会に出るからかもしれないし、日本人は研究室によっては全くそういうものと関わっていないとはいえ、知識の差がいくつかあった。日本でよく使われる抗生物質の名前は覚えていった方がいい。剖検のときも農家さんへの問診は学生がやっていたし（タイ語で）、豚を安楽死する際も学生が率先してやらせてもらえ、タイ学生は慣れた感じで上手だった。実際の症例だから、病気の同定も自分たちでやらなければならない、解剖前後の視診、写真撮影がとても大事だという事がわかった。この結果は自分たちで考えて金曜日にプレゼンで発表したのだが、どうしてこう診断したのか先生に突っ込まれた質問をされたときに全然答えられなかった。授業が休みだったり早く終わっても自主的に集まってプレゼンを作ったりして自学をよくした。

2st week

農場訪問と農場に関する講義を受けた。訪問した農場について農家の方に質問したり観察した結果をプレゼンにまとめ、金曜に発表した。タイ学生がタイ語で質問して私たちに英語で説明してくれた。初めの週と打って変わってのんびりとした感じで遠足に行くようだった。



Poultry unit (9/27~10/10)

2 グループ合同でむしろタイ学生と分かれて授業を受けたり農場訪問したり、行ったさきで自由に 3 グループに分かれたり個人でプレゼン課題が与えられたりと、いろいろだった。土曜日にも農場訪問や授業があつたりして盛りだくさんだった。この留学の中で一番大変だったと思う。でも一番内容が濃くて生徒の団結力が高まった気がする。この2週間にいろいろ詰め込んでくれようとしたので農場訪問が2日連続になってしまい、衛生的に訪問中止した方がいいのではという状況になったりしたが、服装や履物を気をつける事で許してくれた。先生ごとに授業内容も全然かわるのに授業が日替わりになったり日をまたいだりと、少し混乱した。スケジュールがあいまいで先生の間でも違いがあつたりと、前日にタイ人に聞くことでなんとか翌日の授業内容を知る事ができた。

Aquatic unit (10/13~24)

1st week

またグループに分かれ、魚について学んだ。先生がタイ語しかしゃべってくれず、先生から学生に、学生から日本人に説明するという授業スタイルだった。全く未知の世界だったがとても緩い先生だったので、社会科見学をしているような気分だった。農場訪問に学生が自らの車でいき、先生が来ず、自分たちで質疑応答をすませて帰ってくる日もあった。農場に行ってもらってきた病気の金魚の世話だけをする日もあった。金曜のプレゼン発表も一つ発表したら、残りはデータとして送れば発表しなくていい事になり、早く終わったりした。

2st week

エビについての週だった。先生は英語のプリント集を配布してくれ、英語で授業してくれた。主に講義中心で、プレゼンの宿題が毎日でた。エビの変態課程の用語がわからなかったりしたが先生がとても丁寧に詳しく説明してくれてわかりやすかった。エビの農場の設備を一つ一つ存在理由から対処法まで教えてくれ、それが最後の日に口頭試験みたいな感じで聞かれた。エビについて日本で予習していく必要はないと思うが、授業で教えてくれた事は全てメモに取ったりして置けばよかったと思う。たまに聞くだけにして最後の日に忘れていたり疑問を残しておいてわからないままだったりしたことが少しあった。この2週間が一番暇な時間があったと思う。2週目の金曜日に、前半グループが解散するのでそのお別れパーティなるものをした。そのときにあげるものを手作りしたり踊りを発表するために練習したのでそれについては忙しかったけど。出し物やプレゼントはすごく喜んでくれてうれしかった。

10/25～ 東大・酪農大も混ざり、後半戦がスタートした。初めに自分たちがしてもらったように学校案内や朝食に連れて行ったりとホスト側になった。改めて前のグループのタイ学生に感謝した。



Equine unit (10/27~11/7)

私はEグループになり、EとFグループ合同で授業を受けた。Bグループだったところは7人だったのが11人になり、さらに合同で22人という大所帯で、日本人の方が数多くて先生が大変そうだった。基本的にキャンパス内にある馬の病院で待機し、来た症例を先生が診断・治療するのを観察するスタイルだった。講義を受けるというより、症例の説明を聞くという感じで、症例がこないと暇だった。論文紹介と担当になった馬の症例紹介をプレゼンで発表した。日本では馬の病院なんて身近にないので新鮮だったのと手術が間近で見れたり日本では見られない治療法、症例がきて楽しかった。毎日馬の世話・散歩をし、のんびりと治療を観察し、拘束時間は長かったがやる事自体は少なく、暇だった。

Bovine unit1 (11/10~/14)

一週間泊まりがけで、ノンポー病院という少し離れたところでNOSAIみたいなことをした。初日は乳房炎についての講義・実習、次の3日間は先生2人につき生徒2、3人に分かれて車で農場へ往診に行った。日本と比べて牛が小さかったり餌にバナナが混じってたり頭数が少なかったりタイ固有種の牛がいたりおもしろかった。主に直検と一次診察をして、先生が農家さんと話してる間はぶらぶらと農場を見学していた。衛生状況は日本とそんなに変わらず、むしろきれいなところもあり、農家さんの頑張り次第で変わるところは日本と同じだと思った。金曜に乳房炎についてプレゼン発表をして終わった。ベッドにダニがいてさされたのとシャワーが水しか出ないのは辛かったけど、楽しかった。

Exotic animal unit (11/17~/22)

待ちに待った野生動物の授業は一週間しかなくて残念だったが、すごく密度が濃かった。特にプレゼンなどはしていないが、いろんな事を体験できた。山奥に野生の動物を見に行ったりは虫類の世話をしたり離れた観光地へ象の往診に行ったりバンコクキャンパスでエキゾチックペットの診療をしたりもりだくさんだった。他のグループでは猛禽類についてやったらしいが、私たちのグループでは象の症例が多くてやる事はできなかったのが残念だった。出会える動物の種類と、グループごとに少しずつ違う内容だったのがタイならではのと思った。



Bovine unit2 (11/24~/3)

1st week

グループごとに、キャンパス内の牛の病院で待機する組と農場訪問する組にわかれた。キャンパスでは馬ユニットと同じように来た症例を世話・観察した。農場訪問ではNOSAIのように往診をして帰ってきた。牛の手術を助手として入らせてもらえて縫合させてもらった。この週では、二つ症例を決めて一つはディスカッション形式で先生と話し合い、もう一つはプレゼンで発表した。

2st week

祝日とお祭りとテストが重なり、一週間の内容が3日間に縮まった。キャンパス内の牛馬の実験農場へいき、一人一頭以上牛を与えられ、削蹄・麻酔・人工授精について講義からの実習という流れで行った。うんこまみれになったが、全て自分でやれたので達成感と得難い経験を手に入れる事ができた。プレゼンも行ったが、時間がなさ過ぎたせいか、先生が深く突っ込んでこず、無事に終わる事ができた。

11/4 oral test

日本人だけの牛と馬についてテストがあった。牛は口頭試験で、事前に与えられていた4つの課題のうちから当日くじで一つ選び、それについて一人一つ答えていく形式だった。先生二人に対し生徒7人ほどで、自分の知っている事を話した後、先生からの質問に答えていき、結果はわからずじまいだった。馬については実施試験で、先生一人か二人に対し、生徒が3人ほどで、担当する馬がどんな病気か、それを調べるためには何をすればいいかを自分たちでその場で考え処置するというものだった。

11/5 Last day

日本人に特別にタイの伝統衣装を着せてくれたりパレードを歩かしてもらったりと文化に触れる事ができてうれしかった。

11/6 帰国



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	大谷 彬	北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

1) 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

2) 実習先で学んだことを大まかに

●Swine Unit

	月	火	水	木	金
AM	15 講義 剖検の手順	16 講義 疾病	17 休講	18 講義 ケース・ディス カッション	19 プレゼン Case 1～3
PM	剖検 Case 1	剖検 Case 2		剖検 Case 3	
AM	22 講義 農場の設備	23 農場訪問 Farm 1	24 講義 ELISA検査等	25 農場訪問 Farm 2	26 プレゼン Farm 1～2
PM	講義 農場経営				

講義は獣医学部講義棟 3 階の講義室、また剖検は同講義棟 1 階の剖検室、プレゼンテーションはペンタゴン（獣医学部教員用の棟）1 階会議室で行われた。

第 1 週は豚の剖検について、その手順やタイで流行している疾病の剖検所見、実際の剖検とそのケースディスカッションを行った。同じ週の金曜日には剖検 3 件について、検体の紹介から診断なども含めてプレゼンテーションを行い、他班の学生や先生方と

ディスカッションをした。

第 2 週はタイの養豚農場について使用されている設備について学び見学した。また実際の農場の繁殖成績などを用いてディスカッションをし、問題点や解決策をプレゼンテーションで掲示、他班の学生や先生方とディスカッションをした。

●Poultry Unit

	月	火	水	木	金	土
AM						27 農場訪問 産卵鶏
PM						
AM	29 講義 プレテスト	30 講義 アヒル	10/1 実習 孵化場	2 剖検 ヒヨコ	3 実習 孵化場	4 講義 ウズラ
PM	農場訪問 肉鶏	農場訪問 アヒル				農場訪問 ウズラ
AM	6 講義 卵の品質	7 講義 IBH	8 剖検 症例	9 アヒル生産 会社訪問	10 プレゼン	
PM		講義 鶏の解剖			テスト	

講義およびプレゼンテーションは獣医学部講義棟 3 階の講義室で、また剖検は同講義棟 1 階の剖検室で行われた。

鶏だけでなくアヒルやウズラといったその他の家禽種についても学んだ。実習では胚死滅卵の検査や鶏卵の品質検査、寄生虫に実験感染させたヒヨコの剖検などを行った。

プレゼンテーション課題がグループおよび個人で数題課された。課題は各実習で行った内容またはタイで流行している家禽の疾病とそのワクチンに

ついてであった。プレゼンテーション課題は最終週の金曜日に発表した。テストはタイで流行している家禽の疾病からその剖検所見とワクチネーションについて、実習で行った内容についてなどが出題された。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

●Aquatic Unit

	月	火	水	木	金
AM	13 講義 薬の計算	14 農場訪問 闘魚、金魚、 エイ	15 実習 金魚の治療	16 農場訪問 ティラピア	17
PM					プレゼン
AM	20 講義 飼養管理等	21 プレゼン 水質	22 農場訪問 エビ	23 休講	24 プレゼン 疾病
PM			プレゼン 疾病		

講義とプレゼンテーションは獣医学部講義棟3階の図書室、また剖検は同講義棟1階の剖検室で行われた。

第1週は魚についてであった。観賞魚の闘魚、金魚、エイ、食用のティラピアについて農場訪問を行った。また魚に使用するための薬のドーズの計算を行った。金曜日の午後に農場訪問および治療対

象であった金魚についてプレゼンテーションを行い、先生からコメントをいただいた。

第2週はエビについてであった。前日に個人ごとに課題が与えられ、その内容について次の日にプレゼンテーションをし、先生からコメントをいただいた。また実際にエビの養殖農場を訪問した。

●Equine Unit

	月	火	水	木	金
	10/27 実習 身体検査	28 病院実習	29 病院実習	30 病院実習	31 病院実習
	11/3 病院実習 プレゼン 論文紹介	4 病院実習	5 病院実習	6 病院実習	7 プレゼン 症例紹介

キャンペンセンキャンパス内の馬病院で病院実習を行った。

多い日で1日4-5件の患者が来院し、学生は身体検査や投薬を行った。またグループに2頭ずつ担当の入院馬が与えられ、毎日身体

検査や傷の消毒などを行った。手術がある日は手術を見学し、一部の手術では学生が内野に入り手術助手をすることもできた。

プレゼンテーション課題が2題課された。馬の臨床に関する論文紹介とグループの担当馬についての症例紹介であった。プレゼン後は他班の学生や先生方とディスカッションをした。

●Wild Life Unit

	月	火	水	木	金	土
	11/17 講義	18 エラワン国立公園	19 爬虫類館	20 パタヤ	21 講義 エキゾチック クアニマル	22 病院実習

火曜日はエラワン国立公園に行き、車で国立公園内を回って保護されているバンテン（野生の牛）、シカを観察した。水曜日はアユ

タヤの爬虫類館でヘビのハンドリングについて実際にヘビの世話を学んだ。木曜日はパタヤに怪我をしたゾウの往診に行った（風邪で欠席）。土曜日はバンケンキャンパスのエキゾチックアニマルの診療実習を行った。

●Bovine Unit（ノンホー病院実習）

ノンホーにある動物病院に行き、学生・職員用の寮に泊まりながら往診随行をした。講義とプレゼンテーションはノンホー動物病院職員寮1階の講義室で行った。

ノンホー地域の農家を回り、治療や経過観察、繁殖検診を行った。指定された1件の農家で乳房炎の検査を行い、金曜日に検査結果と結果を基にした乳房炎対策案についてプレゼンテーションをした。プレゼン後は他班の学生や先生方とディスカッションをした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

	月	火	水	木	金
AM	11/10 講義 乳房炎	11 往診随行	12 往診随行	13 往診随行	14 プレゼン 乳房炎検査
PM	実習 乳房炎検査				

●Bovine Unit (キャンペンセンキャンパス)

	月	火	水	木	金
AM	24 往診随行	25 病院実習	26 病院実習	27 往診随行	28 プレゼン 症例紹介
PM			ディスカッション	ディスカッション	
AM	12/1 講義 伝染病	2 実習 直検	3 講義 局所麻酔	4 テスト	5
PM	実習 剖蹄	実習 AI	実習 局所麻酔、第一胃挿管等	テスト(馬)	

第1週はキャンペンセンキャンパス内にある牛病院で実習を行った。2-3人の小グループごとに往診随行、または病院に残って手術の見学などを行った。水曜日にグループごとに経験した症例について先生とディスカッションを行った。木曜日は学生と先生方が全員

参加し、グループごとに経験した症例についてディスカッションした。金曜日はディスカッションをふまえてグループごとに症例紹介を行った。

第2週はキャンペンセンキャンパス内の実習用農場で削蹄、AI、麻酔などの実習を行った。木曜日に牛の疾病について口頭試験があった。午後は馬の実習試験であった。

3) そのほか生活の面で報告すべきことがあれば

●ネット環境について

タイに來たばかりのころは一人パソコン一台のみしかネットの認証がもらえなかった。そのため学内であっても留学2週間目まではケータイが使用できなかった。ケータイは分からない英単語や用語をすぐに調べられるため非常に便利なツールであるため、パソコンよりも先にケータイで認証をもらうべきだったかもしれない。

寮内の有線は金曜日夜～月曜日朝にかけて使用できなかった。またケーブルが1本のみであったため一人がパソコンでネットを使用している時はもう一人は待たなくてはならず、不便だった。病院2階の会議室は常に安定してネットが使用できたが、後半になって酪農や東大の学生と合流すると好きなタイミングで会議室に行くことは難しくなった。学生がWi-Fiのルーターを持って行く必要がある。

●パーツへの両替について

北大生はキャンペンセンキャンパスから外に出る機会があまりなかったため、レートが悪い学内の銀行を使用しなくてはならなかった。授業後では銀行が閉店しているため、昼休みを利用して急いで換金に行く場面が何度もあった。

●図書館の利用について

留学生は図書館で本を借りることができないため少し不便だった。開館時間も短いため自習の場としては不向きかもしれない。

●自転車について

自転車にライトが付いていないため、後付けのライトがなるべく早くほしかった。学内の道路は夜暗く、車の往来も多かったため危なかった。タイ人の学生が車で私たちの後ろを走り、寮までの



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

道をライトで照らしてくれたことが何回もあった。しかしマーケットからの帰りなどタイ人の友人がいない場面が殆どであるためライトは早めに貰った方がよい。

●制服や実習で使用する備品について

制服の青いシャツは早々に縫い目が開いてしまった。3か月間ほぼ毎日使用していたため毛玉も多く、後輩に渡すのは難しいだろう。一方で体温計と白衣は学校側で準備して後輩に渡していくかたちが良いと思う。体温計はタイ人の友人に買ってきてもらい、白衣はタイ人の友人が古いものを持ってきてくれたり借りたりして集めてくれた。使う機会もあまりないため一度購入すれば来年度も使用できるのではないだろうか。

●部屋の掃除について

寮の部屋を定期的に掃除してもらえたおかげで気持ち良く過ごすことができた。できれば掃除の予定日、曜日を教えてほしかった。最初は毎週土曜日だったがある週いきなり木曜日に変わり、帰国直前は毎日掃除が入っていた。掃除までに私物がある程度片付け、貴重品を鍵のかかるトランクにしまいたかったので、掃除が入る日を事前に知リたかった。

●他の日本人学生について

留学中、同じプログラムで留学中の他の学生の授業態度が悪く、不愉快になったことが何度あった。授業中に寝る、予習復習をせずに分からないことは他の学生に解決させる、自習室でイヤホンを使わない、昼休みが終了してもキャンパス内で昼寝をするなどである。留学費用を出してもらい、わざわざ外国に勉強をしに来たとは思えないような行動をする学生に実際に抗議をしたこともあった。留学プログラムを準備して下さった大学にも、留学生を受け入れて授業をして下さっているタイの先生方にも、お金を出していただいている JASSO にも、全員に申し訳ない気持ちになった。留学をしていて最も嫌な気分になった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	小笠原 浩平	北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

タイ、カセサート大学にて三ヶ月間、獣医学を学んできたためその活動報告をする。

1. 授業について

カセサート大学の学生とほぼ 1:1 となるようにグループを組み、ブタ、トリ、水生動物(魚およびエビ)、ウマ、ウシ、野生動物の授業に参加した。

前半のブタ、トリ、水生動物は農場の管理に重点を置き、実際に農場を訪れて、その問題点や改善策についてディスカッションした。ブタの農場は小規模農家では全ての発育段階を見るが、大規模農家ではその発育段階で役割が別れておりそれぞれについて見学した。どこも感染症に対して敏感になっていたが、厳重に対策をしていたという印象はなかった。また、ブタの授業では農場から送られてきた死亡豚の剖検を行い、その死亡原因を調べた。何らかの感染症に罹ったブタを実際に学生が剖検できるというのが印象的だった。

トリの農場は肉用鶏、産卵鶏、孵化農場、カモ農場を回った。どこも日本同様感染症に対して細心の注意を払っていることが分かった。特に孵化農場では消毒薬の噴霧ではなくシャワーを浴びたのが印象的だった。さらに農場の形態にも驚いた。ニワトリのいるケージの下が大きな生け簀となっており、ニワトリの糞を餌として魚を育てていた。一年に一回程度の頻度で魚を捕獲し収入の足しとしていた。ニワトリの糞処理をそのまま養殖業とつなげる逆転の発想が面白かった。また、幼雛の健康管理や卵の品質を調べる実習もあった。タイと日本では卵一つとっても商品の評価方法が全く異なった。例えば日本では生卵を食べる習慣があるので産卵日からの日数など消費期限が優先されるが、タイでは黄身がより黄色い方が新鮮で美味しいとされるため黄身の色の評価がされる。

水生動物の農場はどこも新鮮だった。内陸で大きな生け簀を作り、そこで魚やエビを養殖していた。魚の大規模農場の責任者がこれから来る人口増加とそれに伴う食料不足に対する養殖業の可能性を語っていた。高タンパクかつ成長速度が早い、さらに味も悪くない。大きな面積も取らないため大量生産が可能だと言う。しかし、水不足が深刻となったらその生活空間を確保できないため課題も残るのではないかと考えた。日本の獣医学では魚病学は授業で多く触れられない。したがって、今回タイでこれらに触れたことは新鮮であり、これからの将来において役に立つかもしれないことは収穫の一つである。

大動物医学の授業では、ウマ、ウシ、エキゾチックアニマルの診察および治療について学んだ。ウマ分野は大学の動物病院にいる患畜の世話や新たに来院した患畜の治療をした。その中で身体検査や跛行の診断方法なども実際にウマに触って学んだ。4～5 人の小グループに分かれて一頭の患畜の世話をし、その治療方針を考えるのは学生にとってもやりがいがあるし勉強になった。また、ウマの手術も数例見学できた。

ウシ分野は往診が主であった。3 週間の実習のうち 2 週間は異なる地域のウシ農家の往診に行った。それぞれの地域で蔓延している感染症や疾病の種類が異なったのは印象的だった。また、タイのウシ農場は日本、特に北海道のような大規模農家は少なく、ウシの数が 40 頭ほどの家単位でやっているところが多かった。畜舎の衛生環境も日本のものと比べてかなり悪かった。昔ながらの建物で長く農家をやっているところでは天井が低く、風通しが悪かった。さらに犬や鶏を飼っている農家が多く、それらが自由に畜舎を走り回っていた。現場の獣医師はこれがタイスタイルだと言って地道な改善に奮闘していた。ウシ分野では往診の他に麻酔や人工授精の実習もあった。一人一頭ウシを与えられ、先生が良しとするまで実技をやらせてくれた。日本ではグループで一頭なので、どうしても手を触れることのできない内容が



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

あるが、タイでは多いに技術の習得ができとても自信がついた。

エキゾチックアニマル分野は全てが新鮮だった。動物病院でのエキゾチックペットの診察、爬虫類専門動物園での実習など日本では大学外の現地実習でしかやれないようなことを中心にやった。中でも印象的だったのは、二泊三日でカンチャナブリというタイ西部に位置する森にキャンプをし、野生のウシを野に還すプロジェクトに参加できたことだ。これは国をあげた一大プロジェクトで、カセサート大学だけでなくタイ国内の動物園関係者やレンジャーが多く参加して取り組んだものである。私は将来動物園獣医師になることを目指しており、今回のタイ研修でも日本とタイの野生動物学や自然保護に対する考えの違いを学ぶことが目的の一つであるため、多いに勉強となり、刺激になった。

2. 私生活について

授業以外の生活でとても困ったことは多くなかった。放課後はバスケットボールをして獣医学部のタイ人だけでなく農学部や工学部の学生とともに汗をかいたり、グループ毎に課題についてディスカッションしたりした。

食事は基本的には食堂を利用した。いつも同じ店で食べていたため顔を覚えられたりした。また、夕食はタイ学生と外に食べに行ったり、学内のマーケットを利用した。学内になんでも売っている大きなマーケットが開催されていたのはとてもありがたかった。

寮の生活はとても快適だった。週一回掃除が入るため常に綺麗な状態で過ごすことができた。台所がないため自炊はできなかったが、学部から湯沸かしポットを貸していただいたためコーヒーやカップラーメンなどを楽しむことができた。また、シャンプーやボディソープはルームメイトと共有した。一番大きいボトルで三ヶ月間余裕を持って使うことができた。エアコンは他のメンバーと比べて長く使った方だと思う。しかし電気料金は一ヶ月半で約 700 バーツほどであった。洗濯は一回 20 バーツで週一回程度の頻度で行った。寮の部屋にはベランダのようなスペースがあったため洗濯した服を干すことができた。

3. 印象的だったこと。

最も刺激を受けたのはタイ学生のレベルが非常に高かったことである。獣医学の知識だけでなく英語力も非常に高かった。授業で英語による発表があったり授業資料が英語だったりするのが一つの理由だと思う。将来日本国内だけで仕事をするのであれば英語でのコミュニケーション力は必要ないかもしれないが、これからの時代外国の方と仕事する機会も増えると考えため、英語力は必要であると考えた。

また、向こうの授業では実際に動物に触れる機会が多いため印象的だった。我々が参加した最終学年の授業だけでなく、五年生以下の授業でも実技の授業が多くあるような印象を受けた。



4. 来年度に向けた提案

初年度である今年のプログラムに私は非常に満足しており、参加できて光栄に思っている。しかし、学生目線から来年度以降に向けた提案がいくつかあるため列挙する。来年度以降に参考になれば幸いである。

(1) カリキュラムについて

今回このプログラムに参加せずに日本に残った学生の中には、タイに行きたいが農場実習より小動物臨床を学びたかったからという理由で参加しなかった学生もいる。また逆も然りで、小動物臨床よりも感染症制御に興味があり参加しなかったという声も聞いた。少しでも多くの学生に海外で獣医学を学ぶ機会を与えられるのであれば、大学毎でカリキュラムを分けるのではなく、内容も選択できるようにするべきであると考えます。どんな学生は初対面の人ばかりの状況になっても学習することに大きな影響はなく、新しい繋がりを作ることができるだろう。

(2) 服装など

今回タイで配られた制服は自然とほつれて穴が空いてしまった。それはサイズが小さかったり、洗濯に耐えられなかったりと理由は様々である。中には修復不可な状況にまでなってしまうものもあった。また、授業では農場を訪ねることも考えてしっかりした制服の着用を注意された。したがって来年はより良い生地のものであるべきだと考えます。

(3) 受け入れ態勢について

タイでは非常に良く対応していただいた。問題が起きればすぐ対応してくれ、なるべく個人の時間がないような対策をしていただいた。そこまで密にする必要はないが、細かく様子を伺う体制があるとタイ学生も安心して日本での活動をできると考える。

あるいは、可能であれば、派遣の時期をずらすことで対応する人員を確保できると考える。例えばどちらかが先に派遣され、その世話を派遣学生が担当する。この場合約半年間ずっと同じメンバーと一緒にいることとなるので人間関係に問題が生じたらマイナスとなってしまいが、互いに生活面で苦労することが減少すると考える。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	紺野 紘矢 北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

①実習の日程について

I. Swine unit (9/15-9/26)

前半：座学により感染症の知識をつけた後に、実際の症例が大学の剖検室に連れてこられ、午後は剖検を行った。

後半：タイにおける実際の豚農家を訪れ、飼育や繁殖の現場を見学し、改善点などをディスカッションした。

II. Poultry unit (9/29-10/10)

日本学生とタイ学生と別れてアヒル農家を訪れたり、鶏卵農家や肉用鶏農家などタイにおける実際の家禽農家を多く訪れた。座学では鶏の感染症を勉強し、一人一つ主な感染症の症状とワクチンについてのプレゼンテーションを行った。

III. Aquatic unit (10/13-10/24)

前半：Cat fish や Tilapia などの感染症を学ぶと同時にこれらの農家を訪れ、タイにおける農家の実情を見学した。さらには Golden fish の交配にも挑戦した。

後半：エビ学について現在タイで問題となっている感染症などについて座学で学んだ後に、実際に農家を訪れてエビ農家の実際を見学した。

IV. Equine unit (10/27-11/7)

大学構内にある馬の診療所において、毎日診療に来る馬を先生に付いて診療の見学、時には手伝いをしました。各グループ担当の患畜を与えられ、その馬の日々のケアと最終日にその馬の治療歴、今後の治療計画についてプレゼンテーションを行いました。

V. Exotic animals (11/17-11/22)

エキゾチックアニマル専門の動物園に行き、そこで蛇の健康診断、治療、投薬などを実際に体験させてもらいました。また別の週には象の往診に随行し、実際に象に触れ、観察し、どこに異常があるかなど診察を実際に行いました。11/29 の土曜日にはバンコクにあるキャンパスにおいて、エキゾチックアニマル(ウサギやオウムなど)の診療を見学しました。

VI. Cattle unit (11/10-11/14, 11/24-12/3)

11/10-11/14: ノンポー地区にあるキャンパスに一週間泊り込みで牛の診療に随行しました。そこでは実際に搾乳農家へ行き、診療の見学、手伝いなどをさせてもらいました。

11/24-11/28: キャンペンセーンキャンパス内にある牛診療所に診療に来る患畜の Physical Examination を取ったり、手術の助手を務めたりしました。



12/1-12/3：キャンペンセーンキャンパス内にある Demonstration farmにおいて麻酔や直検、人工授精の練習を実際の牛を用いて行いました。

②実習で学んだこと

3 か月という長い時間をかけてタイで獣医学を学ぶという貴重な体験を通して、私が得たものまたは得た印象は大きく分けて二つあります。

一つ目は実習の多さです。週に 2, 3 回は実際に農家に訪れたり、診療の手伝いをしたりと、座学中心の日本と比べて動物に実際触れる時間が圧倒的に多かったと思います。教科書の写真ではなく、実際に感染症の症状などを目で見えて学べたという経験は日本にはなかなかできない貴重な経験で、今後広い知識を持ち、実際に使うことのできる獣医師になるためには大切な経験をできたのではないかと大変ありがたく思っています。また誤解を招くかもしれませんが、タイの各家畜の農家は行く前に私が想像していたよりもずっと衛生的で、日本の農家に近い印象を受けました。タイの授業では農家のマネージメント面も考えさせる内容で、こういった授業を通して得た知識は日本でこれから実際に診療の現場に出ていく獣医師としては有意義なものとなるのではないのでしょうか。こういったことからタイでの実習は臨床獣医師を目指す日本の学生にとってはまたとない貴重な経験であり、もちろん将来大動物獣医師を目指す私にとってもかけがえのないものとなったことは言うまでもありません。

二つ目はタイ学生の勉強への姿勢です。タイでは裕福な家庭なほど勉強をする機会を与えられ、彼らはそのチャンスを逃すまいと必死に勉強するのだそうです。実際に教育プログラムの違いはあるとは思いますが、日本で見られる学生の姿とは対照的な彼らの勉強への取り組み方にいい刺激を受けました。その結果ともいえるとは思いますが、タイの先生方の知識量の多さや、英語の流暢さには目を見張るものがあり、驚きと感動を思いました。自分ももっと専門性をもって勉強し、人になにか自分の知識を渡すことが出来るような獣医師になろうという意識が芽生えました。

③その他生活面などについて

タイへ留学をする前にタイへの渡航経験のある方々にタイについての予備知識を教えてくださいましたが、どなたも声をそろえておっしゃるのは、タイは一度行ったら日本人皆タイのことが好きになってしまう不思議な国であるということでした。実際に 3 か月間滞在した者としての感想を述べさせていただくと、衣食住全てが日本人にとって住みやすい国でありました。天候は常に 20℃から 30℃のあたりで過ごしやすく、食事は多少辛い料理もありましたがお米を主食としており、さらには日本人に対して友好的であることから私自身タイのことが大好きになってしまいました。バンコクとは少



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

し景色の違うキャンペンセーンに 3 か月間ずっと滞在していたころも一因かとおもいます。そこは空気もとてもきれいで、自然が豊富な日本ではなかなか見られない熱帯地方特有の景色が広がっており、そのきれいさに感動をしたことを覚えております。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	鳥居志保 北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

《Swine unit》

1 週日月曜日にはブタのマネジメントに関する講義があった。

火曜日にはブタの農場に訪問した。このブタの農場ではマネジメントがしっかりなされていたが家畜衛生面での管理が少し甘いように感じた。また、オープン式の建物であったため、タイの雨季と乾季のある気候では温度、湿度をブタにとって最適なものに保つのが大変であったようだ。そのため出産数が季節により変動していた。

水曜日は自習で、プレゼンのためのスライド作成を行った。

木曜日は再びブタの農場に訪問した。タイ全土でも有数の広い農場でミャンマー人が管理していた。この農場ではブタの離乳前下痢症が問題になっていて、問題点は分娩豚舎にブタを入れて休息させる時間が不十分なことにあった。ミイラ化胎児もたくさん見られ、子ブタの大きさもバラバラであった。大学に帰ってきてからは再びプレゼン作成を行った。

金曜日はプレゼン発表会を行った。初めは議論するのも精一杯だった。先生にももっと学生から質問するように促された。

土曜日は1日復習した。正直、専門英語を頭に入れないと授業についていけないので必死に覚えた。

日曜日はバンコクに出かけた。バンコクには 80bath でバンに乗って行くことができるのでとても便利だと思う。エメラルド寺院を見学してカオサン通りで買い物した。私達は携帯電話を買わなかったため、常にみんな一緒に行動していた。3 か月経ってみて買えばよかったと少し後悔している。

2 週日月曜日は午前中にブタの病気の鑑別診断に関する講義の後は剖検を行った。患畜は全身に発疹があって熱があり呼吸速迫を示していた。患畜 3 検体のうち 2 検体は移動中に死んでしまった。安楽殺した後、解剖していった。溜まっていた胸水や出血していた肺、腫脹していた腸間膜リンパ節は細菌培養検査を行ってもらった。豚コレラ、高病原性 PRRS、Streptococcus 等の細菌感染が疑われたが確定診断はこの日にはつかなかった。

火曜日はブタの感染症に関する講義を主に受けた。ユニークな先生でグループ全員が答えられなかった質問があればその質問の答えを唱えながら 3 階までの階段を 3 往復するという授業だった。一見すると体罰だが、とても楽しかった。クイズ形式の授業で案外、頭に知識が入っていたことにウシのユニットで後々、気づいた。

水曜日は再び感染症に関する講義だった。タイでは日本では考えられないような感染症も問題になっていたし、抗生物質やワクチンといった日本とは違った視点の話が多くて興味深かった。

木曜日はプレゼン作りに励んだ。月曜日に剖検したブタの死因は PRRSV により免疫抑制が起こっている上での細菌に混合感染であった。ただし、抗生物質をバンバン使っていたため薬剤耐性 E. coli しか検出されなかったが、明らかに他の細菌にも感染していることが示唆された。薬剤耐性菌がたくさんいることもタイの 1 つの問題点だと感じた。

金曜日は再びプレゼン発表会が行われた。前回より単語が聞き取れるようになり、議論や質問数が増えた。これは大きな成長だと思う。先生も前回より議論が良くなったと言ってくれた。プレゼンの後は poultry unit の説明会があった。なかなかの厳しい先生がいるみたいだ。土曜日は layer farm を訪問した。中サイズの家族経営農場ではあったがペンハウスが 4 棟あった。同時に 4 つのビジネスを行っている農場でティアラピアの養殖、バイオガスによる電力供給も行っていた。ハウスの下に直接ティアラピアの池があるのはタイならではの面白いと思った。タイでは普通のスタイルらしい。



《Poultry unit》

月曜日にはまず実力テストが実施された。正直、難しかった。。。病理用語がたくさん分からなかったのと egg broken analysis など、日本では授業でやったことのないような解析方法に関しての設問があった。講義の後に再び、layer farm に行った。このユニットでは egg broken analysis の他にも chick quality analysis や eimeria scoring といった初めて行う解析方法をたくさん学んだ。3 日齢のヒヨコを解剖したりコクシジウムに感染したヒヨコを剖検してコクシジウムの種類を考える、その病気の重度をスコアリングする、異常卵を割ってその異常が発生した日数を予想し、マネジメントの問題点を考えるなどといった解析であった。日本では衛生上、ニワトリの農場には入れてもらえないため、初めてニワトリ農場のマネジメントを学べたのと共にその評価方法を知ることができて良かった。また、うずらやアヒルの farm そしてアヒルの屠畜工場にも初めて訪れた。アヒルの屠畜工場は日本にも EU にも輸出しているところで衛生管理がしっかりなされていた。プレゼンは farm に関して、様々な解析結果に関して、そして 1 人 1or2 の感染症に関して作成した。感染症に関するプレゼンはタイで用いているワクチン株など発表に含まれて大変だった。病変に関してなかなかネット上に画像が転がってなくて苦労したが、何とかみんな乗り切ったと思う。ただし、解析結果に関しては先生に方法の間違い、基準の設定ミスなどをたくさん指摘されて見事にやり直しをくらってしまった。しっかり予習した上で解析しないと誤った評価をしてしまうことを感じさせられた。いずれも実際に会社に結果を返すような大切な解析であるのでとても身長に行う必要があったと思う。

《Aqua unit》

1 週目はエビに関する講義を受けた。月曜日は講義のみだったが、火曜日にはエビ養殖の水質管理に関するプレゼン発表、水曜日にはエビの感染症に関するプレゼン発表がありこの週は毎日、日付を超えてプレゼン作りをしていた。木曜日には 2 週間のプログラムでカセサート大学に来ていた東大生とエビの養殖場およびティラピアファームの見学に行った。その後、エビの寄生虫チェックを行った。エビに関する授業は北大ではあまりないため、知識がほぼゼロだった。その上でのプレゼン作りは正直きつかったがエビ農場の管理の難しさを知り興味が持てた。

2 週目は養殖魚に関しての講義を受けた。水質を保つ機器について、病気についての講義がありエイの農場、金魚の農場、ティラピアの農場を訪問した。金魚の農場では病気の金魚を持ち帰り、寄生虫検査を行った後に学生のみで抗生物質の投与、および空気を抜いてあげるなどの治療を行った。学生のみでマネジメントに対する勧告を考え、実際にトリートメントを行うのは少し衝撃的であった。そして金曜日にプレゼンを行った後、今までのグループは解散して新しいグループになるので farewell party を行った。エビの先生がテナガエビを 10kg 分くださったのでエビ BBQ パーティになった。私達はこの日までに練習してきたよさこいを披露して、タイ人もこの日までに仕込んできたダンスを披露してくれた。私達も正直、同じグループの子にこんなにお世話になると考えておらず日本からのお土産は大人数用のばらまきお菓子しか持ってきていなかった。なのでグループの子たちには手作り小物をプレゼントしたが日本製の小物を持ってくれば良かったと思う。

土曜日に酪農生、東大生がキャンペンセンに来て、日曜日にはアユタヤにみんなで連れてってもらった。



《Equine unit》

このユニットでは馬の physical test を教えてもらい、大学内の病院で患畜の治療を見学した。北大では病気の馬は見たことがなかったが様々な疾患の馬が来ていた。多い日は10件ほど見た。眼の病気や脚の特に、腱と蹄の病気が多いのに加えて法定伝染病であるトリパノソーマ症が2週間で3件来たのが衝撃的であった。タイでは tabanus という種のアエドが多いから蔓延するらしいが、他にも高密度で家畜とウマと一緒に飼ってしまっていることが蔓延の要因の1つになっているらしい。また、馬を新しい農場に移動させるときには臨床症状の見られる馬しかあまり検査されないらしいし、検査結果が出る前に別の農場に売ってしまっているなんて状況もあるらしい。こうしたことは家畜保健衛生所の方が管理しているはずだが、連携がうまくいっていないことが問題点だそうだ。馬ユニットは見学が主であったが、先生や院生がたくさんいて治療薬、治療法など様々なことを教えてくれた。治療法はこの病院では試験的に行っていることも多くあってとても面白かった。

《Wildlife unit》

月曜日はエキゾチックアニマルの講義であった。クイズ形式で沢山知らないことがあって困ったが、知識は頭に入った。火曜日はアユタヤにあるリアルズーという施設でカメに抗生物質を投与したりカメの水槽の大掃除をしたり、ヘビの観察を行った。すごいたくさんの種類の爬虫類がいてなかなか楽しかった。水曜日から金曜日はバンテンというタイ固有のウシをカンチャナブリ国立公園に返すプロジェクトの見学のためカンチャナブリに泊まった。このウシは絶滅危惧種であり、このウシが繁殖することはトラのエサにもなるからカンチャナブリ全体の環境保全に繋がるようだ。レッドブルが協賛についている一大プロジェクトで国立公園のレンジャーさんの他にも麻酔専門獣医師などが来ていた。約40人くらいヒトがいた気がする。水曜日には作戦会議およびルートの最終確認を行い、返す場所の確認も行った。泊まった場所は、シャワーのお湯も出ないような、虫が耳に入ってくるといけないから耳栓して寝ないといけないような所ではあったが、とてもワクワクした。木曜日は朝5時には起きてウシを放牧した。ウシを運ぶトラックに乗って私たちも移動したが明らかにウシがトラック上で麻酔から覚醒していて度々、蹴りを感じて怖かった。。。ウシを放牧した後はみんな感動だった。この日はウシの放った森の中でレンジャーさんとキャンプした。言語が上手く通じないながらもお酒を飲んで踊ったり、少し語りあえた。夜空の下で卒研に関する授業もあった。そしてこの日は夜にゾウが水飲み場に来たのをレンジャーさんに見せてもらった。至近距離で野生のゾウを見たのは初めてでとても感動した。だけど先生曰くゾウが人間の水飲み場に来てしまうのはマイコバクテリウムが感染してしまうかもしれないから危険らしい。金曜日の朝は、少し人獣共通感染症の講義を聞いた後、出発した。レンジャーさんにはすごく良くしてもらってダンスを披露したが、タイ語でも上手く感謝の気持ちを伝えられなくて何も返せないのがもどかしかった。11時にキャンパスに戻ってきて1時から5年生の one world one health のプレゼン授業に参加した。5年生のプレゼンはどれも本当に良く調べられていたし見る人を惹きつけるような面白いプレゼンが英語でできていることに感動した。また、周りの反応も良かったし純粋に授業が楽しかった。そして何よりいいと思ったのが自分たちの国ではどのように感染症対策しているか自国のことを良く知っていたことと、one world one health に対してこれがどうゆう意味なのかを自分なりに解釈してそれぞれのグループが述べていたことである。私も何度も聞いたことあった言葉だがクラスメートと話し合ったりすることなんてなかった。だけどこのプログラムの基礎にもあるような大事な考えだし、この言葉に関して授業があるのはなんだかいこと



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

だなと思った。結局 13 時から 19 時まで授業があってとても疲れたが、バタバタの中身の詰まった 1 週間だった。

《Bovine unit》

3 週間あった。1 週目はノンポーという場所に行って毎日、往診に出向いた。様々な形態の農場を見た。衛生面の管理が行き届いておらず乳房炎の問題が多かった。搾乳時に消毒薬を使っている農場の方が少ないのでは、という具合であった。明らかに乳房炎と分かるようなミルクも普通に出荷されていた。全てパステライズするから問題ないらしい。ノンポーで働く獣医師は 9 割が女性でみんなパワフルだった。朝早く起きてみると 6 時から走っていたことが分かった。農場は小規模な家族経営が大半を占めており抗生物質は自分で勝手に投与してしまうし飼料も自分で調整するから鼓脹症のウシもいた。

2 週間は学校のモデル農場で直検練習、人工授精練習、麻酔練習、削蹄練習をさせてもらった。13 時から 17 時くらいまで 1 人 1 人ずっとやらせてもらうからとても良い練習になった。日本では交替で行い、何かの作業は友達が行うのを見てるだけ、になってしまうがタイでは 1 人ずつ実習のテストがあるくらい全部やらせてくれるみたいだ。麻酔法は初めて自分で行うものも多く戸惑いもあったが最後には感覚も掴めて非常に良かった。

3 週間は往診随行と大学での診療をした。ルーメンアシドーシスが多かった。濃厚飼料としてバナナを与えていたり、芋の粉を大量に与えていたり衝撃だった。また 1 日目に治療したはずのウシのルーメンアシドーシスが再発していて事情を聞くと 1 日目に治ったと思ってまた問題のある濃厚飼料を与えたなんて農家さんもいた。農家さんに正しい知識を教えることも大事だなと感じた。衛生面の管理不行き届きから来る子宮内膜症もあった。また東南アジアならではの、ウシ流行熱もかなり流行していた。やはり日本と違った問題点がかなり多く見られて興味深かった。

大学での診療ではブルセラ症などが見られた。この週は木曜日に総合テストがあった。復習テストだった。そしてテストの後は farewell party があった。バンコクの学生たちも来てくれて最後にはみんな飲みに行ってお祭り騒ぎだった。

《生活面》

勉強においても食事においても旅行においてもバンコクに買い物に行くにおいてもタイの学生、特に同じグループの子たちが私たちをすごくサポートしてくれた。だから授業で困ったこと、寂しくなること、生活で不便なことなんて私にはなかった。これはタイが wet な国民性だからなのかもしれないがとても助かった。北大生の場合は誰もお腹を壊すことも、けがすることもなかったのはいつも私たちのことを気遣ってくれているタイの友人がいたことが理由の一つにあると思う。タイで勉強して知識が頭にたくさん詰まったのと同じくらい、たくさんの思い出で胸がいっぱいになった。Wifi が繋がりにくいか、メールが届きにくいかちょっとした問題もあるとは思いますが、生活面における満足度はかなり高かった。

また、週末にはたくさん観光する時間があり、タイ人に様々な所に連れてってもらった。国立公園がかなり多くあり、豊かな自然を楽しめるのでお勧めである。キャンペンセンからの交通の便は正直良くない。。。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

《今回の実習を通して》

私は感染症コントロールにおいて国際的に活躍する獣医師になりたいと思い、タイの農場がどんなものであるのか、実際どんな感染症が問題になっているのか知りたいと思い参加した。結果、この目的は達成できた。なぜなら、私はたくさんタイの農場に行く機会を与えてもらい、十分に先生や学生とディスカッションする時間をもらえた。その結果、タイにおける感染症の問題点は獣医師の手が回らなくて農家さんを管理しきれていない、それにより農家が勝手に抗生剤を使い耐性菌がたくさんでていること、家畜保健衛生所への報告がなく食い止めるべき法定伝染病が蔓延していることなど感じ取ることができた。ただ、1つ悔やまれる点は私自身に日本の知識が十分になかったこと、私の英語力がそこまで高くなかったことであった。もし私に日本の農場に関する知識がもっとあれば、英語で上手く伝えられたらもっとディスカッションできるのに、と思えたことは何度もあった。自分自身が上手くやれなくてもどかしい思いをしたからこそ後輩には頑張ってもらいたい。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	藤本 悠理	北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

1. プログラム

a. 9 月 13 日（土）、14 日（日）：オリエンテーション、大学案内

13 日の夕方にカセサート大学カンペン・セーンキャンパスに到着した。獣医学部内の会議室でオリエンテーションを受けた。その後、貸与された自転車に乗って寮へ移動した。夜には獣医学部の新入生歓迎パーティに参加した。

14 日は授業の内容についてのオリエンテーションを受けた。その後タイ人学生にキャンパス内を案内してもらった。学食、マーケット、生協、コンビニ等のほか、プールやスポーツジムなどもあった。

b. 9 月 15 日（月）～ 28 日（日）：Swine Unit

15 日から 28 日までの 2 週間は Swine Unit であり、豚の疾病や農場管理について学んだ。

最初の 1 週間は農場のマネジメントについて学んだ。大学で講義を受けた後バンで農場に向かい、実際の農場を見学した。妊娠豚用豚舎、幼豚用豚舎および子豚用豚舎等を見学し、従業員にその農場での豚のマネジメントについて話を聞いた。大学に戻った後、見学した農場について、問題点およびその改善法についてディスカッションを行なった。金曜日に、訪問した農場についてプレゼンテーションを行った。

次の週は豚の感染症について学んだ。病原体や病理所見、ワクチンについての講義を受けた。臨床症状を示している豚や死体が大学に運ばれてくることが週に幾度かあった。豚を剖検し、臨床症状や病理所見から病原体を推定し、同定検査に供した。農場からのワクチン接種状況や病気の発生状況を踏まえ、臨床症状、病理所見、病原および治療・予防法についてのプレゼンテーションを金曜日に行なった。

c. 9 月 29 日（月）～ 10 月 12 日（日）：Avian Unit

9 月 29 日から 10 月 12 日までの 2 週間の Avian Unit では、家禽の疾病について学んだ。

農場見学では特に衛生管理や家禽の健康管理などに注意して従業員に話を聞いた。日本では衛生管理の厳しい鶏農場を見学することは非常に難しいため、大変貴重な機会を得られた。鶏以外にもアヒルやウズラの農場、また鴨肉の工場なども見学した。また、農場から孵化が遅れている卵や死亡卵を貰い、卵を割って孵化遅延や胚死亡の原因を探った。卵の品質検査や、寄生虫に実験感染させた雛の解剖なども行なった。この Unit でも見学した農場とその問題点に関しての他、鶏の感染症とそのワクチンなどに関するプレゼンテーションを行なった。

d. 10 月 13 日（月）～ 24 日（金）：Aquatic Unit

13 日から 26 日までの 2 週間は Aquatic Unit であり、それぞれの週でエビおよび魚に関して学んだ。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

魚やエビの疾病の他、その健康に影響する因子（水質や水温管理など）に関しても学習した。稚魚や成魚、食用魚および観賞魚と様々な養殖場を見学した。大学に連れて来られた魚の体表をスクレイピングし、顕微鏡で寄生虫を観察した。また、浮袋から空気を抜いてやりたり水に抗生物質を追加したりと、実際の治療も行なった。日本では魚病に関して学習する機会はほとんど無かったため、大変新鮮で興味深かった。

e. 10月25日（土）、26日（日）：オリエンテーション、大学案内、タイ観光

この週より、バンコクキャンパスで学習していた東大生および酪農生がカンペン・セーレンキャンパスに移った。そのため25日には、東大生・酪農生とともに後半の実習に関するオリエンテーションを受けた。その後、バスで大学内を案内された。最初のオリエンテーションでも自転車で学内を案内してもらったが、バスで移動すると想像以上にキャンパスが広いことがわかった。北大と比較して10倍程の広さがあるように思われた。

26日にはタイの観光に連れて行ってもらった。元王宮や水上マーケットを見学した。観光自体も楽しかったが、これによって東大生・酪農生と交流出来たことも大きかった。

f. 10月27日（月）～11月2日（日）：Wildlife Unit

この週はWildlife Unitで、野生動物に関して学んだ。大学内にゾウの治療用の施設と野生猛禽類の治療用の施設があり、そこでゾウおよび猛禽類の治療や保定、野生動物の保護についての講義を受けた。

また、国立公園および爬虫類・両生類の動物館を見学した。国立公園ではそこでのゾウおよびトラの保護活動や、シカの生態のモニタリングについての説明を受けた。ゾウが細い木を倒しつつ通った跡やトラの糞などを見ることができた。動物園では爬虫類の生態や治療について学び、カメに抗生物質を経口投与した。

g. 11月3日（月）～23日（日）：Bovine Unit

11月3日から23日までの3週間はBovine Unitであり、牛の疾病に関する講義を受けた。乳牛がメインであったが、肉牛や、牛以外にもヤギなどの他の反芻獣の実習を行うこともあった。

3日から9日までの一週間は、郊外にある大学附属の別の動物病院に移動して実習を行った。午前に乳房炎の講義を受け、午後は実際に農場を見学して問題点がないか確認し、乳頭の状態や乳中の体細胞数を調べた。また、先生方の往診に同行し、治療の様子を見学した。金曜日に、訪問した農場での乳房炎の状態や改善点などについてのプレゼンテーションを行った。

10日から16日までは大学内の農場で実習を行った。乳牛の削蹄やミルクングパーラーでの搾乳の様子の見学、肉牛で直腸検査、人工授精、採尿および採血などを行った。日本での実習はいつも気性の大人しいホルスタインで行なっていたため、強暴な肉牛での実習は怖かったが面白くもあった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

17日から23日は大学の動物病院で、先生方の往診に同行したり、運ばれてくる患畜の治療を行ったりした。脱腸の子牛や角の折れた牛、関節炎のヤギなど様々な症例が見られた。往診に同行した際に鼓腸症の子牛を診たが、その子牛が大学病院まで運ばれる間に死亡してしまったのが大きく印象に残った。

h. 11月24日（月）～12月4日（木）：Equine Unit

11月24日から12月4日まではEquine Unitで、大学内の馬の治療用の施設で運ばれてくる患畜の治療を行なった。各グループ1頭の馬を担当し、その馬の治療を行なった。また、診療の間には馬の治療に関する論文を読んだ。最終日に、各グループが担当した馬についておよび論文についてのプレゼンテーションを行なった。

また、このUnitの間大学祭が開かれており、学内に非常に多くの屋台が出ていた。料理、雑貨、射的などの遊びのほか家電、服、本など様々な屋台が出ており、非常に賑やかだった。特に印象に残ったのはペットを売っていた屋台で、衛生面でも動物福祉の面でも問題に思われる点が多く、大変気になった。

i. 12月5日（金）：国王誕生日、パレード

12月5日は国王誕生日であり、タイの伝統衣装を着せてもらって、大学で行われるパレードに参加した。留学の最後として、とても楽しく貴重な経験を得られた。

j. 12月6日（土）：観光、帰国

6日は朝からバンコクに向かい、荷物をバスに預けて夕方までバンコクを観光した。各自自分の興味のある場所に行った。私はチャトゥチャック・ウィークエンド・マーケットという非常に大きいマーケットに行って買い物をした。夕方に集合して空港に向かい、帰国した。

2. 生活

a. 食事

大学内では毎日マーケットが開かれており、そこで夕食を購入することができた。他に学食や大学内のコンビニでも食事を購入できた。他に大学内のレストランやコーヒーショップなどに行くこともあった。

タイの食事は辛く、また飲み物は非常に甘かった。私は辛い物は苦手だったため、タイ人学生に辛いものを教えてもらうか、あるいはスパイス抜きで注文していた。

b. 買い物

日用品に関しては生協が週に一度開かれるビッグマーケットで購入した。タイ人学生の車に乗せてもらい、大学近くのスーパーに行くこともあった。

c. トイレ

タイのトイレはトイレトペーパーが置いていないことが多いため、外出の際にはティッシュペーパーが必須だった。



d. LINE、Facebook

学生同士の連絡ツールとして、LINE を利用した。北大生のためのグループ、東大生・酪農生を含む日本人学生全体のグループ、および同じ授業グループの日本人学生・タイ人学生をまとめたグループの3つを使い分けていた。翌日の授業が行われる時間・教室の連絡や、授業の内容の確認などに利用した。

また、写真やプレゼンテーションファイルの共有に、Facebook を利用した。同じ授業グループに所属している学生で非公開グループを作成し、そのグループ内でファイルを共有した。

3. 学習

a. 英語

講義中やディスカッション中に専門的な単語が理解できずに苦労した。タイ人学生は普段から専門的な単語は英語で学んでいるらしく、日本人学生の語彙の少なさが大きく浮き彫りになった。特に解剖用語および感染症の名称を留学前に予習しておくべきだった。日常会話にはあまり問題はなかった。

また、タイ人の発音は k と g、s と z の区別が曖昧で、慣れるまでは若干聞き取りづらかった。

b. 日本での家畜の感染症

タイではこうなっているが、日本ではどうなのか、という質問を先生や学生からよく受けた。日本の家畜の感染症について、発生状況、発生した場合の対応、ワクチンの種類や接種状況などについてよく学習しておくべきだった。

4. その他

a. グループ

留学前半 (Swine、Avian、Aquatic) はタイ人学生 4 名＋日本人学生 3、4 名の 2 グループに別れて講義を受けた。各 Unit の期間は 2 週間だったが、1 週目はグループ別に、2 週目ではグループごと入れ替わる形で講義を受けた。同時に同じ Unit の講義を受けているため、2 グループで協力してプレゼンテーションを作成したり、2 週目に入る前にもう一方のグループに 1 週目の授業の様子を訊ねたりした。タイ人学生と日本人学生がほぼ同数であったこともあり、授業中にはタイ人学生が一对一でフォローをしてくれるなど色々と世話を焼いてくれ、タイ人学生と非常に仲良くなれた。

留学後半 (Wildlife、Bovine、Equine) はタイ人学生 4、5 名＋日本人学生 6、7 人の 4 グループに別れ、グループ別に授業を受けた。タイ人学生の割合が減ったこともあり、タイ人学生とは前半程仲良くはなれなかった。しかしその代わりに、東大生・酪農生と交流する機会が多く、他大学の話を聞いたことは非常に有意義だった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

b. デジタルカメラ

観光の際に写真を撮るだけでなく、訪れた農場の畜舎や家畜の様子を撮ったり、剖検の際に臓器の写真を撮ったりなど、デジカメを使う機会が多かった。撮った写真はプレゼンテーションに利用した。携帯・スマホで撮影してもよいが、個人的な意見としてはデジカメの方が使い勝手がよかった。

c. Wi-Fi ルーター

寮からは有線 LAN でインターネットに接続できたが、2 人 1 部屋なのに対し LAN ケーブルが 1 本しかなかった。幸い 1 人が Wi-Fi ルーターを持ってきたため、それを使って全員同時にネットに接続することもできた。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	森田 鮎子	北海道大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

■ グループ構成について

最初の 1 ヶ月半は日本人は北大生だけでした。北大生 7 人は 2 グループに分かれ、タイ人学生 4 人に対し北大生が 4 人ないし 3 人でした。日本人学生とタイ人学生の比率が 1 : 1 だったこと、また 1 クラス 8 人の少人数制だったことが、ディスカッションや質問をしやすい環境でありがたかったです。

後半は酪農学園大学と東京大学の学生も加わり、日本人学生 7 人に対しタイ人学生 4 人程になってしまったことが、タイ学生の負担増加になっていないか気がかりでした。

■ Swine unit

【スケジュール】

- 9 月 15 日 : 講義(farm management and infectious disease)
- 9 月 16 日 : 農場訪問(Thankasem farm; Phrabuddhabat district, Saraburi province)
- 9 月 17 日 : 休講(大学の自習室で金曜日に向けたプレゼンテーション作成)
- 9 月 18 日 : 農場訪問(SPM farm; Ratchaburi province)
- 9 月 19 日 : プレゼンテーション(訪れた各農場の問題点とマネジメント)
- 9 月 22 日 : 講義、剖検
- 9 月 23 日 : 講義(infectious disease)
- 9 月 24 日 : 休講(大学の自習室で金曜日に向けたプレゼンテーション作成)
- 9 月 25 日 : 講義、剖検
- 9 月 16 日 : プレゼンテーション(剖検症例の所見、診断、治療と対策)

講義は、タイでみられる感染症(豚コレラ、PRRS、PED、豚サーコウイルス関連感染症、口蹄疫、豚インフルエンザ、マイコプラズマ、豚の連鎖球菌症、大腸菌症、サルモネラ、滲出性表皮炎、豚丹毒、グレーサー病、豚胸膜肺炎、コクシジウム、バランチジウム、豚鞭虫、豚回虫、トキソプラズマ)について先生が質問し、学生が答え、足りない所・間違っている所を先生が補足する、という形式でした。病原、臨床症状、についてだけでなく、特徴的な剖検所見、ワクチン、治療法も質問される、より実践的な内容でした。

一人の先生に対して学生 40 人が講義を聴くだけの日本の形式とは異なり、学生が発言することが非常に多かったです。講義というよりもディスカッションのようでした。

最初は臨床症状、剖検所見の英語がほとんど分からなくて苦労しました。しかし、タイ学生が一つ一つ丁寧に説明してくれたので、非常に助かりました。ありがたかったです。

農場訪問の実習では、気温、湿度、換気、エサ、pig weaned/ sow/ year、pig weaned/ litter、litter/ sow/ year、死産率、ミイラ化胎児率、といった農場のマネジメントが注目されました。衛生管理区域、消毒槽といったことへはあまり注意が払われていない印象で、日本との管理体制の違いに驚きました。



■ Poultry unit

【スケジュール】

- 9月26日：イントロダクション
- 9月27日：農場訪問(Siroy farm; Angthong Province)
- 9月29日：講義(chick quality)、プレテスト
農場訪問(産卵鶏)
- 9月30日：講義(Duck disease and farm management)
- 10月1日：胚死滅卵検査実習(TFG farm)、ヒヨコ解剖(chick quality)
- 10月2日：剖検(コクシジウム実験感染ヒヨコ)
- 10月3日：胚死滅卵、孵化遅延卵検査実習(TFG farm)
- 10月4日：講義(ウズラ)、農場訪問(ウズラ)
- 10月6日：講義・実習(卵の品質検査)、プレゼンテーション(家禽のワクチン)
- 10月7日：講義、PCR 実習
- 10月8日：プレゼンテーション(Siroy farm)、剖検(中雛症例)、症例検討
- 10月9日：アヒル肉加工会社訪問(バンコク)
プレゼンテーション(chick quality、卵の品質)
- 10月10日：プレゼンテーション(chick quality、胚死滅卵検査、卵の品質、
コクシジウム実験感染ヒヨコ、家禽のワクチン)、テスト

Siroy farmのプレゼンテーションでは、農場のマネジメントについて、安全な卵の生産について、という2つのテーマに基づいて、農場を分析しました。この時、OIEの基準を元にしたタイの農場衛生管理やアニマルウェルフェアの基準を用いました。タイにもマニュアルが存在し、規定はされているものの、農家では実践されていない項目も多かったです。

衛生管理がしっかりされていると感じたのは、TFG farmの孵化場とアヒル肉加工会社だけでした。孵化場は衛生管理が厳しく建物の中に入ることが出来なかった程です(日本ではそれが普通でしょうが、タイではどの農場も容易に入ることが出来たため意外でした)。アヒル肉加工会社は欧米諸国、日本、中国への輸出を目的としていたため、HACCAPを遵守していました。豚や鶏農家の衛生管理とは対照的で、日本と同じレベルでした。

ワクチンのプレゼンテーションでは、家禽の感染症(家禽コレラ、あひるペスト、パルボウイルス感染症、new duck syndrome、大腸菌症、トリメタニューモウイルス感染症、レオウイルス感染症、産卵低下症候群、コクシジウム、サルモネラ、伝染性コリーザ、伝染性ファブリキウス嚢病、マイコプラズマ、マレック病、鶏痘、鶏脳脊髄炎、伝染性喉頭気管炎、ニューカッスル病、伝染性気管支炎、鶏伝染性貧血)について、一人一つ発表しました。その内容が、剖検時の病変の写真を提示する、タイで使われているワクチンについて、だったため大変でした。ワクチンについては、商品名、製造会社、内容(live or kill、株)、ドーズ、投与経路、ワクチンスケジュール、保存方法を事細かに調べねばならず、タイ人学生の助けが無かったら出来なかったのではないかと思います程でした。

ヒヨコの解剖、剖検では一人一羽与えられて全ての手順を自分で行うことが出来たため、技術習得に繋がりました。



■ Aquatic unit

【スケジュール】

- 10月13日：講義(エビ)
- 10月14日：プレゼンテーション(水質管理)
- 10月15日：プレゼンテーション(エビの感染症)
- 10月16日：農場訪問(エビ Berm farm)、実習(エビの顕微鏡観察)
- 10月17日：プレゼンテーション(エビ農場)、講義(エビ感染症)、グループテスト
- 10月20日：講義(薬の濃度計算、魚のフィルター、魚病)、大学内水槽見学
- 10月21日：農場訪問(金魚、エイ；カンチャナブリ)
- 10月22日：農場訪問(ティラピア；Nakornpathom province)、入院金魚の世話
- 10月23日：チュラロンコーン大王記念日のため休講
- 10月24日：講義、グループ試験(金魚農家マネジメント)
プレゼンテーション(金魚、エイ、ティラピア農場訪問)

エビの水質管理と感染症のプレゼンテーションが二日連続の発表だったため、準備期間が短く大変でした。水質管理ではpH、Alkalinity、溶存酸素、濁度、塩度&ミネラル、硝酸塩、アンモニア、バイオフィロックについて一人一項目調べて発表でした。エビの感染症はEarly mortality syndrome、White feces syndrome、Microsporidia、Infectious myonecrosis、Tauravirus syndrome、White spot disease、Yellow head disease、Infectious hypodermal and haematopoietic necrosisについて調べて発表でしたが、日本では全く学んだことがないか、又は日本の教科書では最後の方に数行書いてある程度の病気ばかりだったので、下知識が無い中英語の文献を探すのに苦労しました。しかし、先生が一つ一つ丁寧に解説してくれたため、非常に興味深い講義で印象深かったです。

■ Wildlife & Exotic pets unit

【スケジュール】

- 10月27日：講義(象の臨床)
- 10月28日：国立公園訪問(カンチャナブリ)
- 10月29日：爬虫類・両生類園訪問(アユタヤ)
- 10月30日：講義(猛禽類、ウサギ)、大学内の野生生物保護センター見学
- 10月31日：講義(ウサギ、カメ)
- 11月1日：病院実習(バンケーンキャンパス Exotic pets unit)

象の病院実習が無かったことが一番の心残りです。ノンホーに泊まり込みで牛・ヤギ農家の往診随行があったように、チェンマイに泊まり込みで象の病院実習がやりたかったです。

爬虫類・両生類園訪問では園を見学して蛇にエサを与え、カメの世話をしただけでした。猛禽類についても、センターの取組みと猛禽類の扱い等について講義を受け、センターを見学するにとどまりました。Wildlife & Exotic pets では、出来ることなら採血・保定・薬の投与といった実践的な実習をもっとしたかったです。



グループによってはカンチャナブリの国立公園に宿泊してタイ固有の牛(バンテーン)の野生復帰を見たり、パタヤに行って象の診療をしたりと、一番グループ間でやったことに差があったのはWildlife & Exotic pets unitのように感じました。

■ Bovine unit

【スケジュール】

ノンホーで泊まり込み実習：11月4-7日

11月3日：講義(乳房炎)、往診随行・実習(乳房炎検査)

11月4日：往診随行

11月5日：往診随行

11月6日：往診随行

11月7日：プレゼンテーション(農場における乳房炎の罹患調査と病原分析)

大学の農場で実習：11月10-14日

11月10日：講義

11月11日：講義、実習(削蹄、直腸検査)

11月12日：講義、実習(局所麻酔、採血、第一胃送管)

11月13日：講義、実習(人工授精)

11月14日：プレゼンテーション(大学農場におけるBLV蔓延について)

大学病院で実習：11月17-21日

11月17日：病院実習

11月18日：病院実習

11月19日：往診随行(大学近郊)

11月20日：往診随行(大学近郊)

11月21日：プレゼンテーション(症例について)

往診随行や病院実習では、牛の種類が豊富(ホルスタイン、肉牛、タイの固有種、ペット・ショーで用いられる耳が長く美しい種)であること、牛だけでなくヤギも患者としてよくある症例であること、が印象に残りました。

一般身体検査、採血、薬の投与、ワクチン接種、糞便採取(ヤギ)、を学生である自分たちでやらせてもらったのが、日本ではこれほど経験をつめないため、非常にありがたかったです。大学の農場実習では一人一頭以上の牛で削蹄、直腸検査、局所麻酔、採血、第一胃送管、人工授精の実習をさせてもらえ、自分が感覚をつかめるまでじっくり行うことができました。

ブルセラ病、バベシア、アナプラズマ、トリパノソーマ、(グループによっては口蹄疫や牛流行熱)、牛白血病、といった日本では見ることのできない感染症に感染した牛やヤギの症例を見ることができ、貴重な経験となりました。勿論、日本でも見ることの出来る、ケトーシス、ルーメンアシドーシス、乳房炎といった症例も多かったです。



■ Equine unit

【スケジュール】

- 11 月 24 日：大学農場で実習（身体検査）
 - 11 月 25 日：病院実習
 - 11 月 26 日：病院実習
 - 11 月 27 日：病院実習
 - 11 月 28 日：病院実習
 - 12 月 1 日：病院実習、プレゼンテーション（症例について）
 - 12 月 2 日：病院実習
 - 12 月 3 日：病院実習、プレゼンテーション（論文紹介）
 - 12 月 4 日：Bovine ペーパーテスト、口頭試問
- Equine 大学農場での実地テスト

自分が 4 番目（最後）のグループで、症例数もさほど多くなかったことから、病院実習では castration 後の馬 2 頭の身体検査をし、陰囊を洗うという作業を毎日メインで行いました。その他には、顎の骨を骨折してしまった為に通常の食事が出来ない馬に流動食を与え、首の筋肉に熱感があり首を曲げることが出来ない馬の身体検査をし、消炎剤を投与する、といったことを日々行いました。

北海道大学には馬に触り、一般身体検査、採血、投薬、蹄検査、歯を見ることによる年齢確認、といったことは出来ないのも、貴重な経験となりました。

Bovine のペーパーテストでは血液生化学検査の正常値やワクチン、薬のコマーシャル名を聞かれ、日本のテストでは聞かれないことばかりだったので、注目する点の違いに驚きました。

Equine の大学農場での実地テストは実際の症例を前に、何の病気か、投与する薬はどれか、を聞かれました。実際に身体検査をし、採血、投薬のためのシリンジ・針の準備、投薬量の決定、採血・投薬もしました。日本では無い形式のテストでした。



Report 2014

Tokyo University

世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	内田 あや 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 19 日
派遣先	タイ カセサート大学

1) 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

9/13～10/24

バンケンキャンパスにて小動物臨床を学ぶ

前半：内科（OPD、ネコ科、泌尿器科、放射線科、皮膚科、神経科、循環器科、眼科、処置室、エキゾチックアニマル科）

後半：外科（軟部組織、整形外科、外来外科）

外科では週に一回のペースで主に症例に関する発表を班ごとに行い、症例に関するレポートを提出した

10/25～12/6

カンペンセンキャンパスにて大動物臨床を学ぶ

内訳は以下の通り

3 週間：牛

2 週間：馬

1 週間：wild life

週に一回のペースで主に症例に関する発表を班ごとに行った

12/7～12/19

バンケンキャンパスにて

エキゾチックアニマル科に 8:30～17:00 でほぼ毎日通い、2 日に 1 回の割合で夜 17:30～20:30 の外科手術に参加

2) 実習先で学んだことを大まかに

小動物、大動物共に臨床の知識を学び経験を詰む事ができました。またすべての診療、講義は英語で行われたため英語での医学用語の知識などの幅広く得ることができました。

大きかったのは経験をつむことができた事です。普段日本で暮らしてはできない体験をする事ができました。

また現地の学生とのコミュニケーションを通して文化的、宗教的な違いや価値観の違いなどを学ぶことができ、また一緒にタイに行った日本人や現地で仲良くなったタイ人との間に友情を築く事ができました。

3) そのほか生活の面で報告すべきことがあれば

初は暑さやスコールなどに慣れず戸惑うこともありましたが、とりたてて大きな問題はなく集中して実習に取り組む事のできる環境でした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	長尾 拓真 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 19 日
派遣先	タイ カセサート大学

1) 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

・ 9 月 19 日～10 月 26 日（6 週間）

バンコクにあるバンケンキャンパス内の動物病院にて、小動物臨床実習を受講した。
実習プログラムは、前半 3 週間は内科実習、後半 3 週間は外科実習から構成されていた。
また、内科実習は午前午後で各科（循環器科、消化器科、眼科等）をまわり、外科実習は軟部外科及び硬部外科をまわった。

・ 10 月 27 日～12 月 6 日（6 週間）

カンペンセンキャンパス内の動物病院やカンチャナブリーの国立公園内等で、大動物臨床実習を受講した。実習プログラムは、牛実習 3 週間、馬実習 2 週間、野生動物実習 1 週間から構成されていた。それぞれの実習先は、下記の通り。

牛実習：カンペンセンキャンパス内のデモンストレーションファーム及び動物病院、ノンポー動物病院

馬実習：カンペンセンキャンパス内のデモンストレーションファーム及び動物病院

野生動物実習：カンチャナブリー国立公園、パタヤ観光地内の象使い宅等

・ 12 月 7 日～12 月 18 日（2 週間）

バンコクにあるバンケンキャンパス内に戻り、小動物臨床実習（外科）を受講した。
実習プログラムは、各生徒の希望した科（東大生のみ）のみから構成されていた。

2) 実習先で学んだことを大まかに

・ バンケンキャンパス内の動物病院での小動物臨床

大まかに区分して、内科実習及び外科実習から構成されていた。

内科実習では、毎日ローテーションで各科（循環器科、消化器科、眼科、エキゾチック動物科、猫科等）をまわったため、幅広く各科を見学できて知見が広がった。日本に比して、より詳細に区分された専門科のため、各日でテーマを決めて予習可能であったため知識が深化できたと思う。

また、外科実習は、硬部外科・軟部外科・麻酔科をローテーションする形で受講した。
具体的にはオペへの助手としての参加が中心となり、日本では体験できないようなオペ経験（皮下組織・皮内縫合、眼摘、腫瘍摘出等）を得ることができた。また、毎週の症例プレゼンテーションや毎日のレポート提出があったため、英語でアウトプットする能力も磨くことができたと思う。

・ カンペンセンキャンパス等での大動物臨床

大まかに区分して、牛実習、馬実習及び野生動物実習から構成されていた。

牛実習では、カンペンセンキャンパス及びノンポー動物病院ではオペの見学や近隣農家の



往査、またデモンストレーションファームでは直腸検査・傍脊椎麻酔等の実技実習を経験した。東大では、5年前期までの農場実習で直腸検査等を経験したことがなかったため、新鮮で記憶に残る実習となった。

馬実習では、カンペンセンキャンパスの動物病院では、オペの見学や日常的な処置（蹄葉炎患者の蹄の消毒等）を体験した。またデモンストレーションファームでは、身体検査、削蹄や跛行検査等の基本的な実技実習を経験した。

野生動物実習では、カンペンセンキャンパスで象等の基礎的な授業を受講した後に、実際に国立公園や象使いの家等に行き、象の身体検査や跛行検査等の基本的な実技実習を経験した。日本では、動物園を除いて絶対に触れることのできない動物に実際に触れて小動物との身体の違いを体感できたことは、無二の経験になったと思う。

3) そのほか生活の面で報告すべきこと

個人的には、大きなトラブルや病気等なく気持ちよく過ごすことができました。

食事については衛生的に心配する方もいましたが、生ものや腐敗臭のする食べ物は避ける等の努力さえすれば、屋台で食べても健康上の心配は特になく感じました（主にキャンパス内の食堂で食べることになると思いますが）。

また、タイ人の先生方や生徒達は、殆ど全員が親切で面倒見の良い人ばかりであったため、授業後や休日に暇で仕方がないということはありませんでした。エクストラコースとして動物病院の実習を受講したり、ボランティアでの避妊去勢活動、タイ人の先生方や生徒達との旅行やバトミントン等、非常に充実したオフを過ごすことができたと思います。タイ国内のスポーツでは、バトミントンが非常に人気というイメージがなかったため、色々な年代の方同士でバトミントンを楽しんでいるというのは新鮮な発見でした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	庄子岳 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

1) 日付、実習先、施設名など

小動物臨床実習@ Bangkhen

内科実習：3 週間、9 月 15 日（月）～10 月 3 日（金）

外科実習：3 週間、10 月 5 日（月）～10 月 24 日（金）

大動物臨床実習@ Kamphaeng Saen

牛実習：3 週間、11 月 10 日（月）～11 月 14 日（金）（@Nong Pho）、11 月 24 日（月）～12 月 5 日（金）

馬実習：2 週間、10 月 27 日（月）～11 月 7 日（金）

野生動物実習：1 週間、11 月 17 日（月）～11 月 21 日（金）

選択実習@ Bangkhen

外科実習：2 週間、12 月 8 日（月）～12 月 17 日（金）

2) 実習先で学んだことを大まかに

小動物臨床実習

① 内科実習

グループごとに内科診療（外来診療、猫科、眼科、泌尿器科、皮膚科、エキゾチックアニマル科、神経科、放射線撮影科、内視鏡科…）などを日替わりで見る。三週間でケースレポートを一つ課された。診療科に応じて、各種検査、輸液等もやらせてもらえた。

② 外科実習

軟部外科、整形外科、麻酔を各一週間ずつ学んだ。一日一症例についてレポート、週一回のケースプレゼンテーション、三週間のうち一回の口頭試問を課せられた。軟部外科では手術の助手、場合によっては簡単な手術の執刀をやらせてもらえた。整形外科では手術の助手、麻酔では麻酔計画とそれに沿っての麻酔の実施をやらせてもらえた。各診療科とも、担当獣医師もしくは教員によるフィードバックを随時受けた。

大動物臨床実習

① 牛実習

Nong Pho にある動物病院では日本における農済によく似た形式で毎日往診に随伴した。各種検査をやらせてもらえることもあった。Kamphaeng Saen では一週間は動物病院もしくは往診にて症例や手術の見学、各種検査の実施、もう一週間は附属牧場で削蹄、直腸検査、人工授精、麻酔等の実習を行った。毎週、ケースプレゼンテーションがあり、最後に口頭試問を受けた。

② 馬実習

症例の診療の見学、および各種実習を行った（採血、カテーテル挿入、身体検査）。二週間でケースプレゼンテーション、論文プレゼンテーションを一つずつ課せられた。

で



③ 野生動物実習

ゾウの保護活動に関する講義、保護区の見学、エキゾチックアニマルに関する講義、動物園でのヘビの定期診療、ゾウの診療における各種検査、Bangkhenでのエキゾチックアニマル科における診療見学・各種検査を行った。

3) そのほか生活の面で報告すべきことがあれば

土日の実習が無いときは、バンコクを中心に国内各地の観光をさせてもらえた。タイ人が引率してくれることもあり、とてもありがたかった。
チェンマイで負傷し、関係者に多大なるご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	徳増 平 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 18 日
派遣先	タイ カセサート大学

9/13－10/24

バンコク内のカセサート大学バンケンキャンパスにて小動物臨床を行う

最初の 3 週は外科（整形外科、軟部外科、麻酔）

最後の 3 週は内科（猫科、消化器科、画像診断科、エキゾチックアニマル科、皮膚科、循環器科、OPD など）

外科では主に手術時のアシスタントとして参加した。

日本と違い、タイではかなり手術に参加することができる。

恰も好し去勢手術やマスの切除をさせていただくことが出来た。

また、普段の勉強の不足から全くわからなかった麻酔も、先生が根気よく丁寧に教えて下さったお陰で、なんとか麻酔をかけられる程度にはなることが出来た。

他にも数えきれないほど多くのことを教授いただくことが出来た。

誠に忝いことである。

内科では各診療科を周った。

人間の病院のように細分化されているため、それぞれの科にあった症例にのみ集中することが出来た。

猫科では待合室からして猫専用になっており、そのお陰なのかは知らないが、どの猫も落ち着いているように見られた。

特に衝撃を受けたのはエキゾチックアニマル科である。

日本ではまず見ることすら出来ない動物が多く来院していた。

例えば、スローロリスやフェネックなどである。

中には違法動物がいるらしいが、誰も気になぞ掛けていなかった。

これはタイの大きな国民性故かもしれない。

10/25－12/5

バンコクから離れ、カセサート大学のカンペンセンキャンパスにて大動物臨床を行った。

最初の 2 週は馬。

次いで 1 週野生動物。

最後の 3 週は牛。

馬での実習は主に外来の馬の世話、及び診療の見学であった。

王室の馬は他の馬とは段違いの毛艶の良さを誇っていた。

柵を咥えて暴れたため落架風になった馬もいた。

野生動物ではアユタヤにある動物園で亀や蛇などの爬虫類の世話を行った。

また、カンチャナブリにある国立公園に泊まりこみで行き、タイ固有種の牛の放牧を見学したり、野生の象に接近したりした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

牛では1週の間、カセサート大学ノンポーキャンパスに赴き、畜産農家の元へ往診に行った。

途中部屋の備品が破損したりしたが、これは冤枉である。

人生初となる直腸検査は楽しく、どうやら自分には僅かばかりだが直腸検査の才能の欠片のようなものがあるらしいことがわかった。

その後の2週間はカンペンセンキャンパス内にいる牛を用いて、麻酔や人工授精、削蹄などを行った。

最終週では大動物臨床に関する口頭試問及び実施試験を行った。

また、12/3にはカセサート大学のフェスティバルにも参加した。

12/6－12/19

東大の学生のみ、再びバンケンキャンパスに戻り、10日ほどの追加実習を行った。

実習内容は選択式で、私は外科を選んだ。

前回と同じように手術にアシスタントして参加した。

今回は骨折のプレーティングなどもさせていただけた。

生活の面、その他の報告はすでにレポートや他の媒体でも書いているので、今回は省略します。
提出が遅れてしまい申し訳ありませんでした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	和泉すみれ 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ~ 平成 26 年 12 月 18 日
派遣先	タイ カセサート大学

氏名 和泉すみれ

大学 東京大学

派遣期間 平成 26 年 9 月 13 日~12 月 18 日

派遣先 タイ カセサート大学

活動報告

9/15~10/3

実習 Surgery Unit

場所 バンケンキャンパス

10/6~10/24

実習 Internal medicine unit

場所 バンケンキャンパス

10/27~10/31

実習 Bovine

場所 ノンポー

11/3~11/9

実習 Wild life

場所 11/3 カンペンセンキャンパス

11/4 カンチャナブリ国立公園、野生保護区

11/5 アユタヤ爬虫類館

11/6,7 カンペンセンキャンパス

11/9 バンケンキャンパス Exotic unit

11/10~11/21

実習 Bovine

場所 カンペンセンキャンパス

11/24~12/3

実習 Equine

場所 カンペンセンキャンパス

12/4

試験 Bovine, Equine

場所 カンペンセンキャンパス

12/8~12/18

実習 OPDUnit

場所 バンケンキャンパス

生活面で報告すべきこと

たまにインターネットが使えなかったり、自転車が壊れたりしてしまったりと、少し不便でした。

それ以外は大変生活しやすい環境だったと思います。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	吉竹 涼平 東京大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 18 日
派遣先	タイ カセサート大学

・実習スケジュール

9/13 日本発-タイ着

14 実習の説明、キャンパス内ツアー、生活用品・携帯電話購入

15～ 小動物外科(バンケンキャンパス)

10/6～ 小動物内科(バンケンキャンパス)

10/25 バンコクからカンペンセンキャンパスへ移動、キャンパス内ツアー

10/27～ 大動物臨床(馬、カンペンセンキャンパス)

11/10～ 野生動物(カンペンセンキャンパス、アユタヤ、カンチャナブリ)

11/17～ 大動物臨床(反芻獣 1 週目、ノンポーキャンパス)

11/24～ 大動物臨床(反芻獣 2 週目、カンペンセンキャンパス内 Demonstration Farm)

12/1～ 大動物臨床(反芻獣 3 週目、カンペンセンキャンパス)

12/4 テスト(大動物臨床に関して、反芻獣は口頭試問・馬は実技)

12/5 Farewell Party

12/6 北大生・酪農生帰国

12/8～ 小動物外科(バンケンキャンパス)

・学んだこと

【全体を通して】

タイ(カセサート大学)では、診療活動において学生に任せる範囲が日本に比べると遥かに広く、日本で学生のうちは絶対に経験できないようなことをたくさんさせてもらった。また、そういった責任の伴う判断、処置を行っていく上で、まだまだ自分は知識が足りていないとも感じた(タイのある先生は、タイ学生は先に手を動かさせてもらえる分、教科書的な知識が足りていないとおっしゃっていたが、それでも自分たちより多くのことを知っていたと思う)。

ほぼ毎週、その週行った実習についてのプレゼンテーションをした。実習を1日やった上で、夜はプレゼンの準備、といった感じであったため、非常にハードではあったが、その分自分の勉強にもなったと思う。

【小動物】

上にも書いたように、非常に多くのことをやらせてもらったと思う。

外科では、1週ごとに軟部外科・硬部外科・麻酔のチームに入り、軟部・硬部では主に手術の助手をさせてもらい、麻酔では麻酔の計画をたて、それを実行する、といったことをさせてもらった。去勢や体表腫瘍の切除などの簡単な手術なら、執刀させてもらえることもあった。どれも責任が伴うことばかりであったため、勉強になったし、自分が何を知っていて、これから何を知らなければならないのか、ということがわかった。

内科では、様々な科(一般外来、消化器、神経、泌尿器、循環器、画像診断など)を半日ごとに回った。一般外来(OPD)では、学生が診療を行うことを前提としており、問診から治療まで、もちろん先生の指導の元ではあるが、全て学生がやっていた。自分もそれに参加させてもらったときは、問診以外のことをタイ学生と共にやることとなったが、知識も経験も足りてな



い自分は、わかることが少なく、勉強不足であることを痛感した。しかし、実際の症例を通して、病気について学ぶことができ、非常にためになった。

【大動物】

大動物臨床は、ほぼ経験ゼロの状態であったため、全てのことが自分にとって初めてであり、非常に興味深かった。北大や酪農大の学生の中には、大動物臨床の研究室に所属し、そこで経験をつんでいる人もおり、そうした人たちと話すのもよい刺激になった(自分の大学には、大動物臨床の道に進もうというひとはほとんどおらず、そうした人と話すのも初めてであった)。

1 週目は主に往診、2 週目は直腸検査・局所麻酔・削蹄などの技術の練習、3 週目は往診や入院患畜の治療を行った。どれも授業で聞いたことがあっても、実際に見たことや経験したことのないことばかりで興味深かった。

・生活面

基本的には特に不自由なく生活できた(バンコクの寮のベッドがダブルベッドなことには驚いたが…)。日本にいるころは少し心配していたデング熱やマラリアといった虫を媒介とする感染症や食中毒も、実際にはほぼ心配する必要のないことだとわかった(出発前のガイダンスでは、虫は必ず避けるようにして、日中は長袖長ズボンで、店で出された水、氷は飲まないで…といった説明を受けたが、実際現地に行ってみると、到底不可能であり、またその必要性も感じなかった)。野生動物の実習の週に泊まったカンチャナブリという地域では、トイレ・シャワーはタイ式、部屋の網戸は穴だらけで虫が入り放題、といったなかなかショッキングな体験をしたが、今となってはすごく良い経験だったと思う。



Report 2014

**Rakuno Gakuen
University**

世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	天沼 広巳 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学
9 月 13 日：タイ カセサート大学 バンケンキャンパスに到着 9 月 15 日～10 月 24 日 ・バンケンキャンパスの病院にて小動物のクリニカルローテーション ・前半 3 週間→内科ユニット、後半 3 週間→外科ユニット 10 月 25 日：カセサート大学 カンペンセン（KPS）キャンパスに到着 10 月 27～31 日：Wildlife ユニット 27 日：KPS キャンパスにて象の講義 28 日：カンチャナブリにて野生の象などを観察 29 日：アユタヤの Real zoo にて爬虫類の講義 30 日：KPS キャンパスにて猛禽類に関する講義 31 日：KPS キャンパスにてウサギに関する講義 11 月 1 日：バンケンキャンパスに移動しエキゾチックアニマルの実習 11 月 3～7 日：CattleⅢ ・カセサート大学 ノンポーキャンパスにて牛の往診や診療 (7 日にプレゼン発表) 11 月 10～14 日：CattleⅡ 10 日：KPS キャンパスにて感染症の講義とデモンストレーションファームの見学 11～13 日：成牛を用いて直腸検査、麻酔、削蹄、人口授精の実習 (14 日にプレゼン発表) 11 月 17～21 日：CattleⅠ - KPS キャンパスにて牛の往診、診療 (21 日にプレゼン発表) 11 月 24 日 12 月 3 日：Horse ユニット ・KPS キャンパスにて馬の診療と世話 (1 日と 3 日にプレゼン発表) 12 月 4 日：KPS キャンパスにて牛に関する口頭試問と馬に関する臨床試験 12 月 6 日：日本に向けて帰国	



・小動物 クリニカルローテーション

ー内科ユニット

・泌尿器・画像診断・心臓・ネコ・消化器・神経・内視鏡・皮膚・眼・エキゾチック・

OPD 科に分かれている。

※OPD とは、患畜が来院してから問診、検査、そして治療までを学生が主体となって診療を進めることができる科である。費用が安いのが飼い主にとっての利点である。

・タイ人4人と私1人でペアを組んで三週間上記した科をまわった。三週間という長い期間を一緒にまわったのでとても仲良くなれた。

・全体の流れとしては、患畜が来院したら、飼い主さんの主訴を聞き、問診をとり、検査をして治療プランを考える。ローテーション中はこれに足してそれぞれの科に特異的な検査をする。タイの飼い主さんは検査中もずっと病室にいて患畜の保定などを自らしていて、日本のシステムと違うところにギャップを感じた。我々は飼い主さんの前で採血や検査を進めていかななくてはならなかったが、よい緊張感を持って診療にのぞめた。

ー外科ユニット

・整形外科、軟部組織外科、麻酔科にわかれ、それぞれ1週間ずつローテーションをした。

来院してくる患畜は交通事故や飼い主に長く放置されて腫瘍などが大きくなってしまった動物などが多く人為的な原因で来院してくるケースが多いように感じた。手術は基本的に助手に入らせてもらえるので先生の術式を直に近くでみれたことが良い経験になった。最後の皮膚縫合もやらせてもらえたので最後まで手術に集中できた。

一週間に一度プレゼンテーションの発表があり、タイ人と日本人とでペアを組みその週にきた症例の発表を英語で行った。これによりタイ人と濃密にからむこととなりとても仲良くなった。

日本での手術はあまりよく知らないが、カセサート大学での手術はラジオをかけながら先生を始め学生も和気あいあいしながらだったので少し驚いた。

・私は普段大動物（主に牛や豚）に関して勉強して触れているため、小動物にこんなに長く触れて臨床経験を積むということは今までになかった。

カセサート大学・バンケンキャンパスの獣医寮に関してだが、とにかく病院が広く、施設も充実していたことと、365日24時間対応に驚いた。先生方がとても親切であり診療の途中でも手をとめてくれて英語で説明してくれることがありがたく、学生の教育に対して積極的に取り組んでるイメージが強かった。

タイの学生は幼いころから英語の勉強をしていて、英語がとても堪能である、なので質問があったら積極的に質問していく。私は英語がそれほどうまくないので先生の話しを聞き逃したりしてしまうことがあったりしたのだが、タイの学生がわかりやすい英語にかえてくれたりしてくれてとても助かった。一日の終わりにディスカッションをする科もあり、先生と学生間で症例について話し合いを設ける機会が多かったのが印象に残った。

日本にはなくタイで多い症例といったら狂犬病が挙げられるが、タイでは猫にもワクチン投与をしている。そして、診療中は患畜に噛まれないように注意をはらっていた。

全体をとおして、日本ではできないようなこともやらせてもらい私自身にとって貴重な経験となった。

・大動物 ワイルドライフアニマル クリニカルローテーション



・ワイルドライフユニット

今回タイにきた中で楽しみにしていたユニットでもある。特に象のことに興味があったので初日の象の講義は印象に残った。また、繁殖学的からも牛や豚などと比べて違いがあって面白かった。カンチャナブリ地域の野生保護施設に訪れたときも野生の象、トラの糞を発見したときは興奮した。ただ、象の診療は日程的にできず、心残りとなった。また、アユタヤ地域の Real zoo では爬虫類について勉強した。その他、ウサギや猛禽類についても講義をうけた。

・牛ユニット

一週目はノンポー地域に移動して主に農家さんへの往診についてまわった。タイでは、一戸の牛の数が少なく敷きワラを敷いていない農家さんが多い。搾乳体制や衛生状況の悪い牛舎が多く、乳房炎の牛が多かった、また乳房炎の原因として真菌が分離されたことに驚いた。その他には口蹄疫が発生している農家があり、日本と違って淘汰対象でないのに日本との違いがあった。

先生方が優しく、毎日お昼に連れて行ってもらい美味しいご飯を食べたことが印象に残っている。

二週目からは KPS に戻り牛を使って実習をした。内容は直腸検査や超音波検査、妊娠鑑定、尾椎硬膜外麻酔、傍脊椎ブロック、角神経麻酔、削蹄、人工授精となる。肉牛を使用した際にはすごく暴れるので作業が困難であった。

三週目からは KPS キャンパスにて、最初の二日間を往診、次の二日間を病院にて診療、最後の金曜がプレゼン発表であった。症例はノンポーと似ていて乳房炎や繁殖関係の依頼が多かったように感じた。日本ではあまりみられないが、牛流行熱がタイでは大きな問題となっていて、実際に診療できたことが大きな経験となった。また、実際には診療できなかったが、タイではブルセラ病も重要な疾病となっている。

・馬ユニット

私は今まで馬に触れる機会がなく、今回の留学で初めてと言っていいほどの馬初心者であった。扱いにくく気性が激しいというイメージがあった。二週間を通して馬の世話や診療を行ったが、来院してきた馬にはなかなか検査をさせてもらえなかった。馬における手術は覚醒時に事故が起きやすらしく、覚醒時は慎重になっていた。やはり日本と同様馬はとても高価な動物であるといえる。また実習馬を使って採血や筋肉注射、は行スコアの実習を行った。最後の日の実技テストは採血や年齢の判断をした。

・宿舍

バンケンキャンパスでは、きれいなアパートを用意してもらってそこに宿泊していた。私は三人部屋でダブルベッドが一つに二人が寝てザコ寝する人が一人という感じだった。最初はダブルベッドに二人して寝るのに抵抗があったがすぐ慣れて楽しみながら寝れた。洗面所やお風呂場も清潔で非常に住みやすかった。

KPS キャンパスでは寮に住むことになりバンケンキャンパスと比べるとベッドは一人一つになって寝やすくなったがシャワーが水しかでず寒い思いをした。

・その他

バンケンキャンパスに住んでいる頃は主にバスやタクシーでの移動だったが、道路が非常に混んでいたのを覚えている。都市部にいけば BTS や地下鉄があるので便利だが多少値段が高いのがデメリットとしてあった。逆に KPS キャンパスではタクシーやバスなどがなく移動が大変でよくタイの学生に車をだしてもらっていた。

夜になると蚊の数が昼よりまして、蚊取り線香などを用意して蚊媒介性の感染症に注意した。



内科 リハビリ



内科 神経学検査



野生動物 採血



エキゾチック 傷口の消毒



野生動物 トラの糞



牛 削蹄



牛 人工授精



馬 手術



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	井上 文博 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

三か月にわたる世界展開力強化事業タイ派遣を修了したので活動報告を作成する。今回のプログラムは前半の6週間をバンコクキャンパスにて伴侶動物およびエキゾチックアニマルのクリニカルローテーション、後半の6週間をカンペンセーンキャンパスにて大動物のクリニカルローテーションを行った。今回は、伴侶動物編・大動物編(牛、馬、野生動物)・タイ生活編の三つのパートに分けて報告したいと思う。

①伴侶動物編

全6週間の伴侶動物クリニカルローテーションは、前半の3週を伴侶動物内科臨床、後半の3週間を伴侶動物手術ユニットにて実習を行った。

・9/15～10/4 伴侶動物内科のクリニカルローテーション

伴侶動物内科の診療はカセサート大学バンケンキャンパス獣医学部附属動物病院にて行った。

内科診療ユニットは専門医制度を取り入れており各診療科に分かれて日々の診療をしている。診療科は、心臓循環器科・泌尿器科・画像診断科・神経内科・消化器内科・皮膚科・眼科・エキゾチックアニマル診療科・猫専門外来・トリートメントルーム・OPD ルームなどのように細分化され、犬猫の献血ルームなんかもあったりする。僕たち日本人学生はタイ学生チームに組み込まれ日替わりでこれらの診療科で万遍なく診療を行った。伴侶動物の身体検査を基本とし、投薬、注射、採血、特別な検査(神経学的検査など)を実際に教員の指導下において学生主導で経験させていただくことができた。特にOPD ルームでは、学生のみで飼い主の問診や身体検査、治療計画、そして実際の治療まで、すべての行程を行うことができ自分自身にとってかけがえのない経験となった。飼い主が負担する治療費は、学生が中心となっていく診療であるため普通よりは安くなっているが、それでも学生のためならばと好意的に症例を提供して下さった。飼い主までもが将来の獣医師育成に一役買っている光景を間にあたりにし、感動、そして羨ましい気持ちになったのを今でも覚えている。

また、エキゾチックアニマル診療科においては日本ではなかなか経験できないようなことを沢山行った。蛇、モモンガ、ウサギ、鳥、金魚、カメ、ハムスターなど多彩な種類の生物が登場したエキゾチックアニマル診療は、いつも賑やかで学生が教員に質問しやすい雰囲気があり、すごく勉強になった。日本の大学でエキゾチックアニマルの診療を教えているところはそう多くはないだろう。このプログラムにおいてエキゾチックアニマルの診療を経験できたことは、獣医師という道を歩む自分にとって貴重な経験となるはずである。

三週間の伴侶動物内科診療は、タイに到着した翌々日から始まったこともあり、生活にもまだ慣れておらず、英会話のストレスと日々の診療の疲れが合わさってとても苦労したのを覚えている。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

また、事前に獣医学的専門用語をしっかりと覚えて行っていた方が余裕をもった診療ができたなと今更ながら反省している。



↑ エキゾチックアニマルの診療風景



↑ 最先端放射線治療機。ここは異空間だった！

・ 10/6~10/24 まで伴侶動物手術ユニット

伴侶動物編、後半の三週間は同じくバンケンキャンパスにある付属動物病院 surgery floor にてひたすら手術手技、麻酔技術の練習を行った。ここでは、整形外科部門・軟部組織外科部門・麻酔部門に分かれ、毎日、手術助手に入らせていただき縫合の練習、麻酔薬の選択と投与等をさせていただいた。

ここでも日本では考えられないほど学生が体験・練習できる機会が多く、日本人学生はもちろんタイの学生も自分から技術を積極的に吸収したいという熱意がひしひしと伝わってきていた。

Surgery unit にて一番印象に残っているのが、日本人学生のみで実施した手術実技テストである。このテストは日本人のみ二人組のペアになり、一つの症例を選択して、術前管理から術後のアフターケアまですべてを行う、というものである。自分は東京大学の学生とペアになり毎日夜遅くまで、最適な手術手技の選択や麻酔計画作成のための議論を交わした。当日試験が終わり、症例犬が麻酔から覚醒し、元気に飼い主の元へ帰って行った時のあの感動と充実感は一生涯忘れることができないと思う。



↑ 整形外科手術風景。意外と冗談などが飛び交っている。



↑ 術前の猫。麻酔の効きを確認しつつ、、、



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

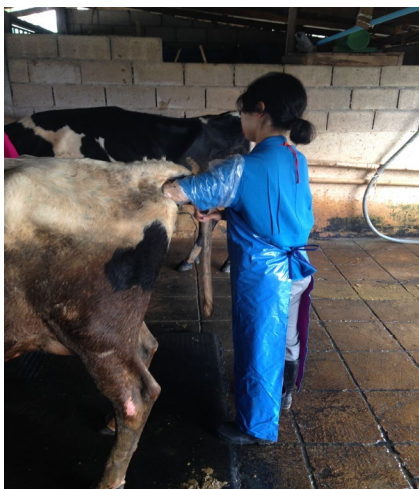
②大動物編

10/25 にカンペンセーンキャンパスに移動。その日の昼 13:00 頃に到着しオリエンテーションに参加する。

10/27~12/5 まで大動物ローテーションを行う。大動物ローテーションは牛ユニット・馬ユニット・野生動物ユニットの三つに分かれる。

自分は最初、牛ユニットからスタートした。牛ユニットは往診、通常の実習(超音波検査や削蹄、大動物の麻酔など)に分かれる。

牛ユニットで最も印象深かったのは熱帯地域に特有の感染症・原虫病の症例を数多く見ることができたことである。タイは口蹄疫の非洗浄国であり、普通に往診先で口蹄疫に罹患した症例に出くわすこともあった。他にバベシア症やトリパノソーマ症などの熱帯地域に特有な症例に触れる機会も多かった。そのような症例に触れていくにつれて感じたことは、「アジア全体を一つに考え感染症の予防を図っていかないといけない」ということである。いくら日本のみ口蹄疫などの発生を防ごうとしても、周りのアジアの国々の防疫に対する考え方、意識が甘いままならば、いつか必ず outbreak が起きてしまう。宮崎県で甚大な被害を出した口蹄疫の発生を二度と起こさないためにも僕たち獣医師が国際感覚を身につけ、グローバルな視点で物事を見る必要性を感じた。



↑ 往診先での診療風景。



↑ バベシア症の子牛。凝固異常がみられて出血が止まらない。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

・野生動物ユニット

野生動物ユニットでは、象に関する講義を受けたり、実際に野生の象や鹿を探すためにジャングルに調査へ行ったり、爬虫類や猛禽類についてみっちり勉強したりとどれも貴重な経験ばかりであった。

その中で最も印象深かったのが、野生の象や鹿を探すためにカンチャナブリのジャングルに調査に行ったことである。テレビの冒険番組に出てきそうな大きいバンの荷台にみんなで乗り込み、ジャングルの奥深くに象の足跡やフンを手掛かりに調査を進めた。結局実際の象の姿は見ることはできなかったが、とても新鮮で印象に残っている。

他にも、タカの採血、爬虫類(ヘビ、カメレオン、トカゲ、カメ)に投薬・注射を経験することができた。



↑ 象のフン発見！食べているものを分析中！



↑ カンチャナブリにある野生動物保護センター。
野生のシカの角や象の写真が沢山！

・馬診療ユニット

最終日までの二週間は馬診療ユニットにて競走馬・ポニー・タイ固有種など様々な種類の馬を診療した。日本では馬の診療と言えば学生は馬に触ることもできず、周りで見ていることしかできないという話を耳にする。しかし、タイはたとえ神経質な競走馬出会っても学生主体で診療をさせてもらえる。馬の身体検査や繁殖検診、蹄のケアなどを実際にさせていただくことができた。これもまた日本ではなかなかできない経験である。

馬ユニットは症例に関するプレゼンテーションと論文の紹介を一週間のうちに準備して発表しなければならなかったためすごく忙しかったが、その分勉強になったし、タイの学生・先生方と積極的にコミュニケーションをとることができたので英語能力もブラッシュアップすることができた。馬診療ユニットを最後に今回のプログラムが終了した。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



↑ 自分達の担当症例と一緒に。ポニーの名前は「フィンチュン」！ 人工肛門形成術のために来院。



↑ タイ固有種の馬。タイの学生と共に身体検査を実施中！



← 競走馬の左前脚関節鏡手術。かつよかった！



← 記念すべきこのプログラムにおいて最後のプレゼンテーション。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

・タイ生活編

このプログラムでタイに滞在している間、週末は現地の文化に少しでも触れようと週末は可能な限り観光地などに出かけた。タイの衣・食・住文化を実際に見て、肌で感じ様々な体験をすることができたと思う。また、観光地には外国人観光客がものすごく多く英語の練習になればと積極的にコミュニケーションを取ろうと試みた。屋台のおばちゃんや土産物屋を闊歩している人々は誰もが優しく声をかけてくれ、困っている僕たち日本人留学生を助けてくれた。感謝したい。

タイの観光地の中で特に深く印象に残っているのが、青空の下で優雅にそびえ立つ巨大な寺院を訪れたことである。タイの国民の9割は仏教を信仰していると聞く。寺院の中で目にするオレンジ色の袈裟を着た人々の笑顔と雰囲気は「微笑みの国・タイ」といわれる所以を物語っていたように感じた。



↑ 大都会バンコクの街並み。道路は常に大渋滞。

↑ ワットプラケオという巨大な寺院。神秘的な雰囲気に圧倒された。↓



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	茨木 美和 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

バンケンキャンパス（9月14日～10月24日）

宿泊：徒歩10分ほどのアパート(新しい)

2人部屋(キングサイズベッド1台)、ベランダあり、Wifi 個人購入(調子良くない)

冷蔵庫あり、外に500ml 1パーツの給水器あり、温水シャワー、管理人さん良い人、

1階に洗濯機あり(1回20パーツ)、BTS モーチット駅までバスで8～13パーツ(渋滞でなければ20分ほど)、通学路にセブン2店、屋台等あり。

外科：事前に決められた、日本人2人、タイ人5人ほどのグループで各科をローテーション。

3週間で1週、17:00～20:00の夜の診療・OPEに参加する。

3週間で1週、土日診療に参加する。

場所：バンケンキャンパス動物病院2階

昼食：タイの子がカフェテリアで注文したものを休憩室に持ってきてくれた。

交通事故の症例が結構多い

・9月15～19日外科(麻酔)

(内容) 軟部・整形の外科手術時の麻酔導入、維持、覚醒の管理とその記録を行う

静脈留置、挿管、鎮静・前投薬投与等もやらせてもらえる

(課題) ①毎日1症例、麻酔記録とその考察を記述したものを金曜17:00までに提出。

②水曜日に症例検討会。グループで1症例について発表。(若齢犬の麻酔)

③1週間で2症例は自分で麻酔プロトコルを立てる。

・9月22～26日外科(整形)

(内容) 各日、決められた先生のOPEで助手として入らせてもらう。

OPEの助手、閉創縫合等をやらせてもらえる

(大腿骨頭切除術、膝蓋骨脱臼、前十字靱帯断裂、骨折整復、ヘミラミネクトミー等、サルやウサギ、鳥の骨折整復等も)

(課題) ①毎日1症例、行った外科手術の方法、考察等を記述したものを金曜17:00までに提出。

②木曜日に症例検討会。グループで1症例について発表。(前十字靱帯断裂の症例)

・9月29日～10月3日外科(軟部)

(内容) 各日、決められた先生のOPEで助手として入らせてもらう。

OPEの助手、閉創縫合等をやらせてもらえる

(子宮卵巣摘出・去勢、外耳道切除、眼摘出、断尾、皮膚Mass切除、膀胱結石除去、腸重積整復、脾臓摘出、副腎摘出、腎臓摘出、開胸術など)

(課題) ①毎日1症例、行った外科手術の方法、考察等を記述したものを金曜17:00までに提出。

②水曜日に症例検討会。グループで1症例について発表。(脾臓摘出の症例)



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

内科：午前午後で決められた診療科に参加

日本人1～2人、タイ人3～4人のグループ

場所：バンケンキャンパス動物病院1・3・4階

昼食：グループごとカフェテリア等で

・10月6～24日内科

（課題）3週間で1症例について、レポートを作成し提出

（内容）基本的に診療補助をする。オーナーさんの話はタイ語なのでタイの子に翻訳して貰ったり、先生が説明して下さるなどで理解。

泌尿器科：腎不全、膀胱炎、膀胱結石等

動物の診断プロセスについて、診療の基本でとても大切な事を教えて頂いた。

当日の症例についてレクチャーしていただき、リンパ腫や輸液療法について特に教わった。血圧計・測定方法も教わった。

神経科：難治性発作、てんかん、肋骨形成異常、水頭症など

感覚異常のグレーディング、発作の分類・治療について特に教わった。

ヘルニアの手術にも助手として参加させてもらった

フェライン：猫についてはすべてこの診療科で行うため件数が多い。

クリプトスポリジウム症や猫エイズの診断、リンパ腫、腎不全など。

輸液量の計算・考え方について教わった。

OPD：学生主体で診療を行う。内容は一次診療。

毛包虫症、膀胱炎、呼吸器・消化器疾患など。抗生剤反応性腸症、教科書の大切さを教わった。

小動物内科の面白さを再認識。

内分泌科：種々の内分泌疾患。糖尿病のインスリン療法について特に教わった。

画像科：各科から送られてきた症例の画像診断。エコー検査の見学・解釈（胎児の生存確認等が多い日だった）、MRIについて（型、腫瘍組織マーカー等）教えて頂いた。

循環器科：内服による疾患コントロールでその再診が多かった。レントゲンチェックが多い。心エコー検査、血圧測定なども。

眼科：白内障、緑内障、網膜剥離、角膜損傷など

エキゾチック：ウサギ・オウム・インコをはじめ、カメ、カメレオン、イノシシ、ヤギ、キツネ、ハリネズミ、スローロリスなどが来院。ウサギの歯科疾患、カメ・スッポンの飲込みフック除去、イノシシの整形疾患、カメレオンの寄生虫症等。ウサギの点眼、採血・輸液、口腔内チェック、消化器の特徴などを特に教わった。ウサギの骨感染による断脚・子宮卵巣の血腫のOPE見学もした。

内視鏡科：主に鼻腔内を診るのに用いた。鼻腔内腫瘍の確認、切除等。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

<10月27日～カンペンセンキャンパス>

事前に決められていた、日本人6人(東大・北大・酪農各2人)とタイ人5人のグループで活動

宿泊：国際寮：2人部屋(シングルベッド2台)、湯船付温水シャワー、冷蔵庫、ロビーに給水機あり
(熱湯も出る)、猫がそこらにいる

・10月27日～11月7日：馬ユニット(場所：学内馬診療施設、実習農場)

日本人3人、タイ人2人の小グループに分かれ、各グループに担当する入院馬が割り当てられた。
そのグループで処置や各発表準備等行った。馬の来院：予約可、当日来院可

(初日)

午前：カンペンセンキャンパス動物病院を先生に案内してもらう

午後：学内実習農場にて馬の扱い方、身体検査の仕方を教わり、実践。

(保定・保定者の場所、TPR、頸静脈採血)

(課題発表日)

2週目 月曜日午後：前週各グループに渡された論文等を読み、それについてパワーポイント発表

金曜日午後：グループの担当症例について、症例検討のパワーポイント発表

(その他の日)

朝：グループで担当している馬の処置、身体検査、散歩

昼間：来院した馬の診療(蹄・四肢の感染性疾患、妊娠鑑定、疝痛、眼科疾患など)

入院馬の処置

OPE：必要があればいつでも(片側潜在精巣の去勢、顎骨折修復、脱腸修復、眼寄生虫除去等)

他、午後に講義があった日が2日ほど。馬の跛行チェック等も教わった。

・11月10～15日：Wildlifeユニット(場所：動物園・カンチャナブリの森・講義棟)

(月曜日) 動物の診療、診断へのプロセスについて講義

(火曜日) アユタヤにある爬虫類中心の動物園へ

午前：小講義、飼育環境の観察

午後：カメの投薬・洗浄、水槽の掃除、ヘビのハンドリング

(水～金曜日) カンチャナブリの森(像の住む森)で活動(親のいない子牛を森に返すプロジェクト)

→自然公園関係者、レンジャーさん等50人規模の大プロジェクト

牛の他、シカも森に返すプロジェクトで大パドックから森へ放した

食事：毎食手作りのとてもおいしい食事をいただいた。

水曜：翌日のプロジェクト実行計画会議に参加、道路確認等準備。

山麓の山小屋泊。布団は準備しており、風呂・トイレは同じ床、風呂は水槽から水をくみ浴びる形式。

木曜：早朝～プロジェクト実行(山麓パドックにいる子牛を山上方のパドックへ移動)

森中(山上方)にキャンプ



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

昼：森に生息する野生の像を遠くから観察、

夜：満天の星空、水飲みに来た野生の像を間近で観察。

金曜：牛の様子見→レンジャーさんたちと最後の朝食→大学へ戻る。

午後：5年生のWildlife授業のプレゼンテーション発表を聞きに行く。

プレゼンの面白さ・レベルの高さ・授業雰囲気の良さを感じる

(土曜日) バンケンキャンパス動物病院エキゾチックユニット診療に参加(8:30~16:30)

(ウサギ・カメ・オウム・インコ・ハリネズミ・スローロリス等)

・11月17~21日：ノンポー動物病院での往診(場所：ノンポー動物病院、連絡のあった農家)

往診：日本人3人、タイ人1~2人の小グループ3つ、

発表：日本人3人、タイ人2~3人の2グループ

宿泊：病院隣の古アパート。2人部屋、水シャワー・トイレ同じ床、2段ベッドでタオルケット・シーツ等は準備してもらえる。一階の共同部屋に電子レンジ・冷蔵庫あり。洗濯機もある。

ノンポー病院：小動物、検査室、大動物(改装工事中)、売店

周辺施設：徒歩ではどこへも移動不可(交通量の多い道路に面しており危険)、3回ほど先生の車でマーケットやスーパーに連れて行っていただき、食料調達。

(日曜日) 移動日(8:00頃大学出発→10:00頃着ノンポー病院)

(月曜日) 午前：乳房炎、乳汁検査について講義

午後：2グループに分かれ、各々、農家で乳汁検査用検体収集

ノンポー地区牛乳収集工場に寄り、外から見学

(火~木曜日) 往診(4~9件/日、乳房炎、ケトosis、繁殖検診等)

午前で回り終わった場合は、診療時間内は依頼が来るまでパワーポイント作り等待機。

(金曜日) 午前：発表準備

午後：プレゼンテーション発表(月曜に収集した検体の検査結果・農家の乳房炎状況の考察)

・11月24~28日：牛ユニット(実習編)(場所：講義棟、学内実習農場、実習農場講義室)

(月曜日) 午前：講義(牛の感染症)

午後：講義(ハードヘルス)

(火曜日) 午前：講義(雌牛繁殖)、直腸検査実習

午後：直検実習続き(手・エコーによる卵巣・子宮・膈等の状態チェック)、人工授精練習

(水曜日) 午前：講義(牛の局所麻酔：方法・薬用量等、採尿方法)

午後：実習(肉牛一人1頭担当)：局所麻酔(硬膜外・傍脊椎・眼のよこ)、

採尿(雌)、頸静脈採血、輸液

(木曜日) 午前：講義(跛行診断、削蹄の方法)

午後：削蹄実習(一人一肢は必ず)



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

・ 12月1～3日：牛ユニット(大学での診療・往診編) (場所：学内牛診療施設、連絡のあった各農家)

日本人1～2人、タイ人1～2人の4グループで活動(大学での診療 or 往診)

(月曜日) 大学での診療(膣脱、尿膜管遺残、除角後感染、包皮感染)

(火曜日) 往診：ルーメンアシドーシス、妊娠鑑定、起立不能等

(先生2人に学生2～3人)

(水曜日) 大学での診療(子牛下痢、バベシア・アナプラズマ感染症、ルーメンアシドーシス)

本日の症例について先生がレクチャーして下さった

(課題) 水曜夕方～症例検討会(各グループで診療した牛についてパワーポイントで発表)

・ 12月4日：牛・馬テスト (場所：講義棟、学内実習場)

午前：牛テスト(ペーパー、口頭)

前日に発表されたグループ(日本人7・8人ほど)ごと、別々の教室で行われた。

各教室先生2人

(ペーパー) 牛の身体検査・血液検査正常値、各疾病で選択すべき抗菌薬の名称を記述

(口頭) ①代謝性疾患、②感染症・血液寄生虫、③乳房炎、④不妊をもたらす疾患(?)

上記のうち、グループで1テーマをくじにて決定

テーマに該当する疾患名を一人ひとつずつ挙げていく

その疾患について挙げた本人に質問される(原因、機序、症状、診断、治療、コントロール等)

午後：馬テスト(実技)

前日に発表された日本人3人グループごと、テーマの書いてあるくじを引く

私の班のテーマ：跛行診断、馬の年齢推測

これをメンバーと協力し、先生の前で行い、回答する。

大動物・小動物のどの先生も素敵で素晴らしい方だった。

動物に対して全力の姿勢が大事だと教えて下さり、高い技術と知識を持ちながら、楽観的で楽しい雰囲気をつくる方々。人として見習いたい方々だった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	城戸 大樹	酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

1) 研修日程

バンコクキャンパス (9/13 - 10/26)

カンペンセーンキャンパス (10/27 - 12/6)

2) 研修内容

バンコク、カンペンセーンキャンパスともに1週間が一つの区切りとなっており、6週間で6つの科目を学んだ。個人個人での授業はなく、全体を通してグループ行動であった。バンコクキャンパスでは大学病院で小動物医療に関わることに、公衆衛生に関わることを学んだ。

・バンコクキャンパス

一週目は、獣医公衆衛生という枠での疫学だった。データの種類や読み方、統計処理のやり方やパソコンを使った統計処理の方法を学んだ。

二週目は、病理学。血液塗抹を見ての血液検査学、細胞学、組織学、病理学、血液検査学なことや、大学病院への依頼があった検死解剖をやらしてもらえた。検死に関しては日本では病理学と一緒にして行われているので、実際自分で作業ができてよかった。

三週目は、一週目と同じく疫学。しかし、先生が変わったことと、ドッグシェルターに行ったことが一週目とは異なっていた。1日かけてドッグシェルターでデータを集め、それを統計処理し発表するというのがこの週のメインのテーマであった。

四週目は、微生物学であった。Problem-base learning というテーマでの授業で、実際のケースを用いてのディスカッションだった。この週に初めてタイ人と合同の授業だった。自分たちの専門用語のボキャブラリーの少なさを実感した。この初めてパワーポイントを用いた発表もあった。タイ人と協力して作り上げたが、かなりタイ人にやってもらっていたと思う。

五週目は、大学病院での小動物の内科のローテーションだった。6～8人程の4つのグループに分かれ様々な診療科を回った。診療科は細分化されとても驚いた。ほとんどのドクターの先生は英語で説明をしてくれてとてもわかりやすかった。簡単な作業学生に任せているのが日本との違いだと思った。自分はエキゾチックに興味があり、エキゾチックに多めに入るようにアレンジしてもらえた。自分のような基礎系出身の学生は臨床系出身の学生とは異なり、発表も試験もなかったのが比較的自由がある実習であった。

六週目は、大学病院での小動物の外科のローテーションだった。内科と同じグループで外科の診療科を回った。診療科がたくさんある内科と異なり外科は3つしか診療科なかった。前日に次の日に付く先生を決め、次来た日にはその先生についていき1日中手術のアシスタントなどを行うことが実習内容であった。ここでも日本と異なり、かなりいろいろなことをやらしてもらえた。試験が手術というのも驚いた。

その他としては、24時間体制でこの大学病院は受け入れを行っているので、希望すれば授業後の診療への参加も可能であった。また、土日はエキゾチックの診療が多いらしく、こちらでも希望すれば診療への参加が可能であった。自分は土日の診療に参加させてもらった。



・カンペンセーンキャンパス

カンペンセーンでの滞在も 6 週間であった。こちらでもバンコクを同じく、一週間単位の授業であった。こちらでは毎週きちんと発表があり、最終週には全体を通しての試験があった。実習内容は cattle が三週間、equine が二週間、wild life が一週間であった。Cattle I は、大学病院に連れてこられるウシの診療であった。ワクチンや検査だけでなくものもあれば手術が必要なものもあったりとたくさんの症例を見ることができた。週の半分で学校に残るグループと学外へ出たの往診に分かれた。

Cattle II は、大学にあるデモンストレーションファームでの実習であった。直腸検査による妊娠鑑定、削蹄、局部麻酔、人工授精、採血、一般所見の取り方などを行った。日本でも同様の実習はあったが、肉牛を用いての実習は初めてであった。

Cattle III は、ノーンポーンというまたカンペンセーンキャンパスとは違うところに一週間滞在しての実習であった。ここはキャンパスではなく大動物専門の診療所であった。診療対象は基本的にはウシで他にもヤギやウマも診ているようであった。実習内容としては毎日ドクターと一緒に往診に出かけドクターのアシスタントとして働くことであった。また、全グループ共通で出された課題は乳房炎であった。タイでも乳房炎は大きな問題となっているようだった。診療が終わると周りには何もなかったので、エキササイズをしたり、みんなですライドを作ったりしていた。

Equine I と Equine II は合同での作業であった。最初に各グループに担当のウマの症例を渡され、その予後観察、日頃の世話を任せられた。また、これと並行して新たにくる症例も順番に割り当てられた。さらに担当の症例の発表と合わせて各グループに論文が渡されその発表があった。

Wild animal は、大学内のゾウの診療所と猛禽類診療所での実習。ウサギについてのレクチャー。さらに学外の Kanchanaburi にある wild animal teaching forest でのゾウ・シカのレクチャー、爬虫類動物園での実習を行った。残念ながら実際にゾウの診療を見ることはできなかったが過去の事例や現在のタイにおけるゾウの問題などの話を聞いた。猛禽では handling や採血、一般所見の取り方などを学んだ。また、ウサギはタイでは最も人気のあるペットであるらしくかなりウサギについての話を聞いた。Teaching forest では kasetsart が人工授精を成功させたシカの話や野生のゾウの繁殖状況について実際に森の中に車で入って行って見学した。爬虫類動物園ではエキゾチックアニマル全般についての handling や生態の特徴などについての実習だった。



3) その他

衣・食・住と留学前の準備について報告します。

・衣

研修期間中のタイでの気温は 30℃を越え、12 月まで泳ぎに行けるほど暖かった。そのため持っていく服は全て夏用のものでよいが、室内の冷房が強いので上に羽織る物も一着あるとよい。私服は安価で現地調達できるので、日本から多くの服を持っていく必要はないと私は感じた。Formal なイベントはほとんどなかったが、先生との食事などのために長ズボン、長袖襟付きのシャツは一着は必要である。制服においては、バンコクでは規制がしっかりしていたので、きちんと制服を着る必要がある。逆にカンペンセーンではそこまで規制が厳しくなく、スクラブでの実習参加も可能。しかし、タイ人はスクラブでの実習参加に注意を受けていたので、制服で受ける方がよい。

・食

タイ料理は基本的に辛い。中華と少し似ており、麺・米・揚げ物など多彩で飽きることがなかった。屋台の食事が安価でかつレストランなどより美味しい。だいたい一食 50bath 程度。しかし、衛生面、安全面においては保証はない。腸内細菌がタイ料理に適応するまで 2 週間程かかるので、それまでは控えておく方がいいかもしれない。気をつける例としては、水、氷、野菜、火を通していないもの、フルーツなど。しかし、これには個人差があり初日から屋台の料理を食べても何も起こらない者もいた。また、バンコクでは学内に学食のようなものがありそこで主に昼食をとっていた。夕食は学外の寮までの間にある屋台やレストラン、コンビニで済ましていた。また、月水金はマーケットが学内で開催されそこでの購入も可能だった。カンペンセーンでは、学内に毎日開いているマーケット、レストラン、コンビニを主に利用した。学外の屋台もたまに利用した。

・住

バンコクでは学校まで徒歩 10 分程度の学外のアパート。オートロックもあり室内もきれいであった。Wifi はオーナーに先払いでパスワードをもらい利用する形式だった。たまに使えなくなることがあったり、部屋によって電波の強さが違うなど完璧なものではなかったが、タイの基準で考えると優秀な方であった。洗濯、クリーニングは有料でアパートの一階ですることができた(一回 20bath)。コンビニの近くにあり、バスに乗ればショッピングモールに行くことができ、電化製品などなんでも買えたので生活面で困ることはほとんどなかった。

カンペンセーンでは、学内の寮で生活していた。現地の学生も住んでいる寮であった。Wifi はロビーでのみ利用可能。学内が広く移動に時間がかかるので 1 人一台自転車を支給された。しかしこの自転車がいまいちいいものではなく、ブレーキが壊れていたり、パンクしていたりとトラブルが絶えなかった。学校の周りでご飯を食べるところで困ることはないが、買い物などをできるところはなかった。車の乗せてもらえれば、クレジットカードが使えるスーパーまでいくことが出来たが、歩いて行ける距離ではなかった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

・留学前の準備

ワクチンは狂犬病、破傷風、A 肝などは打っていった方がよいということだった。総額で 8 万円くらいかかった。狂犬病に関しては確実に打って行くべきだと思った。

学生間で勉強会を 5 回程開催した。タイについてや大学についてタイにおける病気についてなどをテーマとした。勉強会はやってよかったと思う。しかし、このプログラムについての情報を得るのが直前であったので、もしもう少し早く知っていれば現地に行ってから勉強を始めるということにはなかったはずである。勉強会に取り上げればよかったと思うことは、獣医医学専門用語について一通り学んでおくべきであった。実際タイに行ってから、専門用語がわからず話について行けないと言うことが多々あった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	白石 一郎	酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

1) 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

バンコク

9 月 13 日 出国

9 月 15 日～10 月 3 日 カセサート大学内教室

学んだこと 疫学

病理学

公衆衛生学

微生物学

10 月 13 日～10 月 24 日 カセサート大学病院

学んだこと

小動物の診療（内科 外科）

カンペンセン

10 月 27 日～12 月 5 日 大学内

学んだこと 大動物の診療（内科 外科）

12 月 6 日 帰国

2) 実習先で学んだことを大まかに

この留学はタイと日本の学生を交換し獣医学・文化・社会を学習し、体験することによって、‘アジア全体を俯瞰できるグローバルな発想・思考力と英語でのコミュニケーション能力、獣医学の専門家として国際的に通用する知識と技能’ この二つを有する獣医師、獣医学教育者および研究者の養成という目的のもと三か月間タイへ留学しに行きました。

まず前半 6 週間は都会のバンコクキャンパスで学びました。セブンイレブンやスーパーがちかくにあり飲食店も多く、タクシーやバスもたくさんあり非常に住みやすく便利な街でした。

第 1 週目は疫学を学びました。自分でまあまあ英語は大丈夫であろうと思っていたのですが先生の喋っていることがほとんど理解できないくらい英語に苦しみました。友達に聞いたたり辞書を引いたりして理解することに努めました。またてっきり僕はタイの学生と同じカリキュラムに入っていたのですが、そのような学生は一人もおらず顔の見知った酪農学園大学の友達だけでかなり残念でした。そんな中で疫学の基礎と統計学についてみっちり学びました。統計学は NCSS Win Episcopes Pro MESA などこれらのタイで使われている、ソフトを用いて統計処理の仕方を教わりました。

第 2 週目は病理学を学びました。病理学の先生はとても忙しそうで僕たちの授業時間はあまり多くありませんでした。それでも充実した時間でした。タイでは病理学の中に Necropsy という剖検の授業がありました。それは亡くなった犬の解剖の仕方、死んでからどのくらいたつとこの臓器は変化するのかといったようなもので日本では学ぶことができなかった科目なので初めて知ることが多い週でした。また他にも顕微鏡を用いて、Blood parasite の特徴を学んだり、癌細胞の特徴を学んだりしました。



第三週目は公衆衛生を学びました。この週はドッグシェルター実際に行き自分たちでサンプリングをして統計処理をしプレゼンテーションをしました。僕たちの班は犬の脱毛について調査をしました。ドッグシェルターは使わなくなった寺院で捨てられた犬や猫をあずかっているらしく、かなり多くの犬猫がいて驚きました。噛まれることに恐れながら調査をしました。



これがドッグシェルターの写真です。このような感じで犬がうろうろしていました。英語でのプレゼンテーションも先生たちの質問に応答しなんとか終わることができました。

第4週目は微生物学でした。なんとこの週からタイの学生と同じカリキュラムにはいることができ、教室にはたくさんのタイ人がいました。正直僕の一番のこの留学の目的はタイの学生とたくさん交流することだったのですごく嬉しかったです。微生物学はいちからみっちり微生物を学ぶのではなく、もうすでに微生物の知識はすべて頭に入っている前提であるケースについて紙が配られどんな検査をしたらよいのか考え、原因菌を特定し最後にプレゼンテーションをするものでした。タイの学生はわからないことがあればすぐ教えてくれて、楽しく学ぶことができました。



これが微生物学のクラスの写真で最後のプレゼンが終わった後にとったものです。

第5週目はクリニカルローテーションに入り小動物の外科でした。幸か不幸かこの週は卒業シーズンでタイ人がおらず、外科手術のアシスタントにほぼはいることができました。先生たちは音楽を流しながらスピーディに手術をしていました。僕たちは皮膚縫合、小さい腫瘍の切除などやらせてもらえました。この時期の6年生のタイの学生は試験をパスして獣医師であるらしく、僕たちにもタイの学生と同じように獣医教育を受けさせてもらえました。またこの週のプレゼンテーションは僕たちはなく、レポートもなく有意義な放課後を送ることができました。また外科の先生たちは僕たちにとても積極的に接してくれ、金曜日の夜にはクラブに連れて行ってくれました。そこでお酒を飲んで、踊って、楽しい時間を過ごしました。

第6週目は小動物の内科でした。この週も卒業シーズンでタイの学生がおらず外科と違って大変でした。外科の先生たちの方が英語がわかりやすかったです。それにほぼ立っているだけであったのでタイの学生にいてほしかったです。結構自由な感じで1週間自分の行きたい科に参加することができました。僕は泌尿器科、エキゾチック、消化器科、神経科、を1週間見学しました。どの科の先生もとても優しく面倒見はとてもよかったです。

バンコクでの6週間はここまで後半6週間はカンペンセンというバンコクから2時間くらい離れたとても田舎なところで学びました。ここでのキャンパスはとても大きく、一人一台自転車を貸してもらい自転車で移動をしました。セブンイレブンや飲食をするお店なども近くにはなく、平日はお金を節約して生活することができました。休日はバンコクなどにあそびに行くことが多かったです。カンペンセンでは主に大動物の診療について



学びました。

第1週目はいきなりカンペンセンからさらに2時間くらいはなれたノンポンというところで1週間泊まり込みで牛の往診に連れてもらいました。また金曜日のプレゼンテーションではある農家の牛の乳房炎について CMT 変法の結果、細菌培養した結果、農家の改善点を発表しました。主に往診でした、依頼のない時はお昼くらいに終わり、夜ごはんは毎回先生の車でマーケットに連れて行ってくれました。ノンポンの先生は若い方が多く、とても親しみやすかったです。夜は一緒にエクササイズをしました。

第2週目は WILD LIFE ユニットでゾウの診療 爬虫類の診療 ワシ、タカ、ハヤブサの診療 ウサギの診療などについて学びました。実際に診療したわけではないのですが、診療の仕方について学びました。像の診療について学んだ後、野生の像を見に行こうということでカンチャナブリの森に像を見に行きました。が運の悪いことに野生の像を見ることはできず代わりに像のうんこだけ見れました、個人的にはそのうんこの中にいた糞ころがしを見れたことに感動しました。また爬虫類動物園に行き、すべての爬虫類をケージからだして体重を測定し、抗生物質を投与しました。

第3週目は大学病院での診療と往診でした。牛やヤギが多かったです、タイ人は牛やヤギなど家畜ではなくペットで飼っているひともいるということに驚きでした。水曜日にケースの discussion 金曜日にはまた別のケースのプレゼンテーションもあり大変でした。



この写真は discussion をしているところです。自分たちの選んだ症例について先生たちと一緒に話し合いました。



第4週目は一人に牛1頭与えられて、尾椎硬膜外麻酔、近位傍脊椎ブロック、眼窩上神経麻酔、採血(尾静脈、頸静脈)静脈注射、輸液、採尿、経口投与、直腸検査、人工授精、削蹄を一とおり練習させてもらえました。扱った牛は肉牛でとてもアグレッシブでした。自分ができるようになったことが多い週でした。

第5週、6週はウマのユニットでした。身体検査や蹄検査などをさせてもらいました。そしてグループごとに症例が与えられてプレゼンしました。僕たちの症例は靱帯の切れたポニーでとてもかわいかったです。比較的ゆっくり過ごせました。

3 そのほか生活の面で報告すべきことがあれば

生の食べ物、生水、は気をつけてください。僕は第一週目に発熱と下痢で病院へ行きました。タクシーはわざと遠回りする人もいます。カンペンセンにはたくさん蚊がいます、虫よけスプレーは必須です。外は暑くても室内はかなりクーラーでかなり寒いので上着を持って行きましょう。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	杉村 侑里奈	酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ~ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	
9・15-10・24 バンケンキャンパス附属小動物病院		
9・15-19		
Anesthesia unit で小動物の麻酔管理を学び、 麻酔プロトコルを自分で作成し、その通りに麻酔を行った。 麻酔器の使い方、薬の選び方などを Dr に説明してもらった。 日本と異なり鎮痛管理があまり充実してないように見え、 覚醒があまりよくない症例が多くいた。		
9・22-26		
Orthopedic unit		
手術の助手として保定や器具出しなどを行い、皮下縫合、皮膚縫合を行った。 脛骨骨折、大腿骨頭切除の症例が多かった。 犬種としては小型犬が多いように感じた。		
9・29-10・3		
Soft tissue unit		
手術の助手として保定や器具出しなどを行い、皮下縫合、皮膚縫合を行った。 さらに castration、OVH と enucleation も自分で行った。 乳腺腫瘍の症例が多く、タイでは避妊する飼い主があまり多くないのが 原因だと考えられた。		
10・6-10・24		
日替わりにいろいろな診療科を回った。 皮膚科、猫専門、消化器科、内分泌科、泌尿器科、画像科、内科など 主にタイの学生が問診を行い、身体検査を日本人が行った。 画像科では放射線治療も見学でき、メガボルテージを使っていて医療水準の高さを実感した。		

外科 unit



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

外科 unit

1group: タイの学生 4 人 + 日本人 2 人

プレゼングループごとに 1case 選ぶ

(水) Anesthesia, Orthopedic unit

(木) Soft tissue, ER unit

Exam: タイの学生とペアで担当の先生の症例を
問診、麻酔、手術、術後管理などすべて行う。

内科 unit

1group: タイの学生 3、4 人 + 日本人 2 人

プレゼンはタイの学生のみで日本人は聞いているだけ

Report: 自分で症例を一つ選んで最後の週
に提出する



カメの麻酔

膀胱結石摘出のオペレーションが行われた。

エキゾチックの診療も多く、日本では見られない動物もいた。



Exotic unit の診療

ウサギが主でほかにもモルモットやモモンガ、カメ、ヤギ、インコなどが診察に来ていた。

問診、身体検査を行う。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

10. 27-12・6 カンペンセンキャンパス

1group タイの学生5人+日本人6人で6週間同じグループ。

10. 27-31

ノンポーにあるカセサート大学病院で牛の往診に同行した。

多いときでは一日4-6ケース回り、身体検査、注射、直腸検査などを行わせてもらった。

金曜日に乳房炎のプレゼンテーションがあった。

日本の乳牛よりも体格が小さく、泌乳量も少なかった。また、SCSにより乳価格が変動するので酪農家にとって大きな問題となっており、群管理が重要ということを実感した。

11. 3-7 Wild animal unit



象についての簡単な講義や kanchanaburi の森に行きシカの放牧などを行った。

猛禽類の講義では採血をすることができた。カセサート大学ではオオワシの保護、放鳥に成功していてたくさんの募金を募ることができたと聞いた。

ほかにも爬虫類館で実際にケージのそうじを行ったり、ウサギなどについても学んだ。

11. 10-14 bovine unit

2-3人ずつの4グループに別れてカンペンセンキャンパス内の大動物病院にて来院した牛、ヤギなどの問診、身体検査、投薬などを行った。

また往診に1週間のうち2日間行くことができ、ダウナーカウや口蹄疫などの牛の診察に立ち会えた。タイでは口蹄疫は輸出港に近い一部の地域でのみ清浄化されており、その他の地域では発症が続いていた。

水曜日にグループにつき1症例ずつ口頭による症例検討会、金曜日にプレゼンテーションの発表が行われた。夜の12時すぎまで大学に残ってタイの学生と作成した。





11. 17-21 bovine unit

Demonstration farmにて直腸検査、AI、麻酔、削蹄を実際に行うことができた。
一人につき一頭ずつ牛が与えられるのですべて一人で行わなければならなかったが、
Drが2-3人おり、いつでも質問しやすい体制だった。
直腸検査にて卵巣のステージを確認できるようになった。

11. 24-12. 3 horse unit

世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



1 グループにつき 1 症例担当が決められて、その症例についてプレゼンテーションを行う。

また論文も与えられるのでそれについてもプレゼンを行う。

毎朝、自分たちの症例の身体検査と投薬を行い、終わったら来院した馬の問診と身体検査を行う。

症例がなく、あいている時間は論文やプレゼンの準備をする。

その間にもオペがあったら見学することができた。

12.4 examination

午前 bovine exam

6人グループで一人ずつ疾患を選びDrの質問に答える。+簡単な筆記試験

午後 horse exam

3人1組で馬が一頭与えられて診断する。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	松倉 大樹 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学
(1) 日付、実習先、施設名	
2014. 9. 13	バンコクへ到着
・バンケンキャンパス	
2014. 9. 15-2014. 10. 3	カセサート大学附属動物病院(バンケン)にて小動物内科実習(3 週間)
2014. 10. 6-2014. 10. 24	カセサート大学附属動物病院(バンケン)にて小動物外科実習(3 週間)
	軟部外科、麻酔科、整形外科の順に 1 週間ごと実習
	このうち、10. 13-10. 17 は夜間診療(17:30-20:00)、10. 18-10. 19 は休日診療(8:30-16:30)に参加
2014. 10. 25	カンペンセンへ移動
・カンペンセンキャンパス	
2014. 10. 27-2014. 11. 7	Horse I、Horse II
	カセサート大学附属動物病院(カンペンセン)にて馬の臨床実習(2 週間)
2014. 11. 10-2014. 11. 15	Wild Life
11. 10	カンペンセンキャンパス内の図書館で Exotic Pet の診療に関する講義
11. 11	アユタヤにある爬虫類館(Real Zoo)を見学
11. 12-11. 14	カンチャナブリー県の野生動物保護区へ行き、野生の牛を保護区から森へ返すプログラムに参加(2 泊 3 日)
11. 15(土曜日)	バンケンキャンパスへ行き、カセサート大学附属動物病院にてエキゾチック科の診療を見学
2014. 11. 16(日曜日)	Cattle III カセサート大学附属動物病院(ノンポー)へ移動
2014. 11. 17-2014. 11. 21	牛の往診に随行 21 日にカンペンセンへ戻る
2014. 11. 24-2014. 11. 28	Cattle II
	カンペンセンキャンパス内の附属農場で牛を使って実習 (直腸検査、人工授精、削蹄、採血、麻酔等)
2014. 12. 1-2014. 12. 3	Cattle I
	カセサート大学附属動物病院(カンペンセン)で、牛の臨床実習、往診随行
2014. 12. 4	午前：牛の疾病に関する口頭試問 午後：馬への投薬、跛行検査等の実技試験
2014. 12. 5	国王誕生日 キャンパス内フェスティバルに参加
2014. 12. 6	空港へ移動
2014. 12. 7	帰国



(2) 実習で学んだこと

・小動物

私は、生産動物医療教育群の研究室に所属しているので、小動物臨床の実習ができる機会は少ない。従って、今回の研修で6週間、小動物の実習が組み込まれていたのは、非常に魅力的だった。

カセサート大学附属動物病院についての説明を受けた時に驚いたのは、附属病院が3つもあり(4つ目も建設中)、全ての病院が365日24時間対応だということである。バンケンキャンパスでは、1次診療と2次診療を両方やっていて、まるで人の総合病院のようである。1次診療の中でも、学生が主に治療できる代わりに、費用が安く、時間もかかるというエリアがあり、学生が症例に触れられる機会を設けている。カセサート大学では、学生が関わる症例は全症例のごく一部である。その症例に関しては、先生も学生と議論しながらじっくりと診療を進め、学生が関わらない症例は、短時間の診療で一気に数をこなす。教育と病院の利益の両面をもちながら、しっかり区別されていると感じた。また、飼い主は診察室に入り、保定を行うなど診療には積極的に参加する。飼い主の獣医学生に対する信用が厚く、学生が飼い主の前で注射するなどということは普通に行われていた。診療を行う先生と授業を行う先生が完全に分かれているのも日本と違う点である。手術の準備においても、毛を刈る人、麻酔からのRecoveryを見守る人、手術室の掃除をする人のように、専門知識を必要としない仕事をするのは、獣医師でも、看護師でも、学生でもない。先生は診療に、学生は助手に、看護師は麻酔や消毒に専念できる環境だと感じた。そして、いわゆる雑用をこなす人の雇用が生まれているとも言えると思う。獣医師の診療を見て感じたのは、基本に忠実だということである。採血や手術方法を見ても、若い先生、ベテランの先生のやり方で違う所が無いと感じた。あまり先生の好き嫌いが無く、教科書通りの診療をしているというのが伝わってきた。

日本の大学病院では主に2次診療で、利益よりも教育という側面が強く、全ての症例に学生が関わり、それ以上の症例を受け入れても教育機関の病院としては意味が無いという考えがあると思うが、そうはいつでも、カセサート大学の方が教育を受ける環境としては恵まれていると感じた。

次に、症例について述べる。日本では、講義でしか勉強できなかった疾病を実際に見ることができて良かったと思う。外で飼われている犬猫が多いタイならではのと感じたのは、ハトの糞からネコに感染するクリプトコックス症や犬猫の皮膚に寄生する外部寄生虫疾患が多かったことである。車やバイクの交通量が多く、運転も荒いことから、路上で生活する野良犬猫が運ばれてくることも多かった。

次に、実習内容について述べる。私たちは、タイ学生(6年生)のクリニカルローテーションに混ざる形で実習を行った。内科、外科共に日本人は2人、タイ人は3人という構成だった。内科では、獣医師と飼い主がタイ語で会話するので、学生はその内容を全て英語に翻訳して教えてくれた。6年生の学生は、5年次に国家試験を終えており、授業も英語で受けているので、よく勉強しているなという印象を受けた。外科では、整形外科、軟部外科、麻酔科に分かれた。整形外科、軟部外科では、日本の学生も1人で助手に入り、先生と1対1で教えてもらうことができた。さらに、皮膚縫合や去勢などを実際にやらせてもらうこともでき、非常に貴重な経験となった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

・大動物(馬)

馬は、タイでも日本と同じように非常に高価な動物で、あまり触ることはできなかった。飼育目的は主に競馬で、その他乗馬やペットがあるが、showに使う馬が多く運ばれてくることには驚いた。また、国王の孫娘が持つ馬術用の馬がごく軽度の皮膚炎で来院し、先生が総出で診察していたのも印象に残っている。タイでは、馬伝染性貧血や馬のトリパノソーマ病など危険な伝染病が発生しており、大学病院にもトリパノソーマ病の馬が来院した。病院では、そのような馬が来た場合、安楽死にすることが多いが、治療という選択肢をとる場合でもすぐに農家へ返し、入院はさせないという対応をとっていた。タイと日本の違いでいうと、日本では馬の繁殖季節は春だけに限られ、その時期にいかに種をつけるかを必死に考えているが、タイでの馬の繁殖季節は4月-10月頃と長く、そんなに繁殖季節を意識して種付けをしないという話を聞いた。馬の麻酔、覚醒に関する設備は酪農学園大学附属動物病院と同様に整っていて、2週間で5-6件の手術を見学できた。去勢、骨折整復、急性腹症などの症例である。日々の診療では、妊娠鑑定や蹄病治療が多く、入院馬の傷の消毒は診療時間の大部分を占めていた。入院馬に関しては、身体検査や消毒等、ある程度は触らせてもらえた。

・大動物(牛)

牛は日頃から日本でも接していて、今回の研修では最も興味のある分野である。牛ユニットでは、大学病院だけでなく、往診に随行できた。しかも、牛の病院があるカンペンセン地域及びノンポー地域はタイでも有数の酪農地帯で、その地域の農家を見ることができて良かったと思う。

タイの酪農家は、1戸当たり20-30頭飼養の小規模農家で、フリーストール牛舎はほとんどなく、大多数が繋ぎ飼い牛舎である。暑い気候に合わせて、牛舎の壁がなく、風通しの良い構造になっている。敷きわらもなく、除糞が不十分な農家が多く、蹄病や乳房炎が大きな問題となっていた。餌はパンゴラという牧草とキャッサバがメインの濃厚飼料を給与している農家が多かった。サイレージやTMRを給与している農家はほとんどないと聞いた。パンゴラは、タイの気候に適しており、農家は毎日刈り取り、そのまま給与しているようだ。タイは暑いので、水分含量の多い飼料を牛は好む。ただ、雨期には人が牧草地に入らず、栄養価の低い稲わらを給与することになってしまう。タイでは、飼料給与が気候に左右されやすく、安定して十分な量の飼料を給与することが難しく、それが課題となっている。また、タイの酪農家にバルククーラーは無く、搾乳の度にタンクを車やバイクでそれぞれの農家が農協のような所運んでいた。遠い農家は、長時間牛乳を高温にさらすことになるため、乳質への影響が懸念されるとのことだった。

獣医師の知識や技術レベル、病院の設備等は、日本と同じくらい高いと感じたが、農家が病気を予防しようとする意識、牛に対する関心が日本に比べて非常に低いと感じた。獣医師が飼い主に、「この餌をもうあげないでください」と言っても、あげ続けて再診をしたり、「人工授精をいつしたか忘れたので、妊娠鑑定してください」と言ってきたりという現場を見た。例えば獣医師は、伝染病の予防には靴の消毒が必要という知識を持っていても、農家の入口に踏み込み消毒槽がある農家は1戸も見なかった。獣医師の知識が生かされていないと感じた。私は見なかったが、口蹄疫の牛を見た班の学生



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

もあり、発生は相次いでいる。口蹄疫の牛を見つけたら周辺農場の牛に移動制限はかかるが、殺処分という法律も無いようだ。ブルセラ病や牛流行熱といった日本でなかなか発生しない伝染病を実際に見ることができたのはいい経験になった。ブルセラ病は、摘発淘汰の措置がとられている。

次に、大学農場について述べる。大学農場の乳牛エリアは、フリーストールで、ミルキングパーラーがある。平均乳量は 15kg/day (タイ平均は 12kg/day) で、搾乳牛は約 40 頭。蹄病が多いと聞いたが、パーラーへの通路が階段で、待機場やストールは全面コンクリートむき出しだったので、蹄病が多いのには頷けた。蹄病や乳房炎の発生数は、季節変動が大きく、牛舎内の湿度が上がる雨期に急増するようだ。第 4 胃変位の発生は、日本ほど問題になっていないようだ。肉牛エリアには、タイでは有名なカンペンセン牛が飼育されており、麻酔の実習で使ったが、非常に攻撃的で危険だった。

・野生動物

ワイルドライフユニットでは、カンチャナブリー県の野生動物保護施設へ 2 泊 3 日で行き、野生の牛(バンテン)4 頭を保護施設から森へ返すプログラムに参加したことが印象に残っている。この森には、ゾウ、トラ、シカなど様々な野生動物が生息しているが、森林伐採などの影響で生態系が乱れつつある。ウシの数が減れば、トラの数が減る、生態系を維持するためにこのプログラムは行われるという。麻酔銃で眠らせ、1 頭ずつ大きな箱に入れ、起伏の激しい山道を大型トラックで森の奥まで運びあげる一大イベントだった。ゾウやトラが出るかも知れないという危険も伴うこのプログラムには、地元の人、保護施設の職員、ハンターなど森を知り尽くした人々(約 100 人程度)が参加し、獣医師であるカセサート大学の Dr. Nikon はこのプログラムのリーダーで、全体の指揮をとっていた。その姿を見て、獣医師の存在意義の大きさを実感した。夜は森でキャンプをしたが、その時、野生のゾウを 5m 位の距離で見ることができ、貴重な経験となった。ゾウは、非常に危険な動物で、地元の人でも恐れていて、日本で言うと、ヒグマに遭遇するようなものだと思う。でも、皆で声を潜めて喜んだあの瞬間は忘れられない。

・全体

全体を振り返ると、プレゼンテーションがどのユニットでも課されていたため、英語での発表に抵抗がなくなったのが大きな成果だと思う。また、プレゼンテーションをするにあたって、小グループに分かれたので、タイ人との交流を深めることもできたし、症例について知識を深めることもできた。先生は、どのユニットも親切かつ社交的な人が多く、気軽に質問できて良かったと思う。タイ人学生も、これを失敗したらどうしようとか、こんなことを質問したら怒られるとか考えずに実習できていたので羨ましいと思った。小動物の手術中も音楽を流しながら明るい雰囲気です手術をしていたのには驚いた。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

(3) 生活面

・トイレ、風呂事情

タイのトイレは洋式トイレも増えてきているようだが、中にはタイの伝統的なトイレもある。水は桶を使って流さねばならないし、トイレトペーパーはゴミ箱に捨てねばならない。風呂は、ノンポーに行った時は、水しか出ないシャワーだった。カンチャナブリーで泊った時は、浴室には、便器と水の入った水槽が2つあり、1つはトイレを流す用、1つは体を流す用だった。これにはみんな驚きを隠せなかった。

・食事面

タイの水道水は飲まない方がいいと言われており、コンビニで飲料水を買っていた。また、タイでは自炊する習慣があまりない。朝は、コンビニのパンとヨーグルトなど、昼は、大学内のカフェテリア、夜は屋台で買っていた。セブンイレブンは学内、通学路にあるので便利だった。フルーツや生野菜、生卵は食当たりになるので、最初は食べない方がいいと思った。整腸剤は、到着後しばらくは飲んだ方がいい。屋台は、最初何を売っている店が分からなくて、全く売ってない物を注文してしまったこともあるが、しだいに分かるようになった。ご飯を注文する時はタイ語で言わないとなかなか通じない。私は辛い物が苦手だったので、辛くない物をたのむようにしていた。

・交通事情

バスは、本数も豊富で、安いので便利だが、行き先の番号を覚えないと使いづらい。タクシーは複数人で乗ると値段もそれほど高くないし、速いので便利。バンコク中心部は、BTSや地下鉄は快適。タイ国鉄は、遅く汚いので便利な乗り物ではない。トゥクトゥクやソンテオは、値段交渉が大事で、ぼったくられないように注意すべきだと感じた。横断歩道を渡る時も車はなかなか止まってくれないので、渡る合図をして強気で渡らないといつまでも渡れない。以上はバンコクの話で、カンペンセンに移動すると、バスやタクシー、電車は全くない。どこかへ行く時は、ヴァンに乗ってバンコクまで出てから活動することになる。

・気候、服装

私達が着いた9月、10月は雨期で11月、12月は乾期だった。最高気温は常に30℃以上、最低気温は12月になると20℃くらいで少し涼しく感じた。そうは言っても、常に半袖、半ズボンで生活できる。デング熱等は心配だが、長袖にする程ではない。虫よけスプレーは必須。雨期のイメージは、1日中雨が降っているというイメージだったが、夜中に一気に降るという感じだったので、そんなに濡れることは無かった。乾期になると、雨は全く降らなかった。

以上、全てが良い経験となり、本当に行って良かったと思っている。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



左：カセサート大学附属動物病院（バンケンキャンパス）の外観、中：待合室、右：手術室



カンチャナブリー県にある国立公園で行われた野生の牛を保護区から森へ返すプログラム

左：牛を捕獲し、採血している様子 中、右：牛をボックスに入れ、トラックに積み込む様子



左：トリパノソーマ病の馬



右：牛の往診の拠点となる附属動物病院（ノンポー）



左：往診先の酪農家



右：附属農場の搾乳場（カンペンセンキャンパス）



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	小林洋平 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

1. 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

9 月 13 日に日本を出発し、タイ、バンコクにあるカセサート大学バンケンキャンパスにて初めての 6 週間基礎科目と小動物に関する実習を行った。

10 月 25 日にバンケンキャンパスからカンペンセーンキャンパスに移動し、6 週間大動物に関する実習を行った。この 6 週間のうち 1 週間はノンポンキャンパスでの実習も行われた。

2. 実習先で学んだことを大まかに

今回の実習では大きく分けて学習面と生活面の 2 つに対して多くを学ぶことができた。学習という面では獣医師として学ぶことができた。初めの 6 週間は基礎教科として公衆衛生学や病理学、微生物学を学び、また小動物内科学や外科学の実習を行った。

公衆衛生学の授業では主に疫学を勉強し、サンプル採材時における計算から実際のデータの計算の仕方まで学んだ。実際に Dog Shelter に行ったのは良い体験であり、Dog Shelter の問題を考える際には文化や宗教的な面でのアプローチが必要であると感じた。病理学の授業では実際に血液塗抹や細胞の塗抹を見て診断を行うというものをやった。少人数であったため、先生とのコミュニケーションも取りやすく、非常に勉強になった。

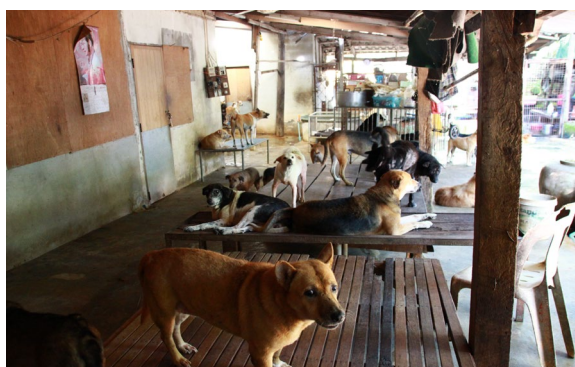


Fig 1,2 Dog Shelter にて、病理学の先生と生徒



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

微生物学の授業ではタイ人も一緒に、授業を受けた。授業の内容はケースシートが渡され、それをもとに類症鑑別を行っていくというものであった。またその進行の度合いによって、シートが増えていき、その後実際にPCRなどを行って診断、プレゼンテーションを行った。タイ人と勉強するのは初めてであったが、非常に優しく接してくれ、また一緒にディスカッションを行ったりすることは非常に勉強になった。



Fig3,4 DNA 抽出を行っている様子 微生物学の先生と生徒

小動物の内科学、外科学では実際に診療に携わることができ、日頃は研究室にいる自分にとっては良い体験であった。特にエキゾチックアニマルの診療は日本の大学では行っておらず、将来動物病院の志望ではない自分にとっては非常にいい経験になった。先生方も非常に優しく接してくれたため、とても勉強になった。



Fig5,6 コモンマーモセットの身体検査、カメの脱腸のトリートメント



後半の6週間はカンペンセーンキャンパスとノンポンキャンパスにて実習を行った。初めの1週目はノンポンキャンパスにて牛の実習を行った。ノンポンキャンパスでは1日目に採材、2日目以降は往診、金曜日にプレゼンテーションであった。初めの週にノンポンキャンパスという離れた場所で1週間過ごせたことで、タイ人と将来のことについて話せたりできて良かった。実際の往診でもタイの大動物獣医療のアプローチのしかたを目の前で見て、また実際に直腸検査などの診断や抗生剤投与などの治療にも参加でき非常に勉強になった。プレゼンテーションにおいても、日本とは大きく異なる部分があり、今後の自分に生かせると思う。



Fig 7, 8 往診先での診断、治療の様子

2週目には野生動物の授業を受けた。実際に野生動物の治療などはどのように行うのか知らなかったが、治療だけでなくそれらの動物がどのような環境で生きているのかをいべきということを言われ、獣医師としてもっと動物のことを知らなければならないと感じた。爬虫類や猛禽類のハンドリングなど初めて行うことばかりでとても面白かった。



Fig 10, 11 爬虫類のハンドリング、猛禽類のハンドリング



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

3週目、4週目にはカンペンセーンキャンパスでの牛の実習を行った。病院での実習ではノンポーンキャンパスと同様にタイにおける大動物獣医療のアプローチを学び、また手術を見ることもできた。症例におけるディスカッションでは先生も入って行われ、その症例に関しての知識を蓄積することができた。また付属農場での実習では妊娠鑑定や麻酔、削蹄などを実際に自分が満足するまで行えたことが非常に良かった。プレゼンテーションでは自分で問題点を探して改善策を考えることが難しかったが、タイ人と協力したことでプレゼンテーションを行うことができた。



Fig 11, 12 麻酔実習、食欲不振牛に対する治療の様子

5週目、6週目には馬の実習を行った。馬の実習では自分の症例に対して、毎日身体検査を行い、また病院に来ている馬に関してのアプローチを学んだ。プレゼンテーションでは症例に関するものと論文を発表するものの2つがあり、なかなか大変であったが、タイ人の助けもありながら無事終えることができた。

最終日には試験があり、午前中は牛に関する口頭試問、午後は馬に関する実技試験であった。最後の試験は日本人で協力して乗り越えることができた。

このように学習面では獣医学に関する知識を臨床とそれをアプローチする基礎科目として学ぶことができた。

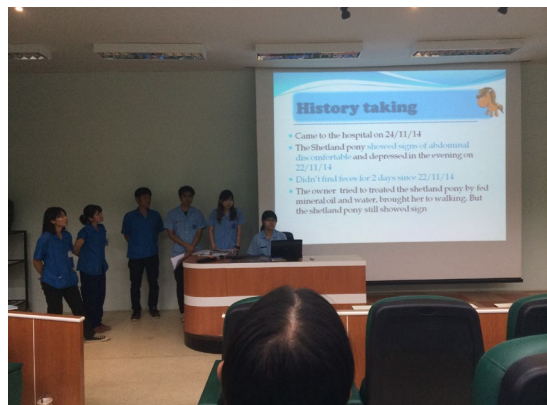


Fig 13, 14 馬の蹄検査の様子、プレゼンテーションの様子



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

生活面として学ぶことができたのはやはり 3 ヶ月という期間で海外に滞在したということである。タイでは母国語がタイ語であり言語という面でまったく通じない場所もあったが、衣食住や交通機関において難なく生活することができた。これはタイ人の気質が非常に良かったからと言えるが、自分にとってはとてもいい経験になった。

またカセサート大学の学生には非常に仲良くしてもらい、様々な風習や文化、宗教についても学ぶことができた。ある休日ではタイ人の学生とともに水上マーケットにいき、実際のタイ寺院の回り方などについて教えてもらい、宗教などの信仰についての話もしてもらった。自分は無信仰であり、日本ではなかなか話をしない内容であったため非常に勉強になった。他にも日本にいて当たり前のことが当たり前でなかったり、まったく知らないことが多くあり、自分の視野を広げることに繋がったと思う。

これらもすべてタイの学生の協力があってこそのものであった。なにも知らなかった自分たちに対してまったくいやな顔をせず、たくさんの面倒をみてもらった。このつながりは一生のものであり、これからも大切にしていきたいと思う。またこのプログラムを共にした日本人学生も同様に、これからも付き合っていきたいと思う。



Fig 15, 16 フェアウェルパーティーでの写真



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

3) そのほか生活の面で報告すべきことがあれば

バンコクでの生活は非常に暮らしやすかった。しかしドミトリーのベッドがダブルベッドであったことが問題として挙げられる。日本から行って間もないころに体調を崩す学生が何人か見られた。このときダブルベッドの場合病人とダブルベッドの相方の両方が非常に気を使う必要があった。これに関しては来年度に変更される必要があると思う。また体調を崩したときの対策に関しては初め確認していく必要があったと考えられる。カンペンセーンでは自転車、Wifi に関して問題があった。カンペンセーンキャンパスは非常に広く、自転車が重要であった。しかし自転車のペダルが取れたり、パンクによって自転車の変更が 4 回あり、非常に煩わしかった。Wifi はドミトリーの一部で入るが非常に微弱であり、プレゼンテーションの作成時などは非常に不便であった。ドミトリー自体の電波を強くするまたは各自でルーターを持ってくる必要があったと思う。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	昆 道葉 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 14 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

BKK（9月15日～10月24日）

第1週目-Veterinary Public Health I

初日の朝は全体集まって各グループの説明であったが、実際は surgery、medicine の説明のみで VPH については触れられずしばらく待機だった。タイ学生も付かず、かなり心細かった。

授業は主に午前は講義、午後は PC ルームで実習だった。t-test、one-way ANOVA、Chi-square、Quantitative data、Qualitative data、など。実習では Win Episcope2.0 と NCSS の使い方を学んだ。問題集のような形（E-participant）で課題が出ており、金曜は学生で分担して回答をプレゼンテーションし、先生に解説をしてもらった。問題は疫学・感染症・防疫などについてで、難易度は様々だった。

第2週目-Pathology

前半は病原体について、血液標本についてなど講義を受けたあと各自で切片を観察し、午後はその切片について説明を受けた。全員分ではなかったが、先生と同じ切片を複数の学生が見ることができる顕微鏡があり、かなりわかりやすく説明を受けることができた。専門用語が日本人学生全員ほとんどわからず、先生も大変そうだった。最低限の専門用語を覚えていく必要があったと強く感じた。Wi-fi 環境はあまり良くないため、ネットで調べるのにも限界があった。電子辞書は有用だったが、医学事典の入ったものがより必要だった。Necropsy 実習では一検体につき 2-3 学生で検死の手順を学んだ。また先生が動物病院で犬の oncology clinic も担当していたため、任意と言われたが全員半日見学に行った。診療中はタイ語だが合間合間で英語説明してもらえた。後半は先生が代わり、血液検査・組織診・細胞診、検死の考え方について学んだ。講義を受け、実際の検体解剖を見学し、実際に検死を依頼した執刀医の話も直接聞くことができた。金曜の実習内容については学生に希望を聞いてくれたので、もう一度 Necropsy 実習をさせてもらった。日本ではできない内容で、大変興味深く、勉強になった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

9月25日（午前・午後）、27～30日（17時～20時）

希望を出して Emergency Unit に実習へ行った。

ドクター方はこちらが専門用語がわからないことをよくわかってきて、時間を割いて丁寧に説明してくれ、診断時の考え方も教えてくれた。全体を通してここでの実習で一番専門用語を覚えたように思うし、その後の medicine や KPS での実習でもこの経験は活きたと感じている。交通事故、貧血、虚血、FIP による腹水、痙攣、子宮蓄膿症、などの症例をみて、また献血センターについても説明してもらった。

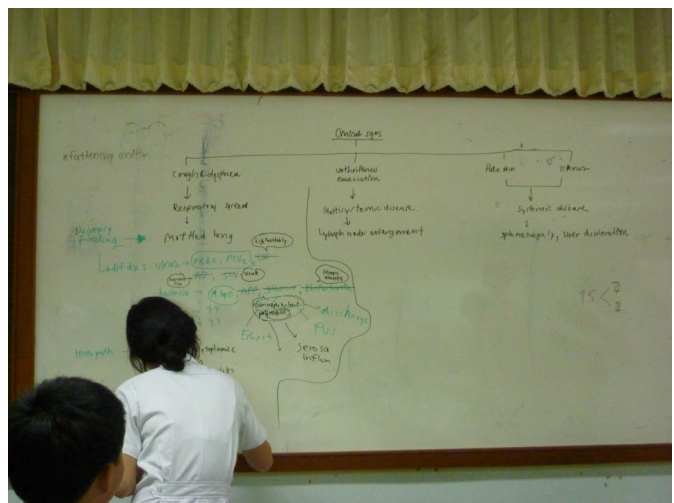
第3週目-V.P.HII

I で学んだ内容についての試験（PC）があった。簡単ではなく、よく理解し復習する必要のある内容だった。反省している。

後半は2グループに分かれて、Dog shelter での疫学調査だった。調査内容、目的、方法などをまとめてまずプレゼンし、翌日は実際に shelter へ行って調査を行った。私たちは比較的扱いやすい猫を調査対象に選んでいたが、事前資料と変わっている部分や予想と異なる部分があり、疫学調査の難解さを感じた。午後はボランティア活動として犬のシャンプーをする予定だったが、大雨だったため屋内待機だった。データを解析し、結果も含めてプレゼンを行ったが、不備な点が多かったのでレポートとあわせて後日再提出となった。

第4週目-Microbiology

初めてタイ学生と一緒に授業を受けることができ、とても楽しい一週間だった。授業内容は課題症例（稟告など）を出され、discussion を行って必要な情報はなにか（例えば病理、血液検査結果）考え、新しい情報を得ながら、DNA・RNA 抽出、PCR などを実際に行い、診断をしていくというものだった。タイ学生はよく自分の意見を発言し、discussion も体系付けて行われており、大変刺激を受けた。



第5週-Surgery

ドクターについてアシスタントとしてオペに入った。腫瘍科に2日、整形外科に3日行き、タイ学生がいない週だったため毎日3～4件のオペに入ることができた。レポート課題は出ておらず、エキストラの夜シフトは任意だったため1日だけに入った。間近でオペを見ることができ、ドリルを使わせてもらえたり、去勢を片方させてもらえたり、皮下縫合をまかせてもらえたり、日本の大学ではできないことをやらせてもらえた。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

第6週目-Medicine

本来はタイ学生のグループに入って各診療科をまわるが、この週はタイ学生がいなかったため、タイ学生の説明なしでも受け入れてもらえそうなところを臨床グループで既に2週まわってきた学生に聞き、それぞれ希望の診療科へ行った。私は Exotic clinic、Endoscopy、Urology clinic、Feline clinic へ行った。Exotic でカメのオペを見学したくて予定を組んだが、なかなか麻酔が効かず、Exotic が多めで Enterology と Ophthalmology に行きそこねてしまったが、1週間だけで色々な科を見ることができて興味深かった。ここでもレポート課題などはなかったため、farewell party の準備をする余裕があった。

BKK について

最終的に私を含む4人の基礎グループの酪農生は1週しかタイ学生と一緒に授業を受けることができなかった。臨床の学生が6週、もう片方の基礎グループが3週なのに対してあまりに少ないと感じた。私にとってはタイ学生との交流もこの留学の魅力の一つだったため、大変落胆した。また基本的に臨床2グループへの説明はしっかりあるのに対し、基礎は受けてみないとわからない、集合時間は臨床と同じなのになんの説明もなくただ待機ということが多かったのが辛かった。ここでタイ学生がいるのであれば彼女らに先生へのコンタクトを頼むこともできるが、前半はただ待つ時間が多かった。臨床以外の内容(pathoやVPH)は日本人学生とタイ学生で同じ内容を行いにくいのは理解できるが、せめて実習だけでも、もう少し増やすことはできないだろうか。このカリキュラムでも友人ができないことはないが、圧倒的にチャンスが少なすぎると感じた。オリエンテーションに来ていたタイ学生が基礎グループの学生のことも気にかけてくれてとてもありがたかった。各授業の先生方は専門用語が通じない状態でとても申し訳なかったが、根気よく説明を繰り返して下さり、生活面の心配もして下さって大変にお世話になった。

KPS (10月15日~10月24日)

Group Eとしてタイ学生4人、酪農生2人、北大生3人、東大生2人と6週間実習した。人数のバランスがよかったこともあって、全体でとても仲良くなることができた。

第7・8週目-Horse I II

プレゼン、担当の症例は違ったが、講義や実習はほぼgroupFと一緒に受けたため、その後の4週間もFのメンバーと仲良くすることができた。

最初に実験農場でPhysical Examinationの実習を受け、その後は入院患畜の毎日のPE、一部の来院患畜のPEを学生で行った。4頭の入院患畜にそれぞれ担当グループがついて、毎日の処置を行い、経過についてプレゼン、また別の4グ



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

ループに分かれてそれぞれ指定論文についてのプレゼンも行った。こちらでの論文発表では論文の内容だけでなく、その内容について our discussion を加える必要があり、大変新鮮で勉強になった。くじ引きに当たったため、馬の去勢のアシスタントに入ることもできた。この unit 中に歯医者に行くために一日欠席してしまったが、その日は hoof test の実習日だったため残念であった。最後の exam で跛行の問題を引いてしまい、友人に聞いただけでは実施することができず、悔しい思いをしたため、健康管理は必須だと痛感した。

第9週目-CattleⅢ (Nong pho)

日曜の朝に van で移動した。この van に日本学生は乗らなければいけないのか、タイ学生の車で行ってもいいのか統一したほうが良いと思う。朝着いてもやることはないが、ゆっくりできて私は好きだった。ここでは乳牛についての実習だった。月曜朝に乳房炎についての講義を受け、午後は往診へ行って CMT、SCC の実習を行い、この結果について金曜にプレゼンを行った。火曜～木曜は3グループに分かれて往診車に乗り、繁殖管理や往診、milking center の見学などへ行った。PE や皮下注、血液採取、直腸検査などをさせてもらえた。日本の講義で何度も勉強した Hardware disease の症例を見れたのが印象的だった。寮では人数の関係で私はタイ学生と同室だった。ほとんどの時間をリビングルームで過ごしたため同室で多くの話をすることはなかったが、お互いの習慣などがわかって楽しかった。金曜は KPS に戻らず、タイ学生が旅行を企画してくれたのでそのままコテージで一泊した。

第10週目-Wildlife

初日はゾウについての講義がメインで、先生に対して研究内容をそれぞれ説明した。私の研究内容は小馬鹿にされて悔しかったが、いま思えば反論できるだけの理解と英語力がなかったことに気づけたので勉強になった。火曜はカンチャナブリの野生動物保護キャンプへ見学へ行き、タイの野生のシカなどについて学び、野生のゾウを探した。声だけ聞くことができた。水曜はアユタヤの爬虫類館へ行き、ヘビの水槽掃除、ハンドリング、抗線虫薬投与、ビタミンC皮下注の実習をした。爬虫類のハンドリングは初めてで大変勉強になった。また居住環境や従業員の環境などについての説明も受けた。木曜はパタヤヘゾウの往診へ行った。ここでもウマの hoof test の知識が必要だったので、いま思えば horse unit で補講をお願いするべきだったと反省している。観光用の仕事をしているゾウ相手だったため、ゾウのスケジュールにあわせて診察する必要がある、タイへ来て初めて食事抜きとハードスケジュールだったが、最後はゾウに乗せてもらうことができ、楽しかった。パタヤは遠く、往診の大変さを感じた。金曜は主にウサギについての講義・discussion だった。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

第 11 週目-Bovine I

初日に今後 2 週についての説明があり、その後は 4 グループに分かれて往診、来院患畜の診察・オペだった。私はタイ学生と尿膜管遺残のオベのアシスタントをした。縫合はすべてタイ学生にまかされ、片手での縫合はとても大変そうだったが、学生のうちから経験させてもらえる環境にあらためて感動した。FMD の子牛が来院して衝撃を受けた。水泡症状は出ていなかったが、明らかに沈鬱状態だった。往診で診察したうち



のひとつを選んでプレゼンを作成、発表を金曜に行った。私の班は後産停滞による子宮炎について発表した。

第 12 週目-Bovine II

この unit は 3 日間しかなかったため、講義時間を短縮してくれ、初日の午後から削蹄実習を行わせてもらった。カセサート大考案の保定機は画期的だった。削蹄は日本でやった時と同じく難しかった。ゲタを付けるところも見学した。

火曜は講義を受けたあと妊娠鑑定・AI の練習を行った。妊娠鑑定はまだ確証を持って判定できるようにはなれなかったが、AI の練習は、日本でやった時はできなかったが今回何頭かで成功することができてとても自信になった。水曜は講義のあと麻酔実習だった。一人一頭与えられるため成功するまで実施することができた。カテーテル挿入、頸静脈からの採血・留置も行った。ネイティブの肉牛はアグレッシブで麻酔は難しかったが、うまく行った時の感動は大きかった。プレゼンは省略された。

KPS について

自転車は壊れやすく、頻繁に交換に行かなければならず面倒だったが、ペンタゴンのスタッフは時間外でも柔軟に対応してくれ、タイ学生も快く車に乗せてくれたためあまり不便は感じなかった。バンコクへの van も頻繁に出ているため買い物や観光へも行きにくさはあまりなかった。のどかで、学内で大体のことがそろい、生活しやすい環境だった。

全体を通して

英語は完全にタイなまりがうつってしまったが、専門用語を身につけ、自分の考えをもち、コミュニケーションをはかる力は確実についたと感じている。後輩には、専門用語をある程度は学習してくること、基礎系は特に疫学について復習してくること、語学留学ではないことを理解してくることが大事だと伝えたい。

かけがえのない経験ができた 3 ヶ月間だった。



氏名・大学名	清水佑基	酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 13 日 ～ 平成 26 年 12 月 7 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

学習成果

バンコクキャンパスでは、疫学、病理学、微生物学、小動物臨床を学びました。疫学ではデータの収集と処理の方法を、病理学では細胞の種類と小動物に多いがん細胞の形態と特徴を、微生物学ではタイの学生と与えられた情報からどのように診断していくか英語による討論をしながら学びました。小動物臨床の外科では、整形外科、腫瘍科、眼科等様々な手術に立ち会い、基礎系の研究室にいる私にとってはイメージしづらい手術というものをまじかで観察することができ、切除方法、器具の扱い方、縫合法を学ぶ事が出来ました。内科では、飼い主さんからの聴取から得られた情報から目の前でどのように診断するかその質問方法、身体検査のやり方を学んだ。

カンペンセンでは、牛と馬、そして野生動物の扱い方、麻酔方法、治療方法を学んだ。動物種ごとの身体検査方法、治療方法が異なり、始めは混乱したが、実際にやってみることで体で覚えることができたのは非常に有意義でした。



上の写真は疫学の授業のフィールドワークで訪れた犬の保健所の風景である。犬は500頭以上いるが、一頭一頭個別に管理されておらず、飼い主もただ飼育している状態である。食事は十分であるが、衛生面は悪く、どのくらい悪いのか統計学的に示し、改善すべき案などを授業で発表した。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



上の写真は Exotic unit で治療していた一部の動物の写真である。Exotic unitでは哺乳類、爬虫類、鳥類など野生動物すべてを扱っている。右下は、カメの総排泄腔障害の外科手術を行うためにカメに吸入麻酔をしている写真であるが、麻酔が効くまで1時間以上かかった。野生動物の治療には根気が必要であることを実感した。その中でもウサギの臨床数は多く、Exotic unit 最後の日はウサギの講義をして頂いた。日本でウサギの講義を聴ける機会は少ないので非常に新鮮であり、身になる話を聞くことができ大変貴重な経験をする事ができた。



海外での経験について

今回の留学では、タイ人との交流はもちろん勉強の方も一緒に学ぶことができ非常に有意義でした。中でも牛に麻酔をしたり、手術に立ち会いながら補助をさせてもらえたり、英語でのディスカッションなど日本では経験できない事を体験することができた事が何よりも嬉しく思いました。頭では理解していることも、実際にやってみる自分自身の至らなさも実感しました。帰国した今ではその口惜しさをバネに学習した事をもう一度復習し、理解を深め、今後に生かしていきたいと思っています。



上の写真は Microbiology で一緒に勉強したタイの学生と先生との一枚。
下の写真は Exotic unit でお世話になった先生との一枚。

世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書



これらの写真はカンペンセンでの写真です。カンペンセンでは主に大動物の勉強をしました。ここでもイギリス原産の山羊などの診療に立ち会う事ができ、また牛の出産に初めて立ち会う事ができました。これらの経験は、基礎系の僕には大きなものとなりました。



派遣プログラムの内容について

まず初めに申しておきたい事は、留学前にそのような事を学習するのか伝えてほしかったことである。今回の留学では、タイに行ってから勉強内容を知ることが多く、あたふたして勉強することが多く、またタイの先生方も何を教えればよいのか分からないという事態も発生しておりました。この留学プログラムは今回が初めてあるので、どのようなプログラムになるのか分かっていなかった部分はあるかと思いますが、来年の留学生には、必ず事前にどのような事を勉強するのか教えて頂きたいと思います。

そして、バンコクキャンパスでは疫学の 2 週間と外科の 1 週間の計 3 週間、タイの学生がいらないという中での学習は正直辛かったです。他の週ではタイの学生が日本の学生と一緒にいるというのを見てしまうと、不平等に感じてしまいました。タイの学生のローテーションの方も考えてプログラムを考えて頂きたいと思います。加えて、疫学は確かに重要科目ですが、2 週間は必要ないと思います。小動物臨床を 1 週間増やしてもよいと思います。

一学生の意見として、ここに記させて頂きました。今後のプログラムの改善案としてご検討ください。



これはカンペンセンで同じグループで勉強した日本人とタイの学生とお世話になった先生方との写真。

今後の進路への影響について

カセサート大学バンコクキャンパスでは、専門的な小動物臨床分野である眼科や腫瘍科、整形外科など外科手術に立ち会うことも多かったが、私が感銘を受けたのは内科であった。手術方法などの技術は先進的なものを取り入れており、実際にその手術に立ち会わせてくれ、更に解説をして頂けたので学ぶ事も多かったです。ですが、循環器、泌尿器、神経、救急などの内科分野では、症例一つ一つに対して得られた問題から、どのような事が疑え、そしてどのような検査をしていけばよいかなど、先生から問われ続け、その質問に対して答えていく内に、診断の重要性について考えさせられました。また、診断というものは知識があればできるものだと思っていたが、その知識を利用するに至るまでの情報収集の重要性に気づかされました。5～10分の診察の中で飼い主と会話し、触診、視診、聴診、時には臭い、味から診断するというのは基本的なものに見えてものすごく大事なことだと実感しました。

カンペンセンキャンパスでは、牛、馬に触れる機会が多く、また実際に治療や麻酔などをさせてもらった。留学前では、大動物診療にはほとんど魅力を感じていなかったのであるが、毎日真剣に取り組んでいる内に、大動物診療のダイナミックさと体を動かして治療していく方針に徐々に心惹かれていきました。

将来については、小動物臨床と決めていたのであるが、大動物臨床も視野に入れていきたいと思います。最後に、この留学プログラムに参加させて頂き、動物を扱う仕事に関して本当に多くの事を学び、タイの学生、先生と新たな親睦の和を築くことができました。この経験は私にとっては非常に大きなものとなりました。自分の足で訪れ、自分の目で物事を見つめないと分からないものだなと実感しました。このプログラムに参加できた事を心より感謝致します。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	武田 尚悟 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ~ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

1) 日付、実習先、施設名など（いつどこで何を）

9 月 15 日-9 月 19 日、 Public Health、バンケンキャンパス
 9 月 22 日-9 月 26 日、 Pathology、バンケンキャンパス
 9 月 29 日-10 月 3 日、 Public Health、バンケンキャンパス
 10 月 6 日-10 月 10 日、 Microbiology、バンケンキャンパス
 10 月 13 日-10 月 17 日、 Medicine、バンケンキャンパス
 10 月 20 日-10 月 24 日、 Surgery、バンケンキャンパス

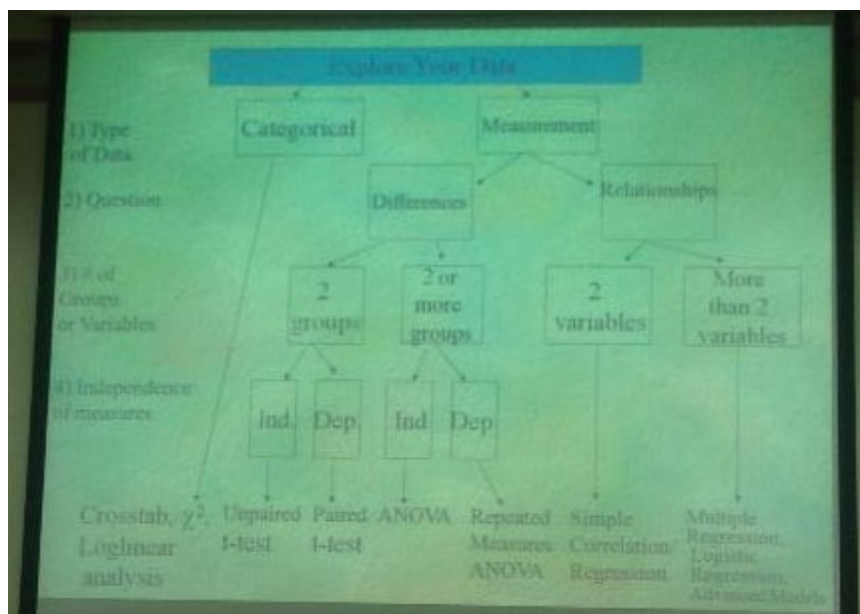
10 月 27 日-10 月 31 日、 Wildlife unit、カンペンセンキャンパス
 11 月 3 日-11 月 7 日、 Bovine unit、VTH-NP、ノンポーンキャンパス
 11 月 10 日-11 月 14 日、 Bovine unit、D-Farm、カンペンセンキャンパス
 11 月 17 日-11 月 21 日、 Bovine unit、VTH-KPS、カンペンセンキャンパス
 11 月 24 日-11 月 28 日、 Equine unit、カンペンセンキャンパス
 12 月 1 日-12 月 5 日、 Equine unit、カンペンセンキャンパス

上のスケジュールのように、毎週異なる場所で、異なる内容について学びました。

最初の 6 週間は、バンケンキャンパスにて公衆衛生、病理学、微生物学、小動物臨床を学びました。そのうち最初の 4 週は、基礎系のゼミの学生だけが小動物臨床以外について学びました。後半の 6 週間は、カンペンセンキャンパスに移動して牛と馬の大動物臨床と、野生動物について学びました。

2) 実習先で学んだことを大まかに

1 週目の公衆衛生では、疫学の技術を用いて小動物医療にとりかかりました。疫学概念を学び、病気の三原則、データの種類、カイ 2 乗検定、t-テスト、ANOVA、さらには NCSS ソフトウェアの使い方を教わりました。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	武田 尚悟	酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日	
派遣先	タイ カセサート大学	

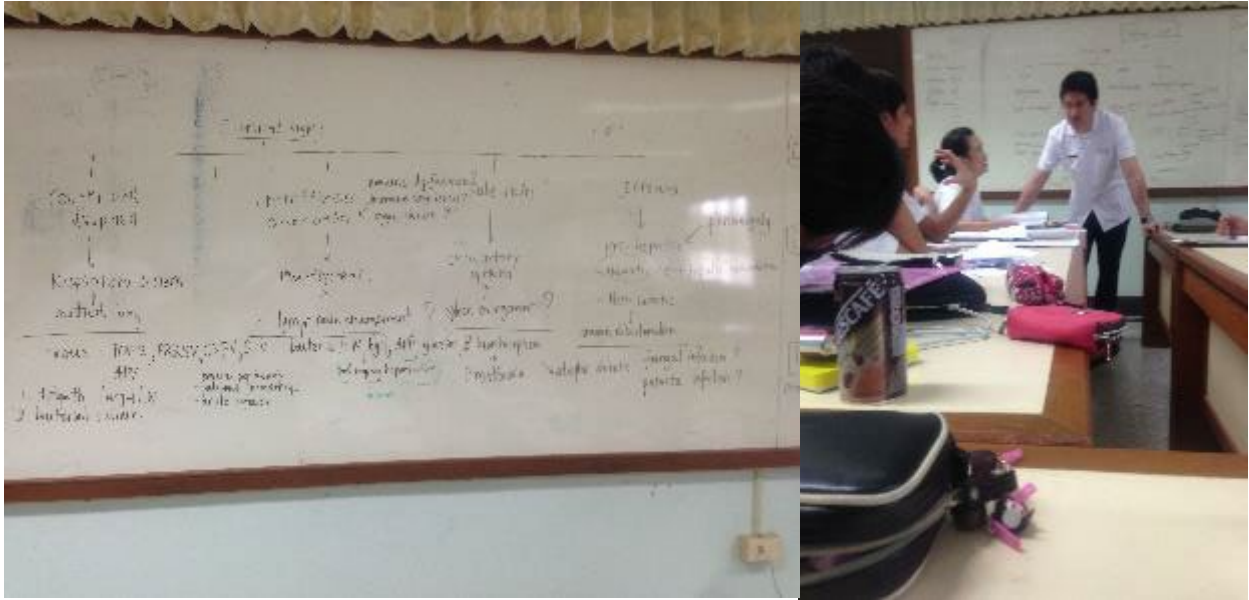
2 週目は病理学では、血液学、組織学、細胞学、病理解剖学などのほかの他分野での知識が必要であり、それらを合わせて総合的に学びました。特に病理解剖に関してはじめて行ったので、非常に興味でした。



3 週目は 2 クール目の公衆衛生であり、この週はドッショルターへ行き犬と猫についての疫学調査を行いました。わたしのグループは猫の脱毛についての疫学的な調査をおこなうため、全部で何匹いるかを数え、サンプルサイズを計算し、データを集め、データの統計処理を行いました。それらをまとめてプレゼンテーションしました。先生に指摘されたところは、修正し後日レポート提出しました。



4週目の微生物学では、初めてタイ人と一緒に授業を受けました。二つのグループに分かれて、感染が疑われる豚の症例についてディスカッションを行い、診断の考え方と、実際にPCRを用いた検査を行いました。最終的には、自分たちがどのようにして診断したかの根拠を交えながらプレゼンテーションを行いました

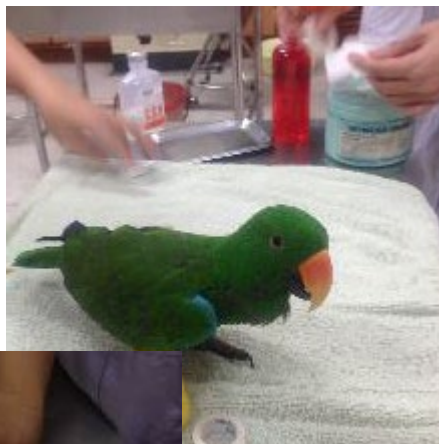


5週目の外科では、実際の手術室に入って腫瘍の摘出、去勢・避妊手術、ヘルニアなどの神経学的な手術など行いました。わたしのグループはタイ人がいないローテーション時期だったため、ほぼ毎日手術者のアシスタントとして入ることができ、一番近い位置で開腹切開、止血、摘出、縫合などを観察できたので、手術の流れなどを理解できました。簡単な止血、摘出、縫合などはドクターにやらせてもらったのはとてもいい経験になりました。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

6週目の内科では、Urology、Radiology、Cardiology、Enterology、Feline clinic、OPD、Neurology、Endoscopy、Dermatology、Ophthalmology、Exoticなどの多くの科をローテーションして実際にどのようなことをして、どのような知識が必要なのかを体験しました。わたしは1週間しかローテーションできなかったのですが、行けるところは限られましたが、その中で特に面白かったのはExoticでした。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

7週目から12週までの後半は、カンペンセンキャンパスに移って馬や牛の大動物臨床、ワイルドアニマルについてでした。私はもともと大動物臨床の道に進みたいと考えていました。所属教室は基礎系なので、タイでは色々な動物の臨床をみる事ができて、特に小動物と大動物の臨床を続けてみる事ができたので、自分の将来を考えることができました。私は大動物の実習は行ったことがありませんでしたが、小動物に関しては初めてだったので、とても貴重な経験になりました。なぜなら、小動物には小動物臨床の良さがあって、わたしにはそれを知らなくてはならないと思っていたからです。さらに、若い先生がどんどん手術をこなしていく姿は、みていて憧れました。また、疫学の授業を通して、防疫の考え方を学び今までの自分にはない視点が生まれたと感じています。今までは漠然と大動物臨床をしたいという思いだけでしたが、今回の留学を通していい意味で、自分の中に迷いが生まれました。

色々なものをみて、いろいろな人と話しました。目指すものは同じだが、描く姿は前とは変わったように思います。それは日本にいたときにも、大動物臨床で働く、たくさんの様々な立場の人に会い、話を聞き、そのたびに自分の中での夢の形が変わってきました。タイでは環境が全く違い、人としての考え方も文化も、生き方もすべてが違いました。今回の留学では、間違いなく自分に大きな変化がありました。だからこそ、これからも多くの現場を見て、話をきいて、目指す獣医師像をより明確にしていきたい。

獣医師としての仕事は動物を治してあげることですが、わたしは人と人のつながりを大事にして、農家さんや家族の方や、獣医療にかかわっている人たちと手を取り合いながらやっていける獣医師になりたい。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

カンペンセンキャンパスでは、グループ D としてタイ人、北大生、酪農学園大学生のメンバーで 6 週間を過ごしました。一番得られたものは、人への優しさでした。タイ人のわれわれ日本人に対する優しさは、日本では得られないものだと思います。日本の先生方、タイの先生方に支えられながら、タイの学生、そして日本の学生とこの貴重な時間を過ごせたことは、一生の思い出になりました。

3) そのほか生活の面について

タイの状況などもありぎりぎりまで行けるかどうかかわからないという状況であったため、しょうがない部分もあるとはおもいますが、タイにおけるスケジュールが事前にわかっていればよかったと思います。私は基礎系の所属教室であったために、バンケンキャンパスでの最初の 4 週は講義でした。今となってはいい経験ができたと思っていますが、授業を受けていた時には早く臨床をやりたいと思っていました。また、グループによってタイ人とのローテーションがずれるため、私のグループはバンケンキャンパスでは 1 週間しかタイ人と一緒に授業を受けられませんでした。来年同じプログラムができるならば、実際に受けることになる授業についてとその時にタイ人学生と一緒に受けられるように検討をお願いします。

バンケンキャンパス、カンペンセンキャンパスとそれぞれ近くのドミトリーに住まわせてもらいました。住むところはきれいでよかったのですが、部屋割りや料金などは、わからまま現地での指示に従う形になりました。とくに料金については、事前に知りたかったです。カンペンセンキャンパスのドミトリーは私ともう一つの部屋だけが定額となっており、ほかの部屋の倍近い請求になりました。料金などにかんしては統一するべきだと思いました。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	新田 温子 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

<2014 年 9 月 15 日～10 月 24 日：バンケンキャンパス>

Surgery unit:9 月 15 日～10 月 3 日

8:30～16:30 (extra:平日 17:30～20:30、土日 8:30～16:30)

1 日のスケジュールを見て、行くドクターと一緒に助手に入るタイの学生を確認する。

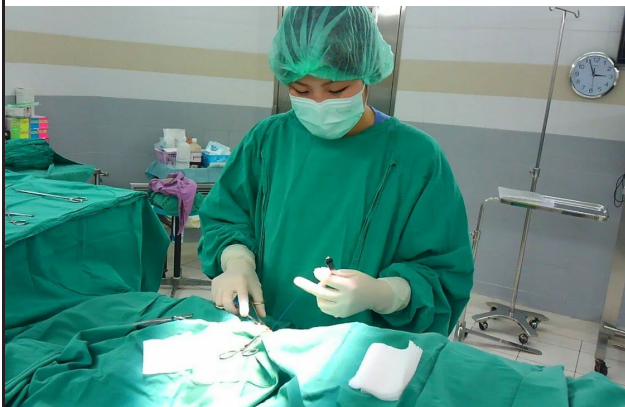
Orthopedics・soft tissue・anesthesia は帽子の色で分かれている。

1 日 1 case のレポートが宿題で、金曜日にまとめて提出。

→第 1 週目 (9 月 15 日～9 月 19 日) : orthopedics & extra (17:30～20:30)

毎日だいたい午前 2 つ、午後 2 つオペに入った。皮膚の縫合は基本的に学生が行うため、数をこなすことができた。また、骨折の症例のオペで、ドリルで骨に穴をあけプレートの取り付けをさせてもらえた。日本では、実際の症例でここまでさせてもらえないので、とても良い経験になった。Extra では、特に行くドクターや入るオペが決まっていなかったので、自分で助手に入りたいオペに参加できた。プレゼンテーションの発表が木曜日にあったため、月から水は、extra の後、0 時頃まで大学でプレゼン作りを行った。

分からないことだらけだったが、ドクターもタイ学生もどんな質問にも答えてくれ、理解するまで、何回も丁寧に教えてくれた。また、今まであったオペのイメージとは異なり、オペ室では常に音楽がかかっている、良い雰囲気の中オペが行われていた。慣れない英語、extra、プレゼン作りの集まり、ドームに帰った後のレポート、と今回の留学でこの第 1 週目が私にとって大変だったが充実していて一番印象に残っている週である。



→第 2 週目 (9 月 22 日～9 月 28 日) : soft tissue& 土日の extra

Soft tissue では、電気メスを用い、マスの切除を行った。一見簡単でも、実際やってみると力加減が難しかった。

土曜日には外科の試験があり、タイの学生とペアで担当のドクターのオペに入り、去勢を行った。術前の麻酔計画・身体検査・麻酔・気管挿管からオペが終わるまでが試験だった。タイの学生と協力して、ドクターの質問に答えながら、無事終えた。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

→第3週目（9月26日～10月3日）：Anesthesia

タイの学生が休みの週で、行くドクターは決まっていたが、忙しかったため、VTさんにも教えてもらいながらオペに入った。術中の麻酔管理は、VTさんがすべてしてくれたので、記録をとることがメインだった。毎日の宿題以外に、anesthesiaでは麻酔計画を2本立てる課題があった。どの症例がいいか、どういう麻酔薬がいいか、などドクターにアドバイスをもらい立てることができた。

プレゼンテーションは日本人2人で制作し発表した。

Medicine unit:10月13日～10月24日

8:30/9:00～16:30

毎日決められている診療科に行く。

オーナーさんとドクターの会話はタイ語なので、タイの学生が翻訳してくれた。時間がある時は、ドクターもしっかり説明してくれた。3週間で1つ興味をもった症例について、レポートを提出。（私はうさぎの流涙症の症例を選択した。）

カセサート大学は本学とは異なり、一次診療も行っているため、幅広く、多くの症例に関わることができた。また、診療科も充実していた。



→第4～6週目（10月6日～10月24日）

Dermatology：アトピー・フードアレルギーが一番多かった。皮膚掻爬法、針生検、塗抹法、セロハンテープ法、毛髪診、ウッド灯検査、除去食試験を行った。

Feline:症例数が多く、昼すぎまでかかることも。多いときには、3人のドクターがいたため、少人数で説明を受けることができた。FIP、FIV、Felv、歯肉炎、乾性角結膜炎などの症例を診ることができた。

Neurology：神経学的検査を学生が行い、どこに異常があるか、自分たちでしっかり考え、一つ一つの症例で理解を深めることができた。犬種としては、パグが多いように思われた。

OPD：OPDは一階と四階2ヶ所あった。OPD一階はドクターが診療を行っていたが、OPD四階は学生が主体となり診療をしていた。学生が診療を行うため、医療費も安くなっているとのことだった。学生が実際に診療を行える診療科があるのはとても良いと思った。



Exotic : 大学の附属病院に exotic の診療科があるのはとても魅力的だった。うさぎ、カメ、鳥、ハムスター、ハリネズミなど様々な種類の動物が来院していた。ドクターが exotic の獣医師になりたいのであれば、まずはうさぎについて勉強すべきだ、と言っていたが、本当にその通りで、うさぎの症例数が圧倒的に多かった。飼育しているうさぎで、鼻涙管に管を通す練習、耳介の静脈からの採血の練習をした。また、ドクターが日本人学生のために、うさぎの講義をしてくれたため、うさぎについてとても勉強になった。

入院しているスローロリス、カメの処置や、オペではフェレットの副腎摘出術やカメの結石摘出術をみることができた。



<2014 年 10 月 27 日～12 月 4 日 : カンペンセンキャンパス>

→第 7 週目 (10 月 27 日～10 月 31 日) : Wildlife

ゾウの講義を受けた。大学のゾウは数年前に死んでしまっていたため、実際に見ることはできなかった。カンチャナブリでは、動物保護施設に行った。ここでもゾウを見ることができなかったが、ゾウが通った道やゾウのフン、トラのフン (P. 4 の右の写真) など色々な発見があり面白かった。

アユタヤでは、REAL ZOO (Reptile&Exotic Animal Learning Zoo) へ行った。爬虫類について知らないことばかりだったので、とても興味深かった。ひとつひとつのゲージに習性を考慮した工夫がなされていた。ヘビには餌をあげ、カメは綺麗にし、日光浴をさせ、駆虫薬を投与した。

Evian では、鳥の解剖学、BCS の見方、採血を学んだ。

週末には、バンケンキャンパスの Exotic の診療にでた。右前肢にマスのあるハムスターや眼振・斜頸のあるうさぎを診た。





→第8週目（11月3日～11月7日）：ノンポー

初日は、乳房炎についての講義を受け、その後農家さんを訪れ、乳検査を行った。この日に集めたデータを用い、最終日に乳房炎のプレゼンテーションを行った。

ノンポーでは、毎日往診に行っていたが、全体的に牛の管理に対する意識があまり高くないように思われた。改善点が多く見られたため、タイでは、牛の獣医師が農家さんへしっかりと指導することが大切であると思った。

往診先では、採血や繁殖検診を行った。乳牛は直腸検査をさせてもらえたが、肉牛はとも活発で近づくことと危険とのことだった。

→第9週目（11月10日～11月21日）：講義&デモンストレーションファーム

タイでの口蹄疫、牛流行熱、ブルセラ症など牛の感染症について学んだ。バベシア病では、日本とタイでは分布する種類が異なっていた。他にも、タイと日本を比較しながらの講義だったので面白かった。

デモンストレーションファームでは、多くの牛で直腸検査の練習をしたため、最後には大体分かるようになった。麻酔実習は、講義を受けたのち肉牛（カンペンセン種）で行った。肉牛は活発で十分な注意が必要であった。ひとり一頭ずつ割り当てられ、硬膜外麻酔、傍脊髄ブロック、角神経麻酔、眼窩上神経麻酔をすべて行った。日本の実習では、なかなかひとりで全部行うことができないため、良い経験になった。削蹄では、見ているのと、実際にやってみるのとでは違い力の入れ方や程度が難しかった。他には、AIの練習や胃にチューブを入れる練習も行った。

プレゼンテーションは、牛白血病について発表した。私の研究室では、PCRを用いて検査を行っているが、カセサート大学では、大学独自の検査キットを用いて検査を行っていた。

→第10週目（11月17日～11月17日）：大学病院（牛）&往診

往診の日は、夕方まで大学に戻らず、1日7件ほど農家さんを訪れた。妊娠鑑定・乳房炎の治療・難産の介助・乳牛に肉牛の種を付けたために、胎児が大きく母体にダメージが大きく立てなくなった牛・乳牛の治療・削蹄・バッファローの削蹄などを見た。ペットとして飼育しているバッファローの削蹄は、蹄がとても硬そうだった。ある農家さんでは、牛達がドロの中に埋まっていた。今まで見たことのない光景だったので、とても驚いた。問題はないのかと聞くと、今のところ乳房炎にはなっていないので、良くはないが大丈夫とのことだった。

大学病院では、入院している牛の処置や農家さんが連れてきた家畜を診た。

プレゼンテーションの症例とは別に、ひとつ症例を選び、みんなでディスカッションする時間があつた。質問や意見を言いやすい雰囲気、理解を深めることができた。



→第11～12週目（11月24日～12月3日）：馬

初めに、馬の身体検査や拳肢の練習、年齢の見方、採血、留置を教わった。私は生産動物学ユニットに所属しているが、馬は初めてだったのですべてが新鮮だった。

各班に入院している馬が割り当てられ、毎日世話と治療をした。私の班は、下顎の骨折のオペをした馬でワイヤーとプレートが入っていた。折れた部位から二次感染が起っていたため毎日洗浄をし、また、噛むことができないため、流動食を作った。良くなっていく経過を見ていると嬉しくなった。プレゼンテーションは、この馬について発表をした。

私にとって、バンケンキャンパス・カンペンセンキャンパス共に毎日が勉強で、新しい発見があり刺激的だった。今回の交換留学プロジェクトに参加したことにより、タイの獣医療を知ることはもちろん、日本の獣医療についても比較することで、より知ることができたと思う。



世界展開力強化事業 タイ派遣活動報告書

氏名・大学名	湯本森矢 酪農学園大学
派遣期間	平成 26 年 9 月 18 日 ～ 平成 26 年 12 月 6 日
派遣先	タイ カセサート大学

(1) 日付、実習先、施設名（いつどこで何を）

9/15-9/19 バンケンキャンパスにて VPH I

9/22-9/26 バンケンキャンパスにて Path I

9/29-10/3 バンケンキャンパスにて VPH II

10/6-10/10 バンケンキャンパスにて Micro I

10/13-10/17 バンケンキャンパスにて Medicine

10/20-10/24 バンケンキャンパスにて Surgery

10/27-10/31 カンペンセンキャンパスにて Horse I

11/3-11/7 カンペンセンキャンパスにて Horse II

11/10-11/14 ノンポーンにて Cattle III

11/17-11/21 カンペンセンキャンパス、カンチャナブリ、パタヤにて Wildlife

11/24-11/28 カンペンセンキャンパスにて Cattle I

12/1-12/5 カンペンセンキャンパスにて Cattle II

(2) 学んだこと

① バンケンキャンパス

i) 疫学

1 週間は基本的な知識を学び、2 週目は animal shelter に行き実習を行った。1 週目の講義はサンプリングの仕方、分布、コホート研究などを Win Episcope 2.0 などのソフトを使って勉強した。自分の疫学に対して知らないことが多すぎて少し理解するのが大変だったが、それでもカセサート大学の先生方が丁寧に講義をしてくださってよかったです。2 週目は animal shelter に行き、2 つのグループに分かれ自分たちでテーマを決めてサンプリングからデータ解析を行い、最後に結果報告を行った。わたしたちのグループのテーマは” animal shelter のネコにおける脱毛の有病率”であった。一番難しく感じたのはサンプリング法とサンプルサイズだった。



図 1 : animal shelter の様子



ii) 病理

3日間は血球系やBlood parasiteなどを顕微鏡で見て、その形態とほかの細胞との区別などを学習した。2日間は剖検を行った。2, 3人で1つの検体が与えられ、剖検した後はどのようなメカニズムで検体の剖検結果が得られるのかなどの講義を受けた。



図2：剖検検体（子猫）

iii) 微生物

このときからタイの学生と合流した。おもに2つの豚農場の症例を渡されてみんなでディスカッションしていくスタイルであった。そこで結論の導き方がとても勉強になったし、今回の留学でこの導き方はタイと日本の学習法の違いのひとつだと思った。

まずはProblem Listの作成をする。ここではその農場の状況や患畜のclinical signなど問題となりそうな点を上げていく。この時点でわからないことは手分けしてネットや図書館で調べる。つぎに具体的にどのようなメカニズム(physiopathology)でそのclinical signが発現していくのかを調べていく。次に剖検結果、組織をみる。この過程はすべて学生中心で先生はそれを見ているだけで、組織や剖検結果を学生から要求されるとその結果を学生に渡すなどすべて学生が結論に至るまでのアプローチ方法を考えなければならない。そしてすべての要素を考えた上で仮説を立てる。その仮説を確かめるために何が必要かを考えて終了。すべての過程が学生中心でとても勉強になった。このような実りのある議論が成り立つのはタイの獣医学教育がとても優れているからだと思う。タイでは5年生で獣医師資格をとるので、6年生全員が一定程度同じレベルで知識を持っている。またタイではタイ語の教科書がとても少なく一般的に英語の教科書で勉強している。そのため英語で話す、書く、読むなどは日常的な行為である。それに対して日本は、6年生で免許を取るので5年生の時点では勉強不足なことは多くある。また、日本語の教科書もとても多く英語に触れる機会は少ない。このような違いが学習法に関係あるのではないかと私は思った。



図 3：学生みんなで話し合っている様子

iv) 小動物内科 (clinical rotation)

動物病院にいて1日に1つの科に所属して症例を見るスタイルだった。私は泌尿器、循環器、ネコの診療、OPD、画像診断科に行った。カセサート大学の病院はとても大きく、多くの科ごとに分かれていて、まるで人間の病院のような規模の大きさだった。どの先生も英語

で丁寧に指導してくださってとても良かったです。しかし1週間という短い期間では学習できることが少なく、もう少し長い期間勉強したかった。



図 4：カセサート大学の MRI



v) 小動物外科 (clinical rotation)

動物病院にいて主に整形外科、軟部組織、エマージェンシーに分かれて見学し、時には助手として手術に参加した。ここでも1週間という短い期間が少し改善すべき点だと私は思います。

Time	Sur.	OPD	Procedure	Time	Vol.	Case
9:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	9:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
10:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	10:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
10:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	10:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
11:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	11:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
11:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	11:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
12:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	12:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
12:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	12:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
13:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	13:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
13:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	13:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
14:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	14:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
14:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	14:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
15:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	15:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
15:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	15:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
16:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	16:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
16:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	16:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
17:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	17:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
17:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	17:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
18:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	18:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
18:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	18:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
19:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	19:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
19:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	19:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
20:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	20:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
20:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	20:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
21:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	21:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
21:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	21:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
22:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	22:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
22:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	22:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
23:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	23:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
23:30	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	23:30	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)
24:00	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	DR. K. H. M. (Surgeon)	24:00	Surgeon	DR. K. H. M. (Surgeon)

図5：手術の予定表。

②カンペンセンキャンパス

i) 馬

馬ユニットは病院に来る患畜の診療の見学を主に行う。そのため日によっては何もすることがない日もある。挙肢検査や採血などは学生が行うこともあった。また、プレゼンでは見てきた症例の中から症例を選び治療法や診断法について発表する。また、論文を読んでそのことについて発表もした。他大学やタイの学生とともにプレゼンを作ることで仲良くなるし、いろいろ得るものがあった。

ii) 牛 (ノンポーンで往診)

ノンポーンという郊外で1週間泊り込みで実習を行った。8:30から遅くても16:00に終わるので、とてもゆったりすごした。1週間共同生活をするので他大学の学生、同じ大学の学生、タイの学生とともに仲良くなった。今回のプログラムの中で一番楽しかったし充実したと思う。実習内容としては発情チェックや蹄病の治療など日本とあまり変わらないが、日本と大きく違うのは第四位変位がとても少なかった点である。これはタイの乳量が日本に比べてとても少ないからではないかと思う。



iii) wild life

このユニットでは日本では診療できないような動物を扱った。特に珍しかったのはゾウの診療である。心拍数や呼吸数、体温など普段普通にこなしている身体検査ですらとても難しく、心拍数は耳の静脈の拍動から判断する。また、歩き方からどの肢のどの部分が異常なのか判断した。



図6：心拍数を測ろうとするも測れない様子

iv) 牛（カンペンセンで往診）

キャンパスの近くの農場に往診しに行く。驚いたのは口蹄疫発生農場が結構存在し、それが普通になっていることだった。このように衛生問題や疾病撲滅に対してまだまだ意識が足りないと感じた。

v) 牛（デモンストレーションファーム）

キャンパスから少し離れたところに大学農場があり、その牛を使って実習する。AIや直腸検査、麻酔などいろいろなことを実際自分でできてとても勉強になったし、楽しかった。

(2) 生活の面

生活の面でははじめの1週間は食べ物があまりあわず常に下痢だった。ただ慣れてくると屋台など食べる場所がたくさんあっていろいろなタイ料理を食べることができた。また授業終わりなどはみんなでご飯に行ったり遊びに行ったりしてとても楽しかった。

あ と が き

本事業は平成 25 年度に採択され、1 年間の準備期間を経て本年度にはじめての学生派遣および受入を実施した。日本の 3 大学およびカセサート大学の計 4 機関で単位互換を含む相互学生派遣プログラムを作成し、これを運用できたのは田村学群長をはじめ直接運営に関わった推進委員のはたらきに負うところが大きい。しかし、実際の学生の派遣および受入は多くの本学教職員のご協力なしには実現しなかったものであり、担当者として心から感謝したい。一方、本年度の学生募集をかける段階ではタイ国の政情不安が伝えられ直前まで派遣の可否についての決定が保留されたにも関わらず、派遣準備を進める学生のモチベーションは高く維持されていた。派遣期間中の学生指導でカセサート大学を訪問した際に目にした生き生きとした学生の姿や帰国後に笑顔で体験談を語る学生の姿に接すると、若い学生たちが持つ潜在的な力を強く感じることができる。これが本事業にご協力頂いている多くの方々への最高のお返しに他ならない。

酪農学園大学獣医学群獣医学類

大学の世界展開力強化事業推進委員会

推進委員（コーディネーター） 片 桐 成 二

お問い合わせ

(情報は 2015 年当時のもので、現在使われていないアドレスが多くあります)

北海道大学 獣医学部

世界展開力強化事業担当

〒060-0818 北海道札幌市北区北 18 条西 9 丁目

TEL: 011-706-6108

e-mail: cvejt@vetmed.hokudai.ac.jp

東京大学 農学生命科学研究科

教務課 国際学務支援チーム

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

TEL: 03-5841-0583

e-mail: ryugaku@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

酪農学園大学

世界展開力強化事業担当

〒069-0836 北海道江別市文京大緑町 582

TEL: 011-388-4839

e-mail: sekaitenkaib@rakuno.ac.jp

カセサート大学 獣医学部

The Faculty of Veterinary Medicine

Kasetsart University

50 Ngam Wong Wan Rd. Jatujak, Bangkok 10900, Thailand

TEL: +66-0-2579-0113

チュラロンコン大学

Faculty of Veterinary Science

Chulalongkorn University

Henri Dunant Rd. Pathumwan, Bangkok 10330, Thailand

TEL: +66-2-218-9578



CVE



C V E

**Consortium for Collaboration of Veterinary Education
between Japan and Thailand**